筑波大学博士（言語学）学位請求論文

現代日本語の広義全称表現に関する研究

大塚　貴史

2020 年度

目次

第１章　序論　1

1.1　本論文の目的 1

1.2　本論文の背景 5

1.3　本論文の意義 8

1.4　本論文の構成及び各章の概要 9

第２章　先行研究と本論文の位置付け　12

2.1　はじめに 12

2.2　宮城（2016） 12

2.2.1　仁田（2002）の示唆 12

2.2.2　「完全性の副詞」の分類 14

2.3　佐藤（2017） 16

2.3.1　「ばかり」の分析 16

2.3.1.1　定延（2001）の指摘 17

2.3.1.2　佐藤（2017）の指摘 19

2.3.2　「〈全該当〉を表す語」の分類 21

2.4　本論文の位置付け 22

第３章　「全否定」と広義全称表現　25

3.1　はじめに 25

3.2　先行研究と問題の所在 26

3.2.1　共起可能な述語の差について 26

3.2.2　例外の（非）許容について 29
3.2.3　問題の所在 31
3.3 「まったく」と「全然」の意味について 31
3.3.1　形容詞の否定形式の共起傾向 31
3.3.2　状態性述語と「極限」「程度性」の関係 32
3.3.3 「まったく」の意味 36
3.3.4 「全然」の意味 39
3.3.5 「全然」が例外を許容する要因 42
3.4　広義全称表現の「全否定」ととりたて詞の「限定」 43
3.4.1 「まったく」「全然」と「だけ」「ばかり」の共通性 43
3.4.2　比較文における容認度 45
3.5　おわりに 46
3.5.1　本章のまとめ 46
3.5.2　先行研究が指摘する「まったく」「全然」と「決して」の差 47

第 4 章 「数量」と広義全称表現　49

4.1　はじめに 49
4.2　先行研究 50
4.2.1　先行研究から導かれる各表現の共通点 50
4.2.2　各表現の相違点について 52
4.2.2.1　森田（1989）の指摘とその問題点 52
4.2.2.2　飛田・浅田（1994）の指摘とその問題点 54
4.2.2.3　佐藤（2017）の指摘とその問題点 56
4.2.3　本章の方針 56
4.3 「全部」と「全員」 57
4.3.1　単一個体に対する使用可能性と指示対象 57
4.3.2　単一個体のモノと人の相違点 60
4.3.3 「全部」と「全員」の共通点と相違点 62

4.4 「みんな」 62
4.4.1 指示対象と単一個体に対する使用可能性 63
4.4.2 「全部」「全員」との相違点について 64
4.4.2.1 母集合の構成要素の全数に言及する場合 65
4.4.2.2 母集合の構成要素が具体的に想定されない場合 66
4.4.2.3 「全部」「全員」と「みんな」の相違点 67
4.4.2.4 「みんな」が例外を許容する要因 70
4.4.3 「全部」と「全員」と「みんな」の相違点 71
4.5 「すべて」 71
4.5.1 「全部」との共通点 71
4.5.2 「全部」との相違点 72
4.5.3 「名詞＋のこと」に関する指摘を踏まえた考察 75
4.5.4 「N の Q」に関する指摘を踏まえた考察 78
4.5.4.1 西田（2004）と田中（2014）の指摘 78
4.5.4.2 「N のすべて」について 82
4.6 本章のまとめ 84

第 5 章 「頻度」と広義全称表現 86

5.1 はじめに 86
5.2 先行研究の指摘と問題の所在 87
5.2.1 「いつも」と「常に」の共通点に関する指摘とその問題点 87
5.2.2 「いつも」の意味に関する指摘とその問題点 90
5.2.3 「常に」の意味に関する指摘とその問題点 93
5.2.4 問題点の整理 95
5.3 「いつも」の意味について 96
5.3.1 「始まりの時点」の制約の再検討 96
5.3.1.1 仁田（2002）の示唆 96
5.3.1.2 「ことがある」と「時間詞」の共起制約 97

5.3.1.3 「いつも」の意味特徴 99
5.3.2 「いつも」が例外を許容する要因 100
5.3.3 「いつも」の意味 101
5.4 「常に」の意味について 101
5.4.1 「始まりの時点」の制約の再検討 102
5.4.2 「恒常性」の再検討 102
5.4.2.1 飛田・浅田（1994）の問題点 102
5.4.2.2 頻度を表す副詞と「恒常的な状態」の関係 103
5.4.2.3 「常に」の意味特徴 104
5.4.3 「常に」の意味 104
5.5 本章のまとめ 106

第 6 章 「強調」と広義全称表現 108

6.1 はじめに 108
6.2 先行研究と問題の所在 109
6.2.1 「不利な前提」という指摘とその問題点 109
6.2.2 「部分否定」という指摘とその問題点 110
6.2.3 「強調」という指摘とその問題点 112
6.2.4 本章の方針 113
6.3 「決して」の意味について 113
6.3.1 裏に持つ「条件的関係」の不成立 113
6.3.1.1 森田（1989）の示唆と「逆接」の意味 113
6.3.1.2 「逆接」から見る「決して」の意味 114
6.3.2 ~q の非一回性 115
6.3.3 「決して」の意味 117
6.4 「決して」の意味と「部分否定」「強調」の関係 119
6.4.1 「決して」と「部分否定」 119
6.4.1.1 「話し手の基準」に照らした判断 119

6.4.1.2 「決して」を含む文が「部分否定」になるとされる背景 120
6.4.2 「決して」と「強調」 123
6.4.2.1 「条件の不定化」 124
6.4.2.2 「決して」が「強調」の役割を担うとされる背景 124
6.5 本章のまとめ 125

第 7 章 結論 127

7.1 本論文のまとめ 127
7.1.1 広義全称表現の意味的多様性 127
7.1.2 広義全称表現における 2 つのタイプ 131
7.2 今後の課題と展望 132

参考文献・参考資料 134

参考文献 134
参考資料 139

既発表論文との関係 140

第 1 章

序論

1.1　本論文の目的

本論文の目的は，現代日本語における広義の「全称」に関わる表現の意味的な多様性を明らかにすることにある。

現代日本語には，その働きが「全称」という用語によって説明される表現がある。その最たるものは，いわゆる量化詞（数量詞）の一種に当たる「全称量化詞」（普遍量化詞，全称数量詞）と呼ばれるものである。その例としては「全部」「全員」「みんな」「すべて」などが挙げられる。例えば，「全部」「全員」が用いられた次の例では，「これら」「彼ら」に含まれるモノや人が漏れなく「私のもの」「学生」に該当することが表されている。

(1) a.　これらは全部私のものだ。
　　b.　彼らは全員学生だ。

つまり，「全部」「全員」は，ある集合に含まれる要素を 100% 指示する働きを持っている。これが，これらの表現が「全称」の働きを持つとされる所以である。

「全称」という概念は，基本的には量化詞に適用されるものであるが，先行研究では頻度を表す表現も量化に関わるとされている。このことから，その頻度を表す表現の一部にも「全称量化詞」の一種と捉え得る表現があると考えられる。例えば，「常に」「いつも」がこれに当たる。

(2)　　彼の言うことは｛常に／いつも｝正しい。

『日本語学大辞典』（2018 年, 東京堂出版）の「数量詞」の項目（北原博雄執筆）では，英語の‘always’や‘sometimes’は数量化副詞と言われ,「場合（case）を量化する」性質を持ち，特に‘always’は「『すべての』という意味の普遍量化（universal quantification）の解釈を受ける」とされている。また，‘always’‘sometimes’に対応する日本語の「いつも」「時々」も「数量化副詞と同等の性質を持つ」とされる[1]。従って，‘always’に対応する「いつも」，並びに「いつも」との意味的な類似性が指摘されている「常に」も「普遍量化」（「全称量化」）の解釈を受けると言える[2]。このことは，（2）を次のように言い換えた場合，結果的に（2）と同様の解釈が得られることからも示唆される。

（3）　彼の言うことは｛全部／みんな／すべて｝正しい。

一方,「全称量化詞」が否定文で用いられた場合も，当該の対象の 100% が述語で表される事態に該当することが表される。例えば次の例の場合,「これら」「彼ら」の 100% が「私のものでない」「学生でない」こと，言い換えれば「私のもの」「学生」に当たるものが皆無であることが表されている[3]。

（4）a.　これらは全部私のものでない。
　　b.　彼らは全員学生でない。

---

[1] ただし，その詳細については「検討を要する」とも述べられている（『日本語学大辞典』「数量詞」）。

[2] 原田・本多（1997）でも,「いつも」は「全称量化された時間をあらわす」（原田・本多 1997: 39）とされている。

[3] （4）の文は,「全部」「全員」が否定の作用域に含まれるか否かで解釈が異なる。例えば,（4a）は（i）のように「全部」が否定の作用域外にある場合は「私のものは皆無」という解釈になる一方で,（ii）のように「全部」が否定の作用域内にある場合は「私のものも一部ある」という解釈になる。

（i）　全部［私のものでない］　（私のものは皆無）
（ii）　［［全部私のもの］でない］（私のものも一部ある）

これは，「全称量化詞」が「全否定」に関わり得ることを示しているが[4]，同様の特徴は，（基本的に）否定と呼応する副詞の一部にも見られる。例えば，「まったく」「全然」や「決して」などがこれに当たる。

（5）a.　この小説は｛まったく／全然｝面白くない。

　　b.　あなたのことは決して忘れない。

従来の研究において，「まったく」「全然」は程度に関わる表現，「決して」は「強調」（あるいは「強意」）に関わる副詞などとされており，量化詞として扱われることはほとんどない[5]。しかし，否定文において「全否定」に関わる点では「全称量化詞」と共通している。

本論文では，「全部」「全員」などの「全称量化詞」と「常に」「いつも」という一部の頻度を表す副詞に，否定文において「全称量化詞」と共通する特徴を持つ「まったく」「全然」や「決して」という（基本的に）否定と呼応する副詞を加え，まとめて「広義全称表現」と呼称する[6]。第 3 章以降では，この広義全称表現について，従来（少なくとも積極的には）意味的な区別が図られてこなかった表現が，実際には少なくない相違点を持つことを論証し，その意味的な多様性

---

[4] 特に，「全称量化詞」として扱われることがある「不定語＋も」（「何も」「誰も」など）は「否定極性項目」あるいは「否定対極表現」（Negative Polarity Item: NPI）であり，「全否定」に関わることをその基本的な職能とする。

[5] 一部の先行研究では，これらはある種の量に関わるものと捉えられている。例えば小柳（2005）は，ある花が咲くか否か（咲きそうか否か）といった「事態の成立する蓋然性」（小柳 2005: 36）を「成立程度量」と呼び，咲いた花の咲き具合を「存在程度量」と呼んでいる。小柳（2005）は，前者の量を表す副詞として「絶対に」「きっと」「多分」などを，後者の量を表す副詞として「非常に」「全然」「大して」などを挙げている。

[6] これらをまとめて扱うのは，一般には「全称」に関わるものとしては論じられない表現も，（特定の環境においては）「全称量化詞」と共通（類似）する振る舞いを見せることに基づくものであり，「常に」「いつも」，「まったく」「全然」や「決して」なども量化詞，あるいは狭義の「全称量化詞」として扱うべきであるという旨の主張をするものではない。そのため，本論文では「広義全称表現」という名称を採用した。

を明らかにする。

また，広義全称表現は，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表す（という直観がある）。例えば「まったく」について，飛田・浅田（1994）は「肯定の可能性が完全に存在しないことを表す」（飛田・浅田 1994: 508）と指摘している。しかし，一部の表現についてはそうとは言えない場面でも用いられ得るものがある。例えば尾谷（2008）は，「全然」を含む次の例は「先生の発言をある程度聞いていた場合」（尾谷 2008: 104）でも成立するとしている。

（6）　彼は先生の話を全然聞いてない。　（尾谷 2008: 105，下線は筆者）

このように，広義全称表現に含まれるものでありながら，「そうでないものや事態」の存在が認められる場合にも用いられ得ることが指摘されている表現としては，「全然」以外に「みんな」「いつも」が挙げられる。本論文は，これらと意味的に類似する表現との相違点を明らかにする中で，このような現象が「全然」「みんな」「いつも」に観察される要因を明らかにすることも目的とする。

なお，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表す点では，いわゆるとりたて詞のうち，「限定」を表すとされる「だけ」「ばかり」なども共通している。例えば，日本語記述文法研究会編（2009）では，「だけ」を含む次の（7a）について（7b）のように述べられている。

（7）a.　時間がなかったので，第 1 章だけ読んだ。

（日本語記述文法研究会編 2009: 46）

b.　「第 1 章」の同類のほかの要素，つまりほかの章については読まなかったことが暗示される。（日本語記述文法研究会編 2009: 46，下線は筆者）

一部の先行研究には，「限定」を表すとりたて詞（の一部）が「全称量化詞的な

性格」を持つと指摘するものもあるが[7]，「限定」と「全称」の関係については慎重に議論する必要があるため，本論文では「だけ」「ばかり」は広義全称表現に含めない。しかし，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表すという共通点があることに鑑み，この「だけ」「ばかり」と広義全称表現の関係性についても視野に入れて議論する。

1.2　本論文の背景

広義全称表現は，従来，量化詞（数量詞），頻度を表す副詞，（特に否定文脈において）程度を表す副詞などの枠組みの中で，「大」「多」あるいは「小」「少」という素性を持つ表現に対して，「全」（あるいは「極大」）という素性を持つものとして位置付けられてきた。このうち，「大」「多」あるいは「小」「少」という素性を持つ表現については，意味的類似性が指摘される表現同士の異同に関する研究の蓄積があり，その多様性が明らかにされてきている[8]。一方で，「全」という素性を持つ表現，即ちここでの広義全称表現については，その内部の差は十分に議論されておらず，基本的に一括して扱われてきた。

しかし，一部の先行研究では，意味的に類似する広義全称表現でも，その振る舞いが完全な一致を見るわけではないことが示唆されている。例えば，飛田・浅田（1994）は「みんな」「すべて」「全部」が類義表現であるとしつつも，これらの意味や特徴には次のような相違があると述べている。

---

[7] 原田・本多（1998）は，「全称量化詞」の「全員」を含む次の（iii）に対し，（iv）はこれを含まないが，「『会の発起人』の集合 P の構成要素 p_1，p_2，…，p_{11} のすべてが『女性だ』という属性を共有することに変わりはない」（原田・本多 1998: 434）とし，この現象は「『ばかり』の全称量化詞的な性格を示す」（原田・本多 1998: 434）と指摘している。

（iii）　会の発起人 11 名は，全員，女性ばかりだ。　（原田・本多 1998: 434）

（iv）　会の発起人 11 名は，女性ばかりだ。　（原田・本多 1998: 434）

[8] 数量や程度が「大」あるいは「小」であることを表す表現の多様性については沖（加藤）（1983, 1997），渡辺（1990），金（2016），疏（2018）などを，頻度が「多」あるいは「少」であることを表す表現の多様性については久米（1968, 1971），八尾（2007, 2009），仁田（2002）などを参照されたい。

(8) a. 〔筆者注 :「みんな」は〕構成要素を一つ一つ吟味することなく，まとめて一つに扱う暗示がある。 (飛田・浅田 1994: 518)

b. 「すべて」は構成要素を吟味した結果，全体を通してある一つの視点で一貫している暗示がある。 (飛田・浅田 1994: 518)

c. 〔筆者注 :「全部」は〕総体を表す語であるが，個々の構成要素に視点がある。 (飛田・浅田 1994: 221)

ただし，この飛田・浅田（1994）による指摘は具体的に例証されているわけではなく，どのような場合にこの相異が観察されるのかは不明である[9]。「常に」と「いつも」，「まったく」と「全然」などについても，相違点があることを指摘する先行研究が存在するものの，十分な分析がなされているとは言えない。

また，このうち「まったく」と「全然」について，武内（2015）は使用可能となる場面が異なることを指摘している。例えば，「まったく」が用いられた次の（9a）は「どこを見渡しても雪が完全に積っていない状態」（武内 2015: 182）でなければ容認されないが，「全然」が用いられた（9b）は「2 メートルの積雪を見ながらの発話」（武内 2015: 182）としても適切であると述べている。

(9) a. 今年は当地ではまったく雪が降らない。（武内 2015: 181，下線は筆者）

b. 今年は当地ではぜんぜん雪が降らない。（武内 2015: 182，下線は筆者）

これは，「まったく」は例外を許容しないのに対し，「全然」は例外を許容し得る

[9] 飛田・浅田（1994）は，「すべて」と「全部」については次の例における適格性が異なることを指摘している。

(v) （本のタイトル）パソコンのすべて。（飛田・浅田 1994: 210，下線は筆者）

(vi) #パソコンの全部。（飛田・浅田 1994: 211）

ただし，この差と（8b）（8c）の差の関係については述べられておらず，（v）（vi）の差を以って（8b）（8c）の相違が例証されているとは言えない。なお，（v）（vi）において「すべて」と「全部」の適格性が異なる要因については，第 4 章で検討する。

ということを意味している。「全然」が例外を許容し得ることは他の先行研究でも指摘されている。例えば尾谷（2008）は，次の（10a）は「先生の発言をある程度聞いていた場合」（尾谷 2008: 104）でも用いることができ，（10b）も「1%も理解できていないという解釈には限られない」（尾谷 2008: 104）と述べている。

（10）a.　彼は先生の話を全然聞いてない。　（＝（6））

b.　お前はこの仕事の重要性が全然分かってない。

（尾谷 2008: 105，下線は筆者）

前述の通り，広義全称表現は，典型的には典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表すと考えられることから，「全然」が例外を許容し得る要因については一定の説明が求められる。

なお，その要因について，従来は「関連性理論」における「言葉の緩い用法（loose use）」（Sperber & Wilson 1995），あるいは「ルース・トーク（loose talk）」（Sperber & Wilson 1995）という観点から説明されることがあった。Sperber & Wilson（1995）は，「思考の最適な解釈的表現は，聞き手にその思考について処理するに値するだけの関連性がある情報を与え，できるだけ処理労力が少なくてすむようにしなくてはならない」（Sperber & Wilson 1995: 284）と述べている。例えば，月 797 ポンド 32 ペンスの収入がある場合，友人に現在の収入を尋ねられた際に，次の（11a）のように「厳密に字義的で事実に即した答え」（Sperber & Wilson 1995: 284）と，（11b）のように「字義性の度合が落ちて，厳密に言えば偽とわかっている」（Sperber & Wilson 1995: 284）答えのどちらをも選択できるとされる。

（11）a.　I earn £797.32 pence a month.（月 797 ポンドと 32 ペンスです。）

（Sperber & Wilson 1995: 284，下線は筆者）

b.　I earn £800 a month.（月 800 ポンドです。）

（Sperber & Wilson 1995: 284，下線は筆者）

特に尾谷（2008）は，この観点から（10）の「全然」の振る舞いを説明している。つまり，（10）は十全性が厳密には問われない文脈であるために，「全然」を「誇張表現としてルースに使用でき」（尾谷 2008: 105），それによって例外が許容され得ると主張するのである。

確かに，「全然」が例外を許容し得ることについて，Sperber & Wilson（1995）の言うような「言葉の緩い用法」や「ルース・トーク」が関与している可能性もないわけではない。しかし，武内（2015）が指摘しているように，「全然」と意味的に類似する「まったく」は例外を許容しにくい。この点に鑑みれば，「全然」の振る舞いは「言葉の緩い用法」や「ルース・トーク」のみによって説明し尽くすことはできないと言える。広義全称表現が例外を許容する現象は，「全然」の他にも「みんな」「いつも」にも観察されているが，従来十分に検討されてこなかったそれぞれの意味を分析することで，その現象の要因を明らかにすることができると考える。

1.3　本論文の意義

本論文には，大きく 2 つの意義がある。

第 1 に，従来基本的に一括して扱われてきた広義全称表現の意味的相違点を明らかにすることは，数量，頻度，程度といった枠組みの全体像を明らかにすることの一助となる。前述の通り，これらの枠組みの中で論じられる表現のうち，「大」「多」あるいは「小」「少」という素性を持つ表現については既にその意味的異同が明らかにされつつある。しかし，「全」（あるいは極大）という素性を持つ表現も紛れもなく数量，頻度，程度という枠組みの中で捉えられ得るものであり，その表現の分析が不十分なままでは，それぞれの枠組みの全体像を明らかにすることはできない。前述の通り，本論文は広義全称表現の意味的多様性を明らかにしようとするものであり，数量，頻度，程度という枠組みの内部を整理し，その全体像を捉えることを目的とするものではない。しかし，副次的にその一助

となる研究であると考える。

第 2 に，従来異なる枠組みで扱われてきたものを広義全称表現としてまとめて取り上げることで，その種の表現に，数量，頻度，程度といった枠組みを超えて大きく 2 つのタイプが存在することを明らかにすることができる。1 つは，「そうでないものや事態」の存在が認められないという直観に沿った「例外を許容しないタイプ」，もう 1 つはその直観に反する「例外を許容するタイプ」である。例えば，「全然」は例外を許容することが指摘されているが（1.2 節），この表現のみに注目した場合，その現象は「言葉の緩い用法」や「ルース・トーク」のみによって説明されかねない。前述の通り，その説明が必ずしも十分でないことは，「まったく」と「全然」など，意味的に類似する表現同士を比較することで明らかになるが，それは程度，あるいは「全否定」という枠組み内部の差ということに留まる。一方で，本論文ではそうした枠組みを超えてこの現象を観察することで，広義の「全称」（「全」ということを表そうとする操作）そのものに 2 つのタイプがあることを明らかにすることが可能となる。

1.4　本論文の構成及び各章の概要

本論文は次のような構成をとる。

第 1 章　序論
第 2 章　先行研究と本論文の位置付け
第 3 章　「全否定」と広義全称表現
第 4 章　「数量」と広義全称表現
第 5 章　「頻度」と広義全称表現
第 6 章　「強調」と広義全称表現
第 7 章　結論

第 1 章では，本論文の目的，背景，意義について述べた。

第 2 章では，広義全称そのものが分類され得ることを示唆する先行研究を概観し，本論文から見るその研究の成果と課題を整理する。その上で，本論文の位置付けについて述べる。

第 3 章では，「だけ」「ばかり」との関係性も視野に入れた本論文の枠組みを示す都合上，広義全称表現の中心となる表現（「全部」「常に」など）ではなく，「全否定」に関わる「まったく」「全然」について論じる。これらの表現については，従来，特に程度についての「全否定」に関わるという共通点を持ちながらも，共起可能な述語が一部異なること，「全然」が例外を許容し得ることなどが指摘されている。これに対して本章では，「まったく」と「全然」は差分が皆無であることを表すものと程度が甚大であることを表すものに分けられることを主張し，その違いが先行研究で指摘されている現象の要因であることを示す。また，この差が先行研究でも扱われている「だけ」と「ばかり」の差とも共通し，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表す表現のタイプ分けに寄与することを示す。

第 4 章では，広義全称表現の中心となる「全称量化詞」の「全部」「全員」「みんな」「すべて」について論じる。これらの表現については，従来，前提となる母集合を要する点で共通すること，一方で指示し得る対象の質（モノか人か）や数（単一個体か複数個体か）が異なること，「みんな」が例外を許容し得ることなどが指摘されている。これに対して本章では，「全部」「全員」「すべて」はいずれも母集合の構成要素を指示する点で共通するのに対し，「みんな」は母集合に当たる集団（あるいはモノの集まり）自体を指示するという点で異なることを明らかにする。また，特に「全部」と「すべて」には共通点が多く認められる一方で，先行研究においてはその適格性に差が生じる場合があることが指摘されているが，それは両者の単一個体に対する捉え方の差と構文の特徴に起因することを主張する。

第 5 章では，「全部」「全員」などと同様に広義全称表現の中心となる「常に」「いつも」について論じる。これらの表現については，従来，問題となる期間の開始時と発話時の距離に制約があること，さらに「常に」については「恒常性」

を暗示すること,「いつも」については例外を許容し得ることが指摘されている。これに対して本章では,「常に」が用いられるに当たっては当該事態が変化するための条件が想定可能であることが重要であること,「いつも」には事態の生起時や生起回数を特定化しない特徴があることを明らかにする。

第 6 章では「決して」について論じる。「決して」は,「全否定」に関わる点で第 3 章において扱う「まったく」「全然」と共通するが，先行研究において議論される枠組みが異なることから，これらとは章を分けて論じる。本章では,「決して」の意味，並びに先行研究における指摘が「条件的関係」（p ならば q）の観点から統一的に説明可能であることを明らかにする。また,「全否定」（あるいは否定の「強調」）を表すとされる指摘が,「決して」が特定の文脈で用いられた場合に生じる語用論的な効果を捉えたものであることを明らかにし，その点で「まったく」「全然」とは異なるものであることを示す。

第 7 章では，第 3 章から第 6 章までの議論から明らかになった広義全称表現の意味的多様性についてまとめる。また，広義全称表現が，差分が皆無であることを表すタイプと程度が甚大であることを表すタイプに大きく分けられることを主張する。最後に，今後の課題と展望について述べる。

第 2 章

先行研究と本論文の位置付け

2.1　はじめに

前述の通り，一部の先行研究には，意味的に類似する広義全称表現の相違点を指摘するものがある。しかし，その指摘については第 3 章以降の各章で取り上げることとし，本章では本論文で言う広義全称そのものに注目した先行研究として宮城（2016）と佐藤（2017）の指摘を概観した上で，本論文から見るこれらの研究の成果と課題を整理し，本論文の位置付けを示す。

2.2　宮城（2016）

まず，宮城（2016）は，「事態の様態や変化がある完全性を有する状態（極限的な程度）にあることを表す」（宮城 2016: 5）という点で共通する「すっかり」「きれいに」「完全に」の 3 つを「完全性の副詞」と呼び[1]，その相違点の分析を通じて，「完全性」には 3 つの「表現の型」（宮城 2016）があると指摘している。

2.2.1　仁田（2002）の示唆

そもそも，宮城（2016）が「すっかり」「きれいに」「完全に」を問題にする背景には仁田（2002）がある。仁田（2002）は，現代日本語の副詞を「結果の副詞」「様態の副詞」「程度量の副詞」「時間関係の副詞」「頻度の副詞」に分けるが，特

[1] 宮城（2016）は，「完全性」を次のように規定する。

(i)　「完全性」の規定 : 事態の表す内容や捉え方が極限的なあり方へ限りなく接近して一致したと見なされる状態。（宮城 2016: 6）

に「様態の副詞」と「程度量の副詞」に属する一部の働きについて，「完全性」という用語を用いた説明を施している。

まず，仁田（2002）は，「様態の副詞」に属する「徹底的に」「きれいに」などが「完全性」という特徴を持つことを指摘している。仁田（2002）は次の（1）の例を示しつつ，下線部の副詞について（2）のように述べている。

（1） a. 石上は徹底的にシラをきった。（斎藤栄『江の島悲歌』, 仁田 2002: 96）

b. 双眼にあふれたっていた水色の光の滴は，夜がきれいに隠してくれた。（赤江瀑『八月は魑魅と戯れ』, 仁田 2002: 96）

（2） これは, 動き実現の程度が, 完全性とでも言えばよいようなレベルにあることを表しているものである。（仁田 2002: 96, 下線は筆者）

また，「完全性につながり，それと同趣のもの」（仁田 2002: 96）として，「すっかり」「すっきり」「ガラリと」などを挙げている。

（3） a. 夜はすっかり開け放たれ，…（小泉喜美子『冷たいのがお好き』, 仁田 2002: 96）

b. 「そう解釈したときだけ，山に上がったことがすっきり納得できる」（川辺豊三『公開捜査林道』, 仁田 2002: 96）

c. 何か外部に変化が起きるたびに，恩田はガラリと態度を変えた。（夏樹静子『特急夕月』, 仁田 2002: 96）

（3）の副詞はいずれも「動きの程度量性が極めて高いことを表」（仁田 2002: 96-97）すとされる。特に，「すっかり」については「程度量の副詞」としても取り上げられており，そこでは「〈極性・全体性〉を表す」（仁田 2002: 168）とされている。

次に，「程度量の副詞」に属する「完全に」「完璧に」について，仁田（2002）は「事態成立の完全性」（仁田 2002: 198）を表すと指摘している。仁田（2002）

は次の（4）の例について（5）のように述べている。

（4） a. 「岩津の変死とは完全に無関係だと言えます」

（佐野洋『証拠なし』, 仁田 2002: 198）

b. 弾に刻みこまれた発射痕を調べたところ，末松が奪われた拳銃のライフルリングと完全に一致した。

（菊村到『雨の夜，誰かが死ぬ』, 仁田 2002: 198-199）

（5） これらは，〔筆者略〕事態の成立・完成の度合いが百パーセントであることを表している。（仁田 2002: 199，下線は筆者）

つまり，仁田（2002）は，「様態の副詞」と「程度量の副詞」に分けられ得る副詞の中に，「完全性」という点で重なるものがあることを示唆している。

2.2.2 「完全性の副詞」の分類

以上の仁田（2002）の示唆を踏まえ，宮城（2016）は「様態の副詞」と「程度量の副詞」という枠を超えて「極限的な程度の修飾関係を構成し得る副詞類」（宮城 2016: 4）を「完全性の副詞」と呼ぶ。宮城（2016）は特に「すっかり」「きれいに」「完全に」を考察の対象とし[2]，これらがそれぞれどのような「完全性」を表す副詞であるか分析している。

宮城（2016）によれば，「完全性」の「表現の型」は次の 3 つに分けられる。

（6） （完全な）変化の表現：状態変化の完全性を表す表現。（宮城 2016: 8）

（7） （完全な）様態の表現：動作の様態の完全性を表す表現。

（宮城 2016: 8）

（8） （完全な）量的な変化の表現：量的な変化の完全性を表す表現。

（宮城 2016: 9）

[2] 宮城（2016）は考察の対象とはしていないものの，「まるまる」「そっくり」「ことごとく」なども「完全性の副詞に連なる」（宮城 2016: 18（注 16））と述べている。

まず，（6）の型（「（完全な）変化の表現」）は「ある状態への移行（変化）が完全に成立したこと」（宮城 2016: 7）を表すものであり，「すっかり」と「完全に」によって表されると言う。

（9）a.　彼の話をすっかり信じ込む。（宮城 2016: 5）

b.　小泉政権の求心力はすっかり弱まっている。

（『毎日新聞』2002 年 6 月 14 日，宮城 2016: 7）

（10）　小泉政権の求心力は*きれいに／完全に弱まっている。（宮城 2016: 11）

次に，（7）の型（「（完全な）様態の表現」）は「よどみなくスムーズな動きで行われたこと，すなわち無駄を排した純度の高い動作であるということ」（宮城 2016: 8）を表すものであり，「きれいに」と「完全に」によって表されると言う。

（11）a.　コートの隅にサーブがきれいに決まる。（宮城 2016: 5）

b.　ウィリスの外角速球にバットを合わせて，三遊間をきれいに突破した。

（『毎日新聞』2003 年 10 月 22 日，宮城 2016: 8）

（12）　三遊間を完全に／*すっかり突破した。（宮城 2016: 13）

次に，（8）の型（「（完全な）量的な変化の表現」）は「量的な変化が完了したこと」（宮城 2016: 8）を表すものであり，「すっかり」「きれいに」「完全に」のいずれの副詞でも表されると言う。

（13）a.　そうした子どもたちの姿もすっかり消えた。

（『毎日新聞』2003 年 5 月 4 日，宮城 2016: 9）

b.　茶菓をきれいに平らげて，一礼して食堂車を出ていった。

（『毎日新聞』2003 年 7 月 2 日，宮城 2016: 9）

c.　文学全集が完全にそろう。（宮城 2016: 5）

このように，「すっかり」「きれいに」「完全に」は表す「完全性」が異なるとされるが，宮城（2016）は，これは各表現に次のような意味的相違があることに起因していると指摘している。

（14）　「すっかり」: 以前のサマが消失し，変化の移行が完了したこと。
（宮城 2016: 11）

（15）　「きれいに」: 対象のサマが均質性を持っていること。（宮城 2016: 13）

（16）　「完全に」: 対象のサマの本来的なあり方と一致していること[原注 12]。
（宮城 2016: 15）

従来，これらの表現はいずれも「完全性」を表す類義表現として一括されてきており，事実，「全体の解釈としては互いに表す内容がかなり接近する」（宮城 2016: 15）こともある。しかし，宮城（2016）は，それは「語固有の意味から，それぞれの『極限』で重なりを持っている」（宮城 2016: 15）ことによると述べている。

2.3　佐藤（2017）

次に，佐藤（2017）は，「母語話者が，ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」（佐藤 2017: 3）という点で共通する「ばかり」「だけ」「しか」，「いつも」「常に」，「みんな」「全員」「全部」を「〈全該当〉を表す語」と呼び，これらが「非該当例」（佐藤 2017）を許容するタイプと許容しないタイプに分けられることを指摘している。

2.3.1 「ばかり」の分析

上記の表現のうち，佐藤（2017）は特に「ばかり」を取り上げて議論している。佐藤（2017）は，いわゆるとりたて詞のうち「〈全該当〉を表す語」に当たる「だ

け」「しか」「ばかり」のうち，「ばかり」のみが「非該当例」を許容する現象に注目し，その要因について分析している。

2.3.1.1　定延（2001）の指摘

「だけ」「しか」「ばかり」のうち「ばかり」のみが例外を許容するという現象は，佐藤（2017）以前にも寺村（1981），菊池（1983），沼田（1992），定延（2001），澤田（2007）など様々な研究において指摘されてきた。このうち，定延（2001）は次のように述べている。

（17）　仮に先週 1 週間で 21 回食事をし，そのうち 19 回がうどんで，2 回がカレーだったとすると，この状況で「先週はうどんだけ食べた」「先週はうどんしか食べなかった」はふつう誤りだが，「先週はうどんばかり食べた」は真実を述べた文として解釈可能である。

（定延 2001: 134，下線は筆者）

定延（2001）は，限定される事物の例外に当たる事物を「夾雑物」と呼ぶ。（17）の場合，「うどん」が限定される事物に，「カレー」がその「夾雑物」に当たるが，（17）は，「だけ」「しか」は「夾雑物」を許容しない（許容しにくい）のに対し，「ばかり」はそれを許容する（許容しやすい）ということを示している[3]。

この要因について，定延（2001）は「探索」という観点から説明している。「探索」とは「既知領域の拡大行動」（定延 2001: 118），典型的には「未知の空間がどんな様子なのか調べること」（定延 2001: 118）である。定延（2001）によれば，「だけ」「しか」「ばかり」はいずれもこの「探索」に関与する[4]。しかし，「だけ」

[3] 定延（2001）が実施した大学生 100 人を対象としたアンケートでは，100 人中 92 人の話者が，「ばかり」は「夾雑物」を許容すると判断したとされる。これに対し，「だけ」「しか」については，100 人中それぞれ 97 人と 98 人の話者が「夾雑物」を許容しないと判断したとされる。

[4] 定延（2001）は，「探索」には「全体的探索」と「スキャニング探索」の 2 種類があり，「だけ」「しか」「ばかり」はこのうちの「スキャニング探索」に関与するものであ

「しか」と「ばかり」ではその「探索」が及ぶ範囲（以下,「探索領域」（定延 2001））が異なり,「だけ」「しか」は次の（18a）を,「ばかり」は（18b）を「探索領域」とするとされている[5]。

(18) a.　事物のタイプの集合　（定延 2001: 128）

b.　事物を探索領域とする探索の集合　（定延 2001: 128）

（17）の場合で言えば,「先週はうどんだけ食べた」「先週はうどんしか食べなかった」は次の（19a）を,「先週はうどんばかり食べた」は（19b）を表しているとされる。

(19) a.　先週食べそうな食品のタイプの集合｛うどん，カレー，そば，……｝のありさま（つまり属性［先週食べた］が見いだせるのはうどんにかぎられること）　（定延 2001: 134）

b.　先週食べたものの集合｛日曜朝に食べたもの，日曜昼に食べたもの，日曜晩に食べたもの，……｝を探索領域とする探索の集合　（定延 2001: 134）

ると指摘している。「全体的探索」と「スキャニング探索」の違いについては定延（2001）を参照されたい。

[5]「ばかり」の「探索領域」を（18b）と捉えることの利点として，定延（2001）は，次の文において「ばかり」が適格となることに対する説明が可能となることを挙げている。

（ii）　ここは絶海の孤島。指をどこへ向けても，四方は海ばかり。陸はおろか，ほかに島かげひとつ見えない。

（星新一『小さな社会』, 張 1998: 71, 下線一部略）

先行研究では,「ばかり」には「複数性の制約」があることが指摘されているが,（ii）は「海」が複数存在する場合でなくとも成立する点で,「ばかり」に関する「複数性の制約」の反例となり得る。しかし，定延（2001）は,（ii）における「ばかり」の「探索領域」は「『こちらの方角はどうだろうと探索すると，海である』のような探索」（定延 2001: 130）の集合であり，その探索が複数回にわたって行われていることが表されているとしている。

定延（2001）は，「だけ」「しか」と「ばかり」のこうした差は「日常会話のルースさが入り込む余地」の有無に関わるとしている。定延（2001）は次のように述べる。

(20) a. 「ばかり」の文が表現しているのは世界のありさまではなく，世界探索の集合のありさまであり，ここに日常会話のルースさが入り込む余地がある。（定延 2001: 134）

b. 世界探索の集合がどのような集合であるかを表現する際には，世界じたいについては，多少印象的・感覚的になっても問題ではなく，「うどんをやたら多く見出だす世界探索の集合」であることに変わりはないとしてしまえる[原注 20]。（定延 2001: 134）

2.3.1.2 佐藤（2017）の指摘

一方，佐藤（2017）は，この定延（2001）の指摘には検討の余地があるとしている。まず，「世界探索の集合がどのような集合であるかを表現する際には，世界じたいについては，多少印象的・感覚的になっても問題ではな」（定延 2001: 134）いという指摘について，それが「ばかり」が「夾雑物」を許容することに対する「必要かつ十分な理由になるかという点については，再考の余地があるのではないか」（佐藤 2017: 7）と述べている。次に，「ばかり」は「圧倒的少数事例を取りたてる」（佐藤 2017: 8）場合があるとし，次のように述べている。

(21) a. 前の月に週二回のペースで学校に遅刻した高校生の娘がいたと仮定しよう。(1)〔筆者注：ここでの（21b)〕はそのような娘に対する母親の発話としてごく自然なものである。（佐藤 2017: 3，下線は筆者）

b. あなた，学校に遅刻してばかりでどうするの。

（佐藤 2017: 3，傍点を下線に改変）

(21) では，「仮に学校が週六日制であるとした場合，実際の遅刻率は約 33% に

過ぎず，残りの約 67% はこれに該当しない」（佐藤 2017: 3-4）ことになる。この場合，「遅刻する」に当たらない状況は「『夾雑物』と呼ぶ域を大きく逸脱」（佐藤 2017: 8）しており，「『日常会話のルースさ』が何らかの意味で関与している可能性はあるにしても，それのみを理由として，話者が全体の 67% の非遅刻事例を見落とすという説明は分かりやすいとは言えない」（佐藤 2017: 8）と指摘している。

こうした検討課題を踏まえ，佐藤（2017）は「ばかり」が（21）のような場合にも用いられ得ることについて，「あくまで語の意味特徴そのものに起因するものであると考えるべきであろう」（佐藤 2017: 6）と述べ，その要因を「ばかり」の「集合形成のプロセス」の特徴に求めている。佐藤（2017）は次のような文における「ばかり」の適格性から，「ばかり」は「知覚経験を想定できないタイプの文においては機能しない」（佐藤 2017: 10）こと（(22)），「知覚的に捉えられやすい」（佐藤 2017: 11）ものについて用いられること（(23)），「信念に照らし合わせて有標である」（佐藤 2017: 12）ものについて用いられること（(24)）を指摘している。

(22) a. *処方された薬ばかりを飲んでください。　（佐藤 2017: 10，下線は筆者）
b. 処方された薬だけを飲んでください。　（佐藤 2017: 10，下線は筆者）
c. 処方された薬しか飲まないでください。　（佐藤 2017: 10，下線は筆者）

(23) a. 試合中，宇佐美選手ばかりが｛活躍していた／目立っていた｝。
（佐藤 2017: 11，下線は筆者）
b. ??試合中，宇佐美選手ばかりが｛消えていた／目立っていなかった｝。[6]
（佐藤 2017: 11，下線は筆者）
c. 試合中，宇佐美選手だけが｛消えていた／目立っていなかった｝。

[6]「サッカーの試合で，ある選手があまりボールに触れることなく，ゲームの流れに絡まないことを『消えている』と表現することがある」（佐藤 2017: 12）が，佐藤（2017）は「ボールに触れる回数が他の選手よりも多く，ゲームの趨勢に大きな影響を与えていた場合，観戦者の目には知覚されやすいと言える」（佐藤 2017: 12）と述べている。

（佐藤 2017: 11，下線は筆者）

(24) a.　花子は約束をやぶってばかりいる。　（佐藤 2017: 12，下線は筆者）

b. ??花子は約束を守ってばかりいる。　（佐藤 2017: 12，下線は筆者）

これを踏まえ，佐藤（2017）は，「ばかり」は「主体にとって非常に捉えられやすいものを知覚する」（佐藤 2017: 9）ことによって集合を形成すると主張する。佐藤（2017）は，この「主体にとって非常に捉えられやすいもの」のことを「認識的際立ち性」と呼んでいる。つまり，「ばかり」はこの「認識的際立ち性」を持つ事態による集合を形成するのであり，そうでない事態は集合の構成要素とならないため，結果的に「非該当例」を許容し得ると結論している。例えば，(21b) における「ばかり」は次のような「集合形成のプロセス」を経るとしている。

(25)　「ばかり」の集合形成の事例②

a.　母親が娘の登校時間を気にしながら日常生活を送る。

b.　週 2 回のペースで娘の学校への遅刻という認識的際立ち性を有する事態を知覚する。

c.　「娘の遅刻」という認識的際立ち性を有する事態のみから成る経験記憶の集合が形成され，「遅刻してばかり」という認識にいたる。

（佐藤 2017: 10）

2.3.2 「〈全該当〉を表す語」の分類

また，佐藤（2017）は，「ばかり」は「母語話者が，ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている諸形式」（佐藤 2017: 3）の 1 つであるとするが，そうした形式であるにもかかわらず，「ある集合の全要素が該当する」わけではない場合にも用いられるものが「ばかり」以外にも見られると指摘している。具体的には，「いつも」「みんな」を挙げている。例えば，次の（26a）は「授業中」において「居眠りをしている」に該当しない状況（居眠りをしていない状況）が存在する場合でも「いつも」を用いることができ，(26b) は「日本人」

において「勤勉だ」に該当しない人（勤勉でない人）が存在する場合でも「みんな」を用いることができるとされる。

(26) a.　君は授業中，{いつも／??常に} 居眠りをしているよね。〈非該当例許容解釈〉　（佐藤 2017: 5，下線は筆者）

b.　日本人は {みんな／*全員} 勤勉だ。〈非該当例許容解釈〉　（佐藤 2017: 6，下線は筆者）

一方で，「常に」「全員」は（26）において不適格になるとされる。「いつも」と「常に」，「みんな」と「全員」は意味的な類似性が指摘されるものであるが，そうであるにもかかわらず「非該当例」の許容について差があることは，「ばかり」と「だけ」の関係と並行的である。このことに鑑み，佐藤（2017）は「〈全該当〉を表す語」には，次の表 1 のように「非該当例」を許容するタイプと許容しないタイプがあると指摘している。

表 1　〈全該当〉の諸形式（佐藤 2017: 5）

	非該当例許容	非許容
頻度副詞	いつも	常に
取りたて	ばかり	だけ・しか
集合名詞	みな／みんな	全員・全部

2.4　本論文の位置付け

以上，宮城（2016）と佐藤（2017）の指摘を概観したが，それらに対する本論文の位置付けについて述べる。

まず，宮城（2016）は，仁田（2002）が「様態の副詞」や「程度量の副詞」において「完全性」を表すと説明されている副詞（の一部）の共通点と相違点を明

らかにした研究と言える。宮城（2016）において重要なのは，「様態の副詞」や「程度量の副詞」といった枠組みにとらわれず（「語毎に何々副詞というラベル貼りはせず」（宮城 2016: 7））に分析がなされている点である。これにより，「完全性」については従来の枠組みの中で議論されるべきものではなく，副詞全体を視野に入れて議論することで初めてその内実が明らかになることが示されたと言える。

しかし，宮城（2016）は「完全性」を表す副詞（「完全性の副詞」）のうち，「すっかり」「きれいに」「完全に」を主な分析の対象に据え，修飾対象も動詞句を中心に置き，それらを「修飾する事態の側面（視座）の違い」（宮城 2016: 9）に基づいて分類する研究である。本論文は従来の副詞の分類枠を超えて「完全性」「全称性」という共通点で副詞類を見直すという点で宮城（2016）と共通するが，量副詞・程度副詞的な対象を中心に据えて，（被修飾対象ではなく）「全称性」そのもののタイプ分け，そのタイプごとの内実の解明を目指すという点では方向性を異にしている。

一方，佐藤（2017）は，「全該当」という意味を共有する表現について，「取りたて」「頻度副詞」「集合名詞」という枠を超えた分類を試みている。前述の通り，「〈全該当〉を表す語」が「非該当例」を許容するという現象は，場合によっては「言葉の緩い用法」や「ルース・トーク」として処理され得るが（第 1 章 1.2 節参照），佐藤（2017）は，この現象が必ずしも「言葉の緩い用法」や「ルース・トーク」という視点からだけでは説明しきれないことを指摘している。

個別の表現の意味分析を通じて従来の枠組みを超えて広義全称そのものの分類を示そうとする点で，本論文は佐藤（2017）の議論の延長線上にある。しかし，佐藤（2017）は「〈全該当〉を表す語」を「非該当例」を許容するタイプと許容しないタイプに分けていながらも（表 1），両者を区分する統一的な素性（基準）については積極的に言及していない[7]。これに対し，本論文は両者を分ける素性

[7] 寧ろ，佐藤（2017）は「ばかり」と「いつも」（と）「みんな」が異なるものであることを示唆している。2.3.1.2 節で見たように，佐藤（2017）は，「ばかり」は「知覚的に捉えられやすい」（佐藤 2017: 11）ことや，「信念に照らし合わせて有標である」（佐藤

についてさらに踏み込んだ検討を行い，より分析的な内実を明らかにするものとして位置付けられる。

2017: 12）ことに対して用いられる（(23a)（24a)）ことから，「ばかり」に「認識的際立ち性」という特徴を見出している。言い換えれば，「ばかり」は知覚的に捉えられにくいことや，信念に照らし合わせて有標でないことに対しては用いられにくい（(23b)（24b)）。これに対し，「いつも」はそうした場合にも自然に用いられる。

（iii）　宇佐美選手はいつも｛消えていた／目立っていなかった｝。
（佐藤 2017: 14，下線は筆者）

（iv）　花子はいつも約束を守る。　（佐藤 2017: 14，下線は筆者）

このことを踏まえ，佐藤（2017）は「『いつも』については，少なくとも『ばかり』ほどには，認識的際立ち性という特徴と関与的でない」（佐藤 2017: 13-14）と指摘し，「『いつも』や『みな（みんな)』については，『ばかり』とはまた違った特徴をもっていると考えられる」（佐藤 2017: 14）と述べている。

第 3 章

「全否定」と広義全称表現

3.1　はじめに

本章では，「まったく」「全然」を取り上げ，「全否定」と広義全称表現について議論する。前述の通り，広義全称表現の中心となるのは，「全部」「全員」などの「全称量化詞」や，頻度を表す副詞のうち「全称量化」の解釈を受けるとされる「常に」「いつも」である。しかし，本論文の枠組みを提示し，さらに「限定」を表すとりたて詞の「だけ」「ばかり」との共通性を示す都合上，「全部」「全員」や「常に」「いつも」に関する議論ではなく，「まったく」「全然」に関する議論から始めることとする。

「まったく」「全然」については，先行研究において，共起可能な述語が一部異なること，「全然」が例外を許容することなどが指摘されている。これに対し，本章では，こうした「まったく」と「全然」の違いが，「まったく」は差分が皆無であることを表すのに対し，「全然」は程度が甚大であることを表すことに起因すると主張する。また，この差が先行研究でも扱われている「だけ」と「ばかり」の差とも共通し，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表す（という直観がある）表現のタイプ分けに寄与することを示す。本章の主張は次の通りである。

(1) a.　「まったく」は，差分が皆無であることを表す。
　　b.　「全然」は，程度が甚大であることを表す。
(2)　　「全然」は差分を問題にしないため，例外を許容し得る。
(3)　　「まったく」と「全然」の差は，典型的には「そうでないものや事態」

の存在が認められないことを表す（という直観がある）表現のタイプ分けに寄与する。

3.2　先行研究と問題の所在

「まったく」と「全然」については，特に後者を扱った先行研究が数多く存在する。しかし，本章では両者の相違点に注目するため，以下では特にその両者の相違点を指摘した研究として，武内（2015）と朴（2016）を取り上げる。

3.2.1　共起可能な述語の差について

まず，朴（2016）は，「まったく」と「全然」で共起可能な述語が一部異なることを指摘している。朴（2016）は，小説や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下，BCCWJ）を用いて「まったく」「全然」と否定形式（文法的否定形式・語彙的否定形式[1]）の述語の共起関係を調査し，その結果を次の表 2 のようにまとめている[2]。

[1] 一般に，「ない」が含まれる「来ない」「寒くない」「親切ではない」「学生ではない」などは「文法的否定形式」と呼ばれる。これに対し，「ない」は含まれないものの，語彙自体に否定的意味を有する「不可能だ」「無理だ」「駄目だ」「違う」などは「語彙的否定形式」と呼ばれる。特に後者については，工藤（2000）が「不可能」「困難」「欠如・消滅」「不一致」「負の評価」「気にしない」といったタイプに下位分類している。それぞれのタイプの所属語彙などの詳細は工藤（2000）を参照されたい。

[2] 朴（2016）は「まるで」についても調査しているが，着眼点の煩雑化を防ぐため，表 2 では「まるで」の調査結果を割愛する。

表 2 「まったく」「全然」と共起する述語のタイプ（朴 2016: 52, 一部略）

共起する述語のタイプ ＼ 副詞			ぜんぜん	まったく
動詞の否定形式	認識活動を表す動詞		○	○
	認識活動を表す動詞以外	非動作動詞及び可能動詞	○	○
		動作動詞	○	○
形容詞の否定形式			○	○
名詞述語の否定形式			○	○
形容詞相当の否定形式：「～（が／の）ない」			○	○
語彙的否定形式	欠如・消滅	「無縁だ」「欠けている」「からっぽだ」など	○	○
	不一致	「違う」「異なる」「別だ」など	○	○
		「反対だ」「逆だ」など	×	○
	負の評価	「下手だ」「駄目だ」など	○	○
	気にしない	「平気だ」	○	○
		「いい」	○	×

この調査結果に基づき，朴（2016）は，工藤（2000）の言う「不一致」系語彙的否定形式の「反対だ」「逆だ」は「まったく」とのみ共起すると述べる[3]。例えば，(4) の「まったく」は「『ぜんぜん』に置き換えられない」（朴 2016: 51）と述べている（(5)）。

(4) a. 意外なのは，ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。

（安部公房『砂の女』, 朴 2016: 51, 実線は筆者, 波線は朴の実線）

[3] 朴（2016）は，調査において共起例が「3 例以上見られたもの」（朴 2016: 54（注 8））について共起可能と判断している。

b.　当然，謝罪と承諾の返事があるものと思っていた。しかし，耳をうたがうような，まったく逆な答えがあった。
（星新一『人民は弱し官吏は強し』, 朴 2016: 51, 実線は筆者, 波線は朴の実線）

（5）a. *これはぜんぜん予期に反したことだった。
b. *しかし，耳をうたがうような，ぜんぜん逆な答えがあった。

一方，「気にしない」系語彙的否定形式の「いい」は，「『ぜんぜん』とのみ共起が可能」（朴 2016: 51）とされている。朴（2016）は，「全然」と「いい」の共起例として次の（6a）を挙げている。

（6）a.　「本当にせっかくのいい気分のときに，すみませんでした……」「いや，そんなのはぜんぜんいいんです」と，ぼくは言った。
（椎名誠『新橋烏森口青春篇』, 朴 2016: 51, 実線は筆者, 波線は朴の実線）
b. *いや，そんなのはまったくいいんです。[4]

このように，朴（2016）は文法的否定形式と語彙的否定形式の違い，あるいは動詞の否定形式や語彙的否定形式の下位分類を考慮した調査を実施し，結果として従来基本的に一括して扱われてきた「まったく」と「全然」に相違があることを明らかにしている。ただし，特に形容詞の否定形式や名詞述語の否定形式については一括されており，その内部の差は問題にされていない。例えば，形容詞の否定形式と「まったく」「全然」の共起関係について，朴（2016）は「○」（共起可能）としている。しかし，次の文はいずれも形容詞の否定形式を述語とする

[4] 朴（2016）は，収集した用例において，「『まったく』が〈気にしない〉という意味での『いい』と共起している例は見られない」（朴 2016: 51）と述べており，（6a）の「全然」が「まったく」に置き換えられない，あるいは（6b）のような文が不自然と明言しているわけではないが，ここでは便宜的に「*」を付した。

ものであるが，(7) と (8) では「まったく」の適格性に差があると考えられる。

(7) a. あの小説は｛まったく／全然｝面白くない。
b. この店のコーヒーは｛まったく／全然｝苦くない。
(8) a. うちの子は中学生にしては｛??まったく／全然｝大きくない。
b. この運動公園のプールは｛??まったく／全然｝深くない。

これは，「まったく」と「全然」の意味的相違点を捉えるためには，形容詞（の否定形式）の内部の差についても考慮する必要があることを示している。

3.2.2 例外の（非）許容について

次に，武内（2015）は「まったく」と「全然」を比較し，これらが使用可能な場面に差があることを指摘している。例えば，次の（9a）は「どこを見渡しても雪が完全に積っていない状態」(武内 2015: 182) でなければ容認されないが，(9b) は「2 メートルの積雪を見ながらの発話」（武内 2015: 182）としても適切であると述べている。

(9) a. 今年は当地ではまったく雪が降らない。（武内 2015: 181，下線は筆者）
b. 今年は当地ではぜんぜん雪が降らない。（武内 2015: 182，下線は筆者）

また，次の会話における夫の第 2 発話は，ボトルにワインが残っていることを把握している場合でも成立するとされている。

(10) 夫 1：今晩の飲み物何にする？
妻 1：この前の赤ワインが残っているでしょう。
夫 2：ぜんぜん残っていないよ。
妻 2：（ボトルを手にとって）残っているじゃない。
夫 3：これじゃぜんぜん足りないよ。

妻 3：足らしましょうよ。　（武内 2015: 176，下線は筆者）

武内（2015）は，「まったく」と「全然」にこうした差が生じる要因について，前者は「表出命題そのものとかかわる」（武内 2015: 182）ものであり，「事象 P の否定（-P）を強める」（武内 2015: 183）働きを持つのに対し，後者は「否定的態度の表明とかかわる」（武内 2015: 182）ものであり，「事象 P の否定ではなく，P と思わないと訴える」（武内 2015: 183）働きを持つことによると指摘している。つまり，「まったく」を含む（9a）では，「雪が降る」という事象の否定，即ち「雪が降らない」という状況にあることが強められている。これに対し，「全然」を含む（9b），及び（10）における夫の第 2 発話は，「雪が降っているとは思わない（言えない）」，「ワインが残っているとは思わない（言えない）」と訴えるものであり，「雪が降る」「ワインが残っている」という事象を否定しているわけではないとされる。ここから，武内（2015）は「まったく」「全然」と「ない」の関係を次のように定式化している。

（11）a.　［まったく［P］ない］　（武内 2015: 184）
　　b.　ぜんぜん［［P］と思う］ない　（武内 2015: 184）

武内（2015）の指摘は，「まったく」は例外を許容しないのに対し，「全然」は例外を許容するということを示している。「全然」が例外を許容するということは他の先行研究においても指摘されている。例えば尾谷（2008）は，次の（12a）は「先生の発言をある程度聞いていた場合」（尾谷 2008: 104）でも用いることができ，（12b）も「1%も理解できていないという解釈には限られない」（尾谷 2008: 104）と述べている。

（12）a.　彼は先生の話を<u>全然</u>聞いてない。　（尾谷 2008: 105，下線は筆者）
　　b.　お前はこの仕事の重要性が<u>全然</u>分かってない。
　　（尾谷 2008: 105，下線は筆者）

尾谷（2008）は「全然」と意味的に類似する「まったく」については触れていないが，武内（2015）では「まったく」が例外を許容しないことが示唆されている点で重要である[5]。また，その現象を両者の「ない」との関係の違いと結び付けて考察している点も興味深い。しかし，「まったく」が「事象 P の否定（-P）を強める」のに対して「全然」が「P と思わないと訴える」働きを持つとした場合，朴（2016）が指摘する共起可能な述語の差との関係が判然としない。その点で，武内（2015）の指摘には検討の余地があると言える。

3.2.3　問題の所在

以上，先行研究では「まったく」と「全然」が共起可能な述語や例外の（非）許容において差があることが指摘されているものの，それぞれに不十分な点があることを示した。これに対し，次節以降では，朴（2016）では問題にされていない点から共起可能な述語の差を観察することを通じてそれぞれの意味を明らかにした上で，例外の（非）許容において差が生じる要因について考察する。

3.3 「まったく」と「全然」の意味について

3.3.1　形容詞の否定形式の共起傾向

ここでは，3.2.1 節で挙げた次の例における「まったく」の適格性の差に注目する。

(13) a.　あの小説は｛まったく／全然｝面白くない。　（＝（7a））
　　b.　この店のコーヒーは｛まったく／全然｝苦くない。　（＝（7b））

[5] なお，第 1 章 1.2 節でも述べた通り，尾谷（2008）は「全然」が例外を許容する要因を「ルース・トーク（loose talk）」に求めている。しかし，「全然」と意味的に類似する「まったく」が例外を許容しないことに鑑みれば，「全然」の振る舞いは「ルース・トーク」のみによって説明し尽くすことはできないと言える。

(14) a.　うちの子は中学生にしては｛??まったく／全然｝大きくない。

（＝（8a））

b.　この運動公園のプールは｛??まったく／全然｝深くない。　（＝（8b））

前述の通り，朴（2016）は，「まったく」と「全然」はいずれも形容詞の否定形式と共起可能としているが，これらの例に鑑みれば，特に「まったく」については形容詞の否定形式の中にも共起可能なものとそうでないものがあると言える。以下ではこの差について，状態性述語と「極限」「程度性」の関係について論じる先行研究を参考に考察する。

3.3.2　状態性述語と「極限」「程度性」の関係

佐野（1999）は，形容詞を始めとした状態性述語について，「非常に」「あまり」などの程度副詞，及び「ほとんど」との共起可能性に基づいて次のように分類している[6]。

(15) a.　「程度性」[7]を持ち，「極限」を想定し得る状態性述語（程度副詞とも「ほ

---

[6]（15）に示す分類は，佐野（1999）の分類をそのまま反映したものではない。まず，（15b）は，佐野（1999）では「『程度性』を持つ状態性述語」（佐野 1999）とされている。しかし，これは（15a）と所属語彙の多くが重なることになり，排他的な分類になっていない。本章では「極限（点）」を想定し得るものとそうでないものの差を重視するため，便宜的に「『程度性』を持つ状態性述語」のうち「極限（点）」を想定し得ないもの（（15a）に当たらないもの）のみを抽出した分類として提示した。次に，佐野（1999）はこの他に「それを特徴づける様々な性質を内包する状態性述語」（佐野 1999）という分類を立てている（即ち状態性述語を 4 つに分類している）。佐野（1999）によれば，「日本人だ」「A 型だ」など「ほとんどの名詞がこのグループに入」（佐野 1999: 47）り，「これらは程度性もなく，点的な状態も想定できない」（佐野 1999: 47）とされる。しかし，「ほとんど」とは共起可能であり，その場合「名詞の持つ 1 つ，或いは幾つかの性質を取り上げ，その性質に限りなく近いことを述べる」（佐野 1999: 47）とされている。この分類項目も注目に値するが，この項目に関する議論は本章の主眼とは異なるため，割愛した。

[7] 佐野（1999）は，「程度性」を「連続的・段階的な状態の幅」（佐野 1999: 32）という意味で用いている。

とんど」とも共起可）

b. 「程度性」を持ち，「極限」を想定し得ない状態性述語（程度副詞と共起可，「ほとんど」と共起不可）

c. 「一点的」である状態性述語（程度副詞と共起不可，「ほとんど」と共起可）

まず，（15a）と（15b）に関する指摘を概観する。前者の例としては「満足だ」が，後者の例としては「大きい」が挙げられる。これらは程度副詞と共起し得る点で共通するが，前者については「ほとんど」とも共起し得る点で異なる。

（16）a. ｛非常に／ほとんど｝満足だ。（佐野 1999: 41，下線は筆者）

b. ｛非常に／少し／#ほとんど｝大きい。[8]（佐野 1999: 34，下線は筆者）

「ほとんど」について，佐野（1999）は「ある点的な状態への近付きを表わすため，これと共起するためには点的な状態が想定されなければならない」（佐野 1999: 42）と指摘している。ここから佐野（1999）は，「満足だ」のように程度副詞とも「ほとんど」とも共起可能な状態性述語について次のように述べている。

（17） 極限の状態は 1 点想定しうるが，その極限に至るまでのスケールも存在するという，「程度性」を持ち，且つ「極限点」も想定しうる数少ない語である。（佐野 1999: 42，下線は筆者）

このタイプの状態性述語には，形容詞（肯定形・否定形）の一部や「～がない」

[8] 佐野（1999）によれば，「ほとんど大きい」「ほとんど大きくない」は，「大きい／大きくない」と形容される対象の数量が「ほとんど」という意味では成立する。例えば，次の文が成立する場合は「子供の数がほとんど」（佐野 1999: 44）という意味になるとされている。

（i） #このクラスの子どもはほとんど｛大きくない／背が高くない｝。
（佐野 1999: 44，下線は筆者）

（「勇気がない」「問題がない」など）が属するとされるが，形容詞否定形の例として，佐野（1999）は次のようなものを挙げている。

（18）　甘くない，辛くない，すっぱくない，苦くない，うれしくない，悲しくない，寂しくない，楽しくない，寒くない，痛くない，おもしろくない，忙しくない…　（佐野 1999: 41）

これらは（16a）の「満足だ」とは異なり「非常に」とは共起しにくいものの，「あまり」「大して」など否定と呼応する程度副詞とは共起することから「程度性」を持っており[9]，「ほとんど」と共起することから「極限（点）」も想定し得るとされる。佐野（1999）は，このうちの「甘くない」について，「『甘さ』の程度を限りなく低くして行けば，結局はゼロになる」（佐野 1999: 44）と述べ，（18）の形容詞否定形が次の図 1 に示すようなスケール上に位置付けられるとしている。

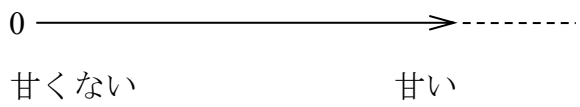

図 1 「程度性」を持ち「極限（点）」も想定し得る形容詞否定形（「甘くない」）の位置付け（佐野 1999: 44）

次に，（15c）に関する指摘を概観する。佐野（1999）は，ここに属する状態性述語の例として次のようなものを挙げている。

（19）a.　形容詞

等しい，同じだ，無反応だ，無意識だ，無関係だ，未経験だ，未使用だ，

[9] 工藤（1983）によれば，程度副詞は一般に「否定形式とともに用いることは通常な」（工藤 1983: 186）く，「肯定文脈に傾向する」（工藤 1983: 187）とされる。

（ii）　＊このひもは非常に長くない。　（工藤 1983: 186，波線は筆者）

（iii）　＊この電球は少し明るくない。　（工藤 1983: 186，波線は筆者）

奇跡的だ，必死だ，平気だ，逆だ，平らだ，真暗だ，真ん丸い，真っ白だ，真赤だ…　（佐野 1999: 45）

b.　名詞＋だ

同時だ，同様だ，新品だ，無料だ，限界だ，無一文だ，無罪だ，極限だ，空だ，一瞬だ，裸だ，反対だ，全部だ，すべてだ，毎日だ，総出だ，徹夜だ，満開だ…　（佐野 1999: 45-46）

c.　状態性の動詞

一致する　（佐野 1999: 46）

これらは，次のように「『非常に』等の一般の程度副詞とは共起しないが，『ほとんど』等特殊な程度副詞と共起」（佐野 1999: 46）するとされる。

(20) a.　まわりは体温とほとんど同じ暑さだ。　（佐野 1999: 45）

b.　ここの駐車料金はほとんど無料だ。　（佐野 1999: 33）

c.　全員の意見がほとんど一致する。　（佐野 1999: 46）

(21) a. ??まわりは体温と｛非常に／少し｝同じ暑さだ。

b. ??ここの駐車料金は｛非常に／少し｝無料だ。

c. ??全員の意見が｛非常に／少し｝一致する。

このことから，佐野（1999）は（19）の状態性述語について，「『程度性』はもはやないため，極限点があるというよりは，単に一点的である」（佐野 1999: 46）と指摘している。例えば，「無料だ」は次の図 2 のように位置付けられるとし，「ほとんど」と共起した場合には「その点に限りなく近い状態」（佐野 1999: 46）が想定されると述べている。

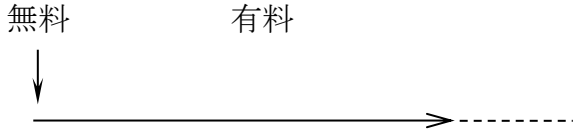

図 2 「一点的」である状態性述語（「無料だ」）の位置付け（佐野 1999: 46）

3.3.3 「まったく」の意味

以上，状態性述語に関する佐野（1999）の指摘を概観したが，以下ではこれを参考に「まったく」と「全然」の意味について分析する。

「まったく」が適格となる前掲（13）の述語「面白くない」「苦くない」は，佐野（1999）において「程度性」を持つと同時に「極限（点）」を想定しうる状態性述語（(15a)）とされるものの例として挙げられている。従って，図 1 に倣えば，これらは次の図 3 のようなスケール上に位置付けられる。

図 3 「面白くない」「苦くない」の位置付け

つまり，「面白くない」「苦くない」は，共に「程度を限りなく低くして行けば，結局はゼロになる」という特徴を持つということになる。

これに対し，「まったく」が不適格となる前掲（14）の述語「大きくない」「深くない」は，次のように否定文と呼応する程度副詞とは共起し得る一方で，「ほとんど」とは共起しにくい。

(22) a.　うちの子は中学生にしては｛あまり／たいして｝大きくない。

　　b.　この運動公園のプールは｛あまり／たいして｝深くない。

(23) a. ?? うちの子は中学生にしてはほとんど大きくない。

b. ??この運動公園のプールはほとんど深くない。

従って，これらは佐野（1999）の言う「程度性」を持ち「極限（点）」を想定し得ない状態性述語（(15b)）に当たる。

このように，(13）と（14）の述語は「極限（点）」が想定され得るか否かという点で差がある。こうした述語の差と，(13）と（14）における「まったく」の適格性の差を重ねると，「まったく」の特徴が明らかになる。つまり，「まったく」は「極限（点）」が想定され得る述語と共起しやすいのである。

ただし，「まったく」は佐野（1999）の言う「極限（点）」が想定されない場合にも用いられる。3.2.1 節で述べたように，朴（2016）は，「まったく」が「不一致」系語彙的否定形式の「反対だ」「逆だ」と共起し得る（のに対し，「全然」は共起しない）ことを指摘している。

(24) a. 意外なのは，ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。（＝（4a)）

b. 当然，謝罪と承諾の返事があるものと思っていた。しかし，耳をうたがうような，まったく逆な答えがあった。（＝（4b)）

これらは佐野（1999）の言う「一点的」である状態性述語（(15c)）に当たるが（(19ab)），この種の述語について，佐野（1999）は「『程度性』はもはやないため，極限点があるというよりは，単に一点的である」（佐野 1999: 46）と指摘している[10][11]。

このように，「まったく」は「極限（点）」が想定され得る述語に加え，「一点

[10] 佐野（1999）は，「極限（点）」を「程度性」の中で議論しており，その「程度性」がない場合は「極限（点）」という概念がそぐわないと捉えていると推察される。

[11]「反対だ」「逆だ」に「程度性」がないことは，これらが程度副詞（否定と呼応するものを含む）と共起しにくいことから明らかである。

(iv) ＊私の意見は彼とは｛非常に／あまり｝反対だ。

(v) ＊私の意見は彼とは｛非常に／あまり｝逆だ。

的」である状態性述語とも共起し得るが，これらの述語の共通性を捉えることにより，「まったく」の意味が明らかになると考えられる。ここで注目すべきは，「極限（点）」が想定され得る述語の「甘くない」について，「甘さ」の程度が「ゼロ」であることを想定し得るとする佐野（1999）の指摘である。この指摘は，「甘くない」はそれと対立する「甘い」という要素（ここでは肯定的要素）が「ゼロ」であることを表し得るということを示している。この指摘は，「一点的」である状態性述語についても適用可能である。例えば，「反対だ」が持つ「一点」とは，対立する「反対でない」（あるいは「同じ」）という要素が「ゼロ」である「点」と言える。このように考えた場合，「まったく」は当該の状態（事態）と対立する要素が存在する場合に生じる「極限（点）」「一点」との「ずれ」が皆無であることを表す[12]と言える。本論文では，この「ずれ」を「差分」と呼び，「まったく」の意味を次のように捉える。

(25)　「まったく」は，差分が皆無であることを表す。

「まったく」の意味が（25）のようにまとめられることは，肯定形式との共起傾向からも示唆される。北原（2013）は「段階的な語句」（北原 2013）には「ほとんど」などによって修飾され得る「閉鎖スケール（closed scale）を持つもの」（北原 2013: 39）と，それに修飾されにくい「開放スケール（open scale）を持つもの」（北原 2013: 39）があるとしている。その上で，「完全に」や「まったく」は前者とのみ共起可能であると指摘している。

[12] ここでは，「極限（点）」「一点」との「ずれ」，即ち差分が皆無であることを表すとしたが，「反対だ」「逆だ」などはそもそも差分がない状態でのみ成立し得ると考えられるため，これらと共起する「まったく」については，差分がないことを明示するとした方が適切である可能性がある。しかし，この点については否定の在り方（述語による否定と副詞類による（全）否定との関係など）に関わる大きな問題を内包しており，本論文の範囲を超えるものと考える。そのため，本論文では立ち入らず，今後の課題とする（第 7 章 7.2 節）。

(26) a.　{完全に／ほぼ／ほとんど} 満杯だ／真っ直ぐだ／平らだ。

（北原 2013: 39, 実線を波線に改変）

b. ??{完全に／ほぼ／ほとんど} 長い／広い／賢い。

（北原 2013: 39, 実線を波線に改変）

北原（2013）は，「閉鎖スケールには極点（endpoint）がある」（北原 2013: 39）と述べていることから，北原（2013）の言う「閉鎖スケール（closed scale）を持つもの」とは，佐野（1999）の言う「極限（点）」を想定し得るものに当たり，「開放スケール（open scale）を持つもの」はそれを想定し得ないものに当たると考えられる。つまり，「まったく」は肯定形式とも共起し得るが，その場合も共起可能なものは「極限（点）」を想定し得るもの，つまり差分に言及し得るものに限られるのである。

3.3.4 「全然」の意味

一方で，「全然」は「程度性」を持つと同時に「極限（点）」を想定しうる状態性述語（(15a)）に当たる「面白くない」「苦くない」とも，「程度性」を持ち「極限（点）」を想定し得ない状態性述語（(15b)）に当たる「大きくない」「深くない」とも共起し得る（前掲（13）（14））。このことから，「全然」は「極限（点）」や差分については問題にせず，これらに共通する「程度性」に関わると考えられる。「程度性」に関わる点では，「全然」は「あまり」「大して」などの一群に数えられるが，その中でも，「全然」は甚大な程度を表す。つまり，「全然」は次のような意味を持つと言える。

(27)　「全然」は，程度が甚大であることを表す。

3.2.1 節で述べた通り，朴（2016）は，「全然」が「不一致」系語彙的否定形式の「反対だ」「逆だ」とは共起しない（のに対し，「まったく」は共起し得る）ことを指摘しているが（(28)），これは，「反対だ」「逆だ」が「程度性」を持たない

状態性述語に当たるためであると言える。

(28) a. ＊これはぜんぜん予期に反したことだった。　（＝（5a））
　　b. ＊しかし，耳をうたがうような，ぜんぜん逆な答えがあった。（＝（5b））

なお，「全然」は「極限（点）」が想定され得る，即ち差分が問題になり得る述語とも共起し得るが（(13)），その場合，その「極限（点）」や差分については問題にされない。これは，佐野（1999）が「非常に」と「極限」を想定し得る「満足だ」が共起する場合について次のように述べていることと共通する。

(29)　「非常に」等一般の程度副詞は極限点を要求しないため，「満足だ」と共起した場合にも極限点は意識されない。　（佐野 1999: 43，下線は筆者）

「全然」を用いた場合に「極限（点）」や差分が問題にされないことは，次のように差分が皆無であることが強調される文脈では，「まったく」に比して「全然」の適格性がやや低いという現象によっても示唆される。

(30) a.　この世に死なない人間などまったくいないはずだ。
　　b. ?この世に死なない人間など全然いないはずだ。

さらに，「全然」が肯定形式とも共起し得る背景についても，「全然」が程度に関わるものであるということから説明可能である。先行研究では，「全然」は「想定」「予想」「前提」などが存在する文脈においては肯定形式と共起し得ることが指摘されている（足立 1990; 野田 2000; 有光 2002; 尾谷 2008; 新野 2011 他）。例えば，尾谷（2008）は，次の（31a）には「全然」を含む文が発話されるに当たり「料理がまずい」という「想定」が存在している（波線部参照）のに対し，（31b）にはそうした「想定」が存在せず，そのことが「全然」の適格性を左右すると指摘している。

(31) a. 【料理を食べて，「まずいでしょう？」と言われた際の返答として】
「これ，全然美味しいよ。」 （尾谷 2008: 106，下線は筆者）
b. 【先行文脈がなく，会話の第一声として】
??「これ，全然美味しいよ。」 （尾谷 2008: 106，下線は筆者）

程度が甚大であることを表すということは，言い換えれば，当該の対象の状態が何らかの基準から大幅に乖離していることを表すと捉えられる。つまり，（31a）の場合，「全然」は「（料理が）まずい」ということを基準に据え，実際にはその基準から「美味しい」という方向に大幅に乖離した状態であることを表しているのである。

なお，朴（2016）は「気にしない」系語彙的否定形式の「いい」は，「まったく」とは共起せず，「全然」とのみ共起すると指摘している（3.2.1 節）。

(32) a. 「本当にせっかくのいい気分のときに，すみませんでした……」「いや，そんなのはぜんぜんいいんです」と，ぼくは言った。 （＝（6a））
b. *いや，そんなのはまったくいいんです。 （＝（6b））

次のように，語彙的否定形式の「いい」は程度副詞による修飾を受けにくく，さらに「ほとんど」とも共起しない点で（佐野（1999）の分類から言えば）やや特殊な形容詞と考えられる。

(33) a. ??いや，そんなのは｛非常に／あまり｝いいんです。
b. ??いや，そんなのはほとんどいいんです。

「ほとんど」と共起しないということは「極限（点）」が想定され得ないということであり，そのために差分が皆無であることを表す「まったく」とは共起しにくいと考えられる。また，程度副詞による修飾を受けにくいということは「程度性」

を持たないということを意味する。従って，一見すると程度を問題にする「全然」との親和性も低いように思われるが，「全然」とは共起可能である（(32a)）。

その点について，ここでは「いい」が用いられる文脈に支えられて「全然」との共起が可能になっていると考える。前述の通り，「全然」は程度が甚大であることを表す，言い換えれば当該の対象の状態が何らかの基準から大幅に乖離していることを表す。語彙的否定形式の「いい」が用いられる場合，その基準に相当するものが文脈に存在すると考えられる。例えば，（32）では「いい気分を害した」といった「想定」が存在しており，「全然」はそれを基準に据え，実際はその基準から大幅に乖離した状態にあるということを表している。つまり，語彙的否定形式の「いい」は，それ自体が「程度性」を持つわけではないものの，「いい」が用いられる文脈における基準の存在によって「全然」と共起しやすくなっているのである。

3.3.5 「全然」が例外を許容する要因

このように，「まったく」は差分が皆無であることを表し，「全然」は程度が甚大であることを表すと捉えることで，両者が共起可能な述語が一部異なるという先行研究の指摘に対して説明を与えることができる。一方で，先行研究では両者の相違点として，「全然」が例外を許容するということも指摘されていた。これについても，「全然」が差分を問題にせず，程度を問題にすることに起因していると考えられる。

武内（2015）によれば，次の（34）は（36a）の場合にのみ容認されるのに対し，（35）は（36a）と（36b）のいずれの場合にも容認され得る（3.2.2 節）。

(34)　今年は当地ではまったく雪が降らない。　（＝（9a））

(35)　今年は当地ではぜんぜん雪が降らない。　（＝（9b））

(36) a.　「どこを見渡しても雪が完全に積っていない」場合

b.　「2 メートルの積雪」がある場合

まず，「まったく」は差分が皆無であることを表すため，（34）は「雪が降る」という事態が存在しない（生じない）ことを表す。従って，多少なりとも「雪が降る」という事態の生起は許容されず，（36b）の場合には「まったく」は用いられない。これに対し，「全然」は程度が甚大であることを表すため，（35）は「雪が降らない」の程度が甚大であることを表す[13]。このとき，差分の有無については問題にされないため，客観的には「雪が降る」という事態の生起が認められる場合であっても，「雪が降らない」の程度が甚大であると判断されれば，「全然」の使用には支障がない。そのため，（36b）の場合にも「全然」が用いられ得るのである。

3.4　広義全称表現の「全否定」ととりたて詞の「限定」

3.4.1「まったく」「全然」と「だけ」「ばかり」の共通性

以上，ここまで「まったく」は差分が皆無であることを表し，「全然」は程度が甚大であることを表すということを主張してきたが，このように捉えることの重要性は，佐藤（2017）で指摘されるような「だけ」と「ばかり」の差との共通性を捉えられるところにある。

佐藤（2017）は，「だけ」「ばかり」は「母語話者が，ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」（佐藤 2017: 3）にもかかわらず，「ばかり」は「非該当例」（佐藤 2017）を許容することがあるとする[14]。例えば，次のような場合がこれに当たる。

（37）　（月曜日から土曜日はビールを飲み，日曜日はワインを飲んだ場合）
先週はビール｛ばかり／*だけ｝飲んだ。　（佐藤 2017: 6，下線は筆者）

[13]「(雪が）降らない」は狭義の「程度性」には該当しないが，「量」と捉えれば広義には一種の「程度性」を持つと考えることが可能である。程度と量の連続性については仁田（2002）を参照されたい。

[14] 第 2 章 2.3.1.1 節でも述べた通り，このことは「ばかり」を扱う多くの先行研究においても指摘されている（寺村 1981；菊池 1983；沼田 1992；定延 2001；澤田 2007 他）。

（37）は，飲んだものがビールに限られない場面でも「ビールばかり飲んだ」という発話が可能であることを示す。一方，同様の場面で「だけ」の使用は許されない。佐藤（2017）は，この要因を「集合形成のプロセス」（佐藤 2017）の違いに求めており，「ばかり」は主体にとって非常に捉えられやすい事態のみから成る主観的な集合を形成すると述べている（詳細は第 2 章 2.3.1.2 節参照）。佐藤（2017）は，この主体にとっての捉えられやすさを「認識的際立ち性」と呼び，その「認識的際立ち性」を持たない事態はそもそも集合の成員にならないとする。「非該当例」が存在していても「ばかり」が用いられ得るのはこのことに起因すると指摘している。

この「ばかり」に関する現象は，「そうでないものや事態」の存在が認められる場合でも用いることができるという点で「全然」と共通している。また，「ばかり」と意味的に類似するものであるにもかかわらず，「だけ」はそのような場合の使用が認められないという点も，「まったく」と「全然」の関係と共通している。これは，「だけ」と「ばかり」の差が「まったく」と「全然」の差と並行的に捉えられることを示唆している。つまり，佐藤（2017）は「非該当例」の存在を許容する「ばかり」について，「認識的際立ち性」を持つ事態に対して用いられると特徴付けているが，「全然」との共通性を勘案すれば，「ばかり」が有するこの「認識的際立ち性」という特徴は，「（主観的でもあり得る）基準に照らした程度（ここでは頻度）の甚大さ」として包括的に捉え直すことが可能である[15]。

これに対し，「だけ」は（37）の例で言えば「ビール以外を飲む」ことを排除する[16]。この「ビール以外を飲む」という事態を「ビールを飲む」こととの差分

[15] ただし，「全然」が程度の甚大さを表すことと「ばかり」が程度の甚大さを表すことは仕組みが異なる可能性もある。しかし，本論文では「全然」と「ばかり」が程度に関わる点で共通することを示すことが重要であるため，これ以上は立ち入らない。この点については，今後「全称」と「限定」の関係を分析するに当たり，とりたて詞の議論を十分に踏まえた上で検討する。

[16] 日本語記述文法研究会編（2009）では，「だけ」は「その要素が唯一のものであることを示し，同類のほかのものを排除する」（日本語記述文法研究会編 2009: 46）意味を持つとされている。

であると考えると，「だけ」が「ビール以外」を排除するということは，「ビールを飲む」ことの差分を排除すると捉えることができる。「だけ」をこのように捉えると，「だけ」と「まったく」に共通性が見出される。つまり，これらはいずれも差分がないことに言及する表現なのである。

3.4.2　比較文における容認度

また，「まったく」「全然」と「だけ」「ばかり」は，比較を表す文（以下，比較文）における適格性に差がある点でも共通している。例えば，「まったく」と「全然」をいずれも用いることが可能であった次の（38）を（39）のような比較文にすると，「まったく」の許容度が下がる。

(38) a.　あの小説は｛まったく／全然｝面白くない。　（＝（7a)(13a)）
　　b.　この店のコーヒーは｛まったく／全然｝苦くない。　（＝（7b)(13b)）
(39) a.　あの小説はこの小説より｛??まったく／全然｝面白くない。
　　b.　この店の珈琲は市販品と比べて｛??まったく／全然｝苦くない。

また，「だけ」と「ばかり」においても同様の差が観察される。BCCWJ から収集した「ばかり」の用例には比較文であるものが観察されるのに対し，「だけ」の用例には観察されず[17]，次の「ばかり」を「だけ」に置き換えた文の許容度も低いと言える。

(40) a.　われわれの若かった頃は，〔筆者略〕技術とか知識よりも感性とかセンス

[17]「ばかり」と「だけ」の用例は，コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver. 2.4.5）を用い，以下の条件で短単位検索を実施して収集した。
（vi）　キー：品詞「助詞－副助詞」AND 語彙素「ばかり」
（vii）　キー：品詞「助詞－副助詞」AND 語彙素「だけ」
（vi）の条件での検索から収集された「ばかり」の用例については，「より」「に比べ」と共起する文（ここでの比較文）が 30 例観察される。これに対し，（vii）の条件での検索から収集された「だけ」の用例については，「より」「に比べ」と共起する文は観察されない。

ばかりが重要視されてましたよね。（玉木正之『天職人』, 下線は筆者）

b. それからというもの，未来のことより過去のことばかりが気になり始めたのです。（『俳句研究』2005 年 12 月，下線は筆者）

c. 今 1 歳 4 ヶ月，まだまだ大変ですが，低月齢の頃を振り返ると不思議と大変さより楽しかったことばかり思い出されます。

（Yahoo!知恵袋 2005 年，下線は筆者）

(41) a. ??技術とか知識よりも感性とかセンスだけが重要視されてましたよね。

b. ??未来のことより過去のことだけが気になり始めたのです。

c. ??大変さより楽しかったことだけ思い出されます。

こうした現象も，「まったく」「全然」と「だけ」「ばかり」に前述のような差があることについて示唆的である。比較について，森山（2004）は「複数の要素について，特定の共通する属性の程度から位置づける表現」（森山 2004: 32）であると述べている。つまり，比較文とは程度を問題とする文であり，その点において程度が甚大であることを表す「全然」「ばかり」は問題なく許容される。しかし，「まったく」「だけ」は差分が皆無であることを表し，そこに程度性は関与しない。そのため，「まったく」「だけ」は比較文では用いられにくいのである[18]。

3.5 おわりに

3.5.1 本章のまとめ

本章では，「まったく」「全然」を取り上げ，「全否定」と広義全称表現について議論した。まず，「まったく」と「全然」が共起可能な述語が一部異なることについては，前者は差分が皆無であることを表すのに対し，後者は程度が甚大であることを表すという差に起因すると主張した。次に，「全然」が例外を許容することについては，「全然」が差分を問題にしないことによって生じる現象であ

[18] 肯定文における「全然」については，比較の表現と共起する場合に許容度が高くなることが野田（2000）や尾谷（2008）によって指摘されている。

ると主張した。さらに，こうした「まったく」と「全然」の差が「だけ」と「ばかり」の差と並行的に捉えられることを指摘し，典型的には「そうでないものや事態」の存在が認められないことを表す表現が，差分が皆無であることを表すものと程度が甚大であることを表すものに分けられる可能性を示した。この点については，第 7 章 7.1.2 節で改めて述べることとする。

3.5.2　先行研究が指摘する「まったく」「全然」と「決して」の差

ところで，第 1 章 1.1 節で述べた通り，「決して」も「全否定」に関わるとされる点で「まったく」「全然」と共通する。しかし，先行研究では，「決して」は「まったく」「全然」とは関わる否定の側面が異なることが指摘されている。

田中（1983）によれば，「否定文には二様の構造把握が可能である」（田中 1983: 77）とされる。例えば，田中（1983）は次の（42）の否定文には（43a）と（43b）の 2 つの理解が可能であるとしている。

(42)　この本は面白くない　（田中 1983: 77）

(43) a.　「この本」が，「面白い」と呼ぶことが認められないような，そのようなありかたにおいてあると見る理解　（田中 1983: 77-78, 傍点を省略）

b.　「この本」を「面白い」と呼ぶことへの否認　（田中 1983: 77）

(43a）は「ひとつの消極的なコトガラ内容を見出すもの」（田中 1983: 78）であるのに対し，(43b）は「ある肯定的なことがらが“そうではないのだ”と打ち消されるとする構造把握」（田中 1983: 78）であるとされる。さらに，田中（1983）は（43a）について次の（44a）のように，(43b）について（44b）のように述べる。

(44) a.　これは，文全体によって表される，事態の対象的なありかたの面に重きをおいた理解のしかたにほかならない。したがってこの把握における構造は，<u>対象構造</u>と呼ぶことができるであろう。

（田中 1983: 78，下線は筆者）

b. これは打ち消しという作用の面に重きを置いた理解のしかたにほかならない。したがって，この把握における構造を作用構造と呼ぶことができるであろう。（田中 1983: 78，下線は筆者）

その上で，「この二様の構造把握にあたかも対応するかのように，陳述副詞のがわにも，その一方の構造を選択的に顕勢化するものが認められる」（田中 1983: 78）と指摘し，その代表例として「全然」と「決して」を挙げる。例えば（42）の文で「全然」を用いた（45a）は（45b）のように，「決して」を用いた（46a）は（46b）のように解釈されると指摘する。

(45) a. この本は全然面白くない。（田中 1983: 78，下線は筆者，一部略）

b. この本には，面白さというものがおよそ見当たらない・欠けている（田中 1983: 78）

(46) a. この本は決して面白くない。（田中 1983: 78，下線は筆者，一部略）

b. 「この本」を「面白い」と呼ぶことなどおよそできない（田中 1983: 78）

このことから，田中（1983）は「全然」は否定の「対象面」で働き，「決して」は否定の「作用面」で働くと指摘している。また，「全然」と同様に否定の対象面で働く副詞の例として「まったく」「皆目」「一向に」等を，「決して」と同様に否定の作用面で働く副詞の例として「断じて」を挙げている。

以上，「まったく」「全然」と「決して」は関わる否定の側面を異にするという田中（1983）の指摘を概観した。この指摘に鑑み，本論文では「決して」を「まったく」「全然」とは章を分けて論じる（第 6 章）こととする。

第 4 章

「数量」と広義全称表現

4.1　はじめに

本章では，「全称量化詞」と呼ばれる「全部」「全員」「みんな（みな）」「すべて」を取り上げ，「数量」と広義全称表現について議論する。

「全部」「全員」「みんな」「すべて」は，仁田（2002）では「程度量の副詞」の中の「量の副詞」に位置付けられており，「大部分」「半分」「少数」などと共に「全体（数）量に対する割合のありようを表すもの」（仁田 2002: 191）とされる。また，これらの表現は次の（1a）のような「典型的な量の副詞に比して名詞性が高い」（仁田 2002: 191）とされ[1]，（1b）のような「いわゆる数量詞につながるもの」（仁田 2002: 191）とも述べられている。

（1）a.　タクサン，大勢，イッパイ，タップリ　　（仁田 2002: 191, 抜粋）
　　b.　二ツ，3 個，4 台，5 箇所，6 本，数十人…　　（仁田 2002: 191）

実際に，従来の研究では，「全部」「全員」などは数量詞に関する議論においても取り上げられ，その特徴に関する指摘がなされている（4.2.1 節にて詳述）。ただし，仁田（2002）や数量詞に関する議論においては「全部」「全員」などは一括して扱われ，個々の相違点については注目されていない。

[1] 程度副詞に関する研究である工藤（1983）では，「程度の概念に近いもの」（工藤 1983: 178）のうち「全量および概括量のもの」（工藤 1983: 178）に当たるものとして「全部」「全員」「みんな」などが挙げられているが，そこでもこれらが典型的な程度副詞，あるいは量副詞に比して名詞性が高いことが示唆されている。

一方で，一部の先行研究では「全部」「全員」などの各表現の振る舞いに差があることが指摘されている。しかし，そのほとんどにおいては現象が示されるに留まり，その要因については十分に明らかにされていない（4.2.2 節にて詳述）。これに対し，本章では「全部」「全員」「みんな」「すべて」が次のような意味や働きを持つことを主張し，それによって先行研究で指摘されてきた一連の現象の要因が説明可能となることを明らかにする。

（2） a. 「全部」「全員」「すべて」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる複数の要素の数と等しいことを表す。

b. 「みんな」は，多数のモノ（あるいは人）から成る集合体を表す。

（3） a. 「全部」「みんな」は，単一個体（モノ）を部分から成る集合と捉え，それを母集合とすることができる。

b. 「すべて」は，単一個体を部分から成る集合と捉えにくいが，「I 部分構造」を成す構文に埋め込まれた場合，構文の要求に応える形で単一個体を「事態の集合体」と捉えて母集合とすることができる。

4.2 先行研究

4.2.1 先行研究から導かれる各表現の共通点

まずは，先行研究から導かれる各表現の共通点を確認する。加賀（1997）は，数量詞は「常に母集合を前提とし，その値との比率を問題にする」（加賀 1997: 127）ものと「母集合を前提としない」（加賀 1997: 127）ものに分けられるとし，前者を「比率的数量詞」[2]，後者を「基数的数量詞」と呼んでいる[3]。加賀（1997）は前者の例として次の（4a）を，後者の例として（4b）を挙げている（「・」は

[2] 長谷川（1994）など，「割合数量詞」と呼ぶ研究もある。

[3] 加賀（1997）の議論は，Milsark（1977）や Horn（1989）などの分析を発展させたものである。なお，加賀（1997）の言う「比率的数量詞」と「基数的数量詞」は，Milsark（1977）ではそれぞれ‘strong quantifier’（強い数量詞），‘weak quantifier’（弱い数量詞）と呼ばれている。

英語と日本語の対応を示す)[4]。

（4） a.　some・いくつか，many・多く，most・大部分，all／every・全部／全員
（加賀 1997: 129, 抜粋）

b.　some／a few・いくつか／少し，several，many／a great deal of・たくさん／多数　（加賀 1997: 130, 抜粋）

このうち，加賀（1997）は「比率的数量詞」に当たる‘all’と‘most’について次のように述べている。

（5）　たとえば，all / most student という表現を考えてみると，この表現がそもそも成立するためには，（然るべきコンテクストにおいて語用論的に限定された）ある学生の集合が与えられていなければならない。その集合の大きさが母集合の値である。問題となる（たとえば，部屋にいる）学生の数がその値と等しいときに All students（are in the room.）という表現になり，それに近いが「すべて」ではないというときに Most students（are in the room.）と言う表現になる。　（加賀 1997: 126, 下線は筆者）

つまり，‘all’‘every’，「全部」「全員」は任意の母集合を前提とし，問題となる対象の数がその母集合の値と等しいことを表すとされるのである。

また，森田（1989）と飛田・浅田（1994）では，「みんな」「すべて」も母集合を前提とする表現であることが示唆されている。両研究では次のように述べられている。

（6） a.　〔筆者注 :「すべて」は〕初めからある範囲を決めて，その中に存在するものを漏れなく全部と考える〔筆者略〕。

[4] 加賀（1997）は，英語の‘some’と‘many’，日本語の「いくつか」には「基数的数量詞」としての用法と「比率的数量詞」としての用法があると述べている。

（森田 1989: 1103，下線は筆者）

b. 〔筆者注 :「みんな」は〕ふつうある範囲を定めて，その範囲の人間全部という意味になる。（飛田・浅田 1994: 518，下線は筆者）

この「ある範囲」（下線部）は母集合に相当すると考えられる。

以上の先行研究の指摘に倣えば，「全部」「全員」「みんな」「すべて」は次の点で共通しているとまとめられる。

(7) 「全部」「全員」「みんな」「すべて」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる要素の数と等しいことを表す。[5]

4.2.2 各表現の相違点について

4.2.2.1 森田（1989）の指摘とその問題点

次に，各表現の相違点に言及する研究の指摘を概観する。まず，森田（1989）は「みんな」と「すべて」の相違点に言及している。森田（1989）は次のように述べ，「みんな」と「すべて」は対象の捉え方に違いがあることを指摘する。

(8) a. 「皆」は対象を一つの全一体と考え，“その全体の端から端まで百パーセント”の意。〔筆者略〕「皆」が個々の集合体である場合も，全体を一つのまとまりとして考える。（森田 1989: 1102，下線は筆者）

b. 「すべて」は〔筆者略〕ばらばらであった部分部分のまとまりという意識が強い。一つの全体ではなく，個々の総体である。

（森田 1989: 1101，下線は筆者）

森田（1989）は，「みんな」と「すべて」に（8a）（8b）のような相違を認める論

[5] 仁田（2002）が「全部」「全員」「みんな」「すべて」などを「全体（数）量に対する割合のありようを表すもの」と位置付けている（4.1 節）ことも，これらがいずれも母集合を前提とする表現であることを示唆している。

拠として，次の現象を挙げている。

(9)　「あんな大きなリンゴを一人でみんな食べちゃったのかい」のような一つの全体（個）に対しては「すべて」は使えない。「一人ですべて食べた」と言えば，幾つかのリンゴ（もしくは幾切れかのリンゴ）を一人で食べたことになる。(「すべて」は三以上の数をさすのが普通)

（森田 1989: 1101-1102，下線は筆者）

「みんな」と「すべて」の相違点について具体的な現象を交えて指摘している研究は管見の限りこの森田（1989）を除いて存在せず，その点で以上の指摘は注目に値する。しかし，検討の余地も残されている。

まず，森田（1989）は，「みんな」は「一つの全体（個)」，即ち単一個体に対しても用いられるのに対して「すべて」は用いられないとしているが，どのような場合にもそうであるとは限らない。例えば，「みんな」は次の（10）のように単一個体に対して用いると不自然になる場合があり，反対に「すべて」は（11）のように単一個体に対して用いられている実例が確認される。

(10)　*彼をみんな解雇した。

(11)　あたしはあなたのすべてを知っているわ。

（日野鏡子『少年宮殿』，下線は筆者）

次に，森田（1989）は「全部」「全員」については考察の対象としておらず，基本的に「みんな」あるいは「すべて」と同義のものとして扱っていると推察される。森田（1989）は「みんな」と「すべて」に言及する中で次のように述べている。

(12) a.　「皆」は〔筆者略〕古くは人を対象として“居合わせた人が，一人二人の例外なく全員”の意を表すことが多かったが，事物にも用いられ，“あ

るものはどれもこれも全部”の意も表す。

（森田 1989: 1101，下線は筆者）

b. 「すべて」は“全部”の意で，人を意味しない。[6]

（森田 1989: 1101，下線は筆者）

つまり，モノを指示する「みんな」は「全部」と，人を指示する「みんな」は「全員」と意味的に重なり，「すべて」はモノのみを指示して「全部」と意味的に重なることが示唆されている。確かに，「みんな」と「全部」「全員」，「すべて」と「全部」は相互に置き換えられる場合も多く，その点で意味的に近接した表現であると考えられる。しかし，これらは相互に置き換えられるとは言いにくい場合もある。例えば，次の（13）の「全部」「全員」を「みんな」に置き換えた（14）は，（13）に比して容認度が（やや）低い。

(13) a. アンケートに応じてくれたのは全部で百四十五人。

（増子義久『東京湾が死んだ日』，下線は筆者）

b. 関大水泳部でのテストでは 4 人全員が五十メートルで自己ベストを約 1 秒更新したそうです。（Yahoo!ブログ 2008 年，下線は筆者）

(14) a. ??アンケートに応じてくれたのはみんなで百四十五人。

b. ?関大水泳部でのテストでは 4 人みんなが自己ベストを更新した。

また，次の例のように，「すべて」と「全部」にも置き換えられない場合があることが先行研究で指摘されている（4.2.2.2 節）。このことから，これらは意味的に近接した表現でありながらも，その振る舞いには差があると言える。

4.2.2.2 飛田・浅田（1994）の指摘とその問題点

次に，飛田・浅田（1994）は「みんな」「すべて」「全部」がいずれも異なる意

[6] 森田（1989）は，「『すべて』が人を指すためには，『すべての人』のように言わなければならない」（森田 1989: 1101）としている。

味を持つとしている。飛田・浅田（1994）は次のように述べている。

(15) a. 〔筆者注 :「みんな」は〕構成要素を一つ一つ吟味することなく，まとめて一つに扱う暗示がある。（飛田・浅田 1994: 518）

b. 「すべて」は構成要素を吟味した結果，全体を通してある一つの視点で一貫している暗示がある。（飛田・浅田 1994: 518）

c. 〔筆者注 :「全部」は〕総体を表す語であるが，個々の構成要素に視点がある。（飛田・浅田 1994: 221）

特に，「すべて」と「全部」については次の例の容認度に差があることを指摘している。

(16) a. （本のタイトル）パソコンのすべて。

（飛田・浅田 1994: 210，下線は筆者）

b. *パソコンの全部。[7]（飛田・浅田 1994: 211）

「みんな」は構成要素を吟味せずにまとめて一つに扱う（(15a)）のに対し，「すべて」は構成要素を吟味する（(15b)）という指摘は，森田（1989）による指摘（前掲（8a）（8b））と類似している。一方で，森田（1989）と異なるのは「全部」を「みんな」（と）「すべて」と区別する点であるが，（15）ではその意味的相違点を明確に捉えることができない（特に（15b）と（15c）における「すべて」と「全部」の説明は類似しているように読める）。また，（16a）と（16b）の容認度の差については首肯できるが，その差が（15a）と（15c）によって十分に説明されているとは言えない。

[7] （16b）の判定記号「*」は，飛田・浅田（1994）の「×」を便宜的に改めたものである。なお，飛田・浅田（1994）では「使えない用例」（飛田・浅田 1994: xiii）に「×」の記号が付されている。

4.2.2.3　佐藤（2017）の指摘とその問題点

次に，佐藤（2017）は「全部」「全員」と「みんな」の相違点を指摘している。例えば次の（17a）では「全員」と「みんな」がいずれも適格であるのに対し，（17b）では「みんな」のみが適格であるとする。

（17）a.　この店の店員は｛みんな／全員｝勤勉だ。（佐藤 2017: 6，下線は筆者）
　　b.　日本人は｛みんな／*全員｝勤勉だ。（佐藤 2017: 6，下線は筆者）

両文の差は，例外がない状況が想定可能か否かという点にある。（17a）の場合，例外がない（ある店の店員が例外なく勤勉である）状況を想定することが可能であるが，（17b）の場合は例外がない（日本人が例外なく勤勉である）状況を想定しにくいとされる。佐藤（2017）は（17b）について次のように述べている。

（18）　常識的に考えて一億人を超える日本人が例外なく勤勉であるとは考えられない。（佐藤 2017: 6）

この現象を通じて，佐藤（2017）は，「全部」「全員」「みんな」はいずれも「母語話者が，ある集合の全要素が該当することを表すという直観を持っている」（佐藤 2017: 3）形式であるものの，「みんな」は例外を許容し得る点で「全部」「全員」とは異なると指摘している。

佐藤（2017）は，「全部」「全員」と「みんな」に相違があることを具体的な現象を以って示しているのみならず，森田（1989）などにおいて「みんな」が例外を許容しないとされていること（前掲（12））に問題があることを示唆する点で重要である。しかし，佐藤（2017）は現象の指摘に留まり，「全部」「全員」と「みんな」にこのような相違が見られる要因については検討を保留している。

4.2.3　本章の方針

以上，先行研究ではそれぞれ興味深い指摘がなされているが，いずれも不十分

な点を含むことを示した。次節以降では，先行研究で指摘されている現象の再検討などを通じ，「全部」と「全員」，「みんな」，「すべて」の順で考察を行い，各表現の意味と働きの違いを分析する。

4.3 「全部」と「全員」

まず，「全部」と「全員」を比較する。前述の通り，これらは問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる要素の数と等しいことを表す点で共通している（前掲（7））。一方で，以下ではこれらが単一個体に対する使用可能性や指示対象において差が見られることを確認する。

4.3.1 単一個体に対する使用可能性と指示対象

まずは，単一個体に対する使用可能性について検討する。前述の通り，森田（1989）は「みんな」「すべて」について単一個体（「一つの全体（個）」）に対する使用の可否を検討しているが，「全部」「全員」については言及していない。そこで，これらの表現の単一個体に対する使用可能性を明らかにすべく，BCCWJ から「全部」「全員」の用例を収集して分析した[8]。その結果，「全部」については単一個体に対して用いられている例が確認された。

(19) a. 〔筆者略〕必死の思いでそのヨウカンを一本全部食べてしまい，大いに気分が悪くなって，それ以来，ヨウカンは食べたくないというのである。（西江雅之『わたしは猫になりたかった』，下線は筆者）

b. キャベツ半分を百円で買うのと，まるまる一個を八百屋で買うのとどっちが割安になるのか。一個全部使い切ることができるのなら八百屋

[8] 「全部」「全員」の用例は，コーパス検索アプリケーション「中納言」（ver. 2.4.5）を用い，以下の条件で短単位検索を実施して収集した。

(i) キー：語彙素「全部」

(ii) キー：語彙素「全員」

で買ったほうが割安だが，明日の夜私にはビストロ・ナカの賄い飯がある。（『群像』2002 年 6 月号，下線は筆者）

従って，「全部」は単一個体に対しても用いられると言える。これに対し，「全員」が単一個体に対して用いられている例は確認されない。また，次の作例においても「全員」は不適格であることから，「全員」は単一個体に対しては用いられないと言える。

(20)　*彼を全員解雇した。

以上のことから，「全部」と「全員」には，単一個体に対する使用可能性について次のような差があるとまとめられる。

(21) a.　「全部」は単一個体に対しても用いられる。
　　b.　「全員」は単一個体に対しては用いられない。

次に，「全部」と「全員」の指示対象について確認する。(19) において「全部」が適格であることから明らかな通り，「全部」は「ヨウカン」「キャベツ」というモノを指示し得るが，「全部」はモノだけでなく人をも指示し得る。例えば次の例では，「全部」は「彼ら」「医者」を指示している。

(22) a.　いくら，今夜のオペラが見ものだとはいっても，彼ら全部がここへやって来るなんて，偶然にそんなことが起りうるだろうか？
（赤川次郎『三毛猫ホームズの歌劇場』，下線は筆者）
　　b.　実際，イギリスで学位を取った医者が，全部アメリカへ行って開業する。（長谷川慶太郎『大分水嶺』，下線は筆者）

一方で，「全員」はモノを指示対象とし得ず，人のみを指示対象とする。

(23) a.　彼らを全員集めた。

b. *これらの本を全員集めた。

このように，「全部」と「全員」は共に人を指示し得る。ただし，「全部」が人を指示するに当たっては一定の制約がある。例えば，次の（24）の「全員」は「全部」には置き換えられない（(25)）。

(24) a.　彼らは全員で右を向き，それから左を向いた。

（リドリー・ピアスン著／橋本夕子訳『炎の記憶』，下線は筆者）

b.　名前が書かれている捜査員は九人。いずれも実在の捜査員であり，竹内記者は全員と面識があった。

（北海道新聞取材班編『日本警察と裏金』，下線は筆者）

(25) a. *彼らは全部で右を向き，それから左を向いた。

b. *いずれも実在の捜査員であり，竹内記者は全部と面識があった。

以上のことから，「全部」と「全員」には，指示対象について次のような差があるとまとめられる。

(26) a.　「全部」は基本的にモノを指示対象とする（場合によっては人を指示することもある）。

b.　「全員」は人のみを指示対象とする。

このように，「全部」と「全員」は単一個体に対する使用可能性，及び指示対象において差が見られるが，これらは密接に関係している。前述の通り，「全部」は単一個体に対しても使用可能であるのに対し，「全員」は使用不可能である。しかし，「全部」が単一個体に対して用いられるのは，それがモノの場合に限られ（(27a)），人の場合はそれが単一個体であれば「全部」は用いられない（(27b)）。

(27) a. 【リンゴ＝1 個】このリンゴを全部食べた。

b. *彼を全部解雇した。

一方,「全員」は単一個体に対しては用いられないが，前述の通り,「全員」は人のみを指示し，モノは指示対象とし得ない（(23)）。つまり，単一個体に対する使用可能性は，それがモノか人かによって異なるのであり,「全部」と「全員」の間でその可能性に差があるのは，これらが指示し得る対象が異なることに起因すると言える。このことは次のようにまとめられる。

(28) a. 「全部」は，モノを指示する場合に限り，それが単一個体であっても用いられ得る。

b. 「全部」「全員」は，人を指示する場合（「全員」は人のみを指示する），それが単一個体であれば用いられない。

4.3.2 単一個体のモノと人の相違点

ところで,「全部」「全員」は基本的には複数の対象を指示するものと考えられる。例えば，次の（29）では複数の対象が，（30）では単一の対象が問題にされているが，後者は不自然である。

(29) a. 研究室には，先輩達が書いた博士論文が全部ある。

b. 社内会議には，役員達が全員出席した。

(30) a. ??研究室には，私が書いた博士論文が全部ある。

b. ??社内会議には，社長が全員出席した。

それにもかかわらず，単一個体のモノに対して「全部」が使用可能な場合があるのは，モノの場合は単一個体を複数の部分から成る集合体と捉えられ得ることに起因している。

例えば,「食べる」「使う」といった事態は，ある単一個体としてのモノの一部分に対して成立する場合がある。これは，次のような文が自然であることから示唆される。

(31) a. 【ヨウカン＝1 個】このヨウカンを｛一部／半分｝食べる。
b. 【キャベツ＝1 個】このキャベツを｛一部／半分｝使う。

このことは，モノの場合は事態によっては部分から成る集合体と捉えられ得ることを示している。単一個体に対して用いられる「全部」は，この「一部」「半分」の延長線上に位置付けられる。例えば，次の文では単一個体の「ヨウカン」「キャベツ」が部分から成る集合体と捉えられており，「食べる」「使う」という事態がその全部分にわたって成立することを表していると言える。

(32) a. 【ヨウカン＝1 個】このヨウカンを全部食べる。
b. 【キャベツ＝1 個】このキャベツを全部使う。

つまり，基本的には複数の対象を指示する「全部」が（32），あるいは前掲（27a）のように用いられている場合，対象を単一個体として指示していると言うよりも，それを構成する複数の部分を指示しているのである。

これに対し，単一個体の人の場合，その一部に対して成立する事態というものを想定しにくく，複数の部分から成る集合体と捉えられにくい。そのため，単一個体の人に対しては「全部」「全員」共に用いられないのである。

以上,「全部」「全員」は次の（33a）のような特徴を持ちながらも,「全部」は（33b）のような背景を経て単一個体としてのモノに対しても用いられ得ることを述べた。

(33) a. 「全部」「全員」は，基本的に複数のモノや人を指示する。
b. モノの場合，述語で表される事態によっては，単一個体が複数の部分か

ら成る集合体と捉えられる場合がある。

4.3.3 「全部」と「全員」の共通点と相違点

以上，「全部」と「全員」について議論してきたが，ここで両者の共通点と相違点をまとめる。

まず，前掲（7）では，先行研究の指摘から，両者は問題となる対象の数が前提となる母集合に含まれる要素の数と等しいことを表す点で共通するということが導かれるとしたが，本論文ではこれに一部加筆し，両者の共通点を次のようにまとめることとする。

(34)　「全部」「全員」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合（単一個体のモノの場合は部分に分割した集合体）に含まれる複数の要素の数と等しいことを表す。　（(7) に下線部分を加筆）

一方で，両者には次のような相違点があるとまとめられる。

(35) a.　「全部」は，基本的にモノの集合を母集合とし，述語で表される事態によっては，単一個体のモノに対しても用いられる（人の集合を母集合とすることもあるが，単一個体の人を母集合とすることはない）。

b.　「全員」は，人の集合を母集合とし，単一個体に対しては用いられない。

4.4 「みんな」

次に，「みんな」について分析する。前述の通り，森田（1989）は「みんな」が「全部」「全員」と意味的に重なることを示唆している。一方で，飛田・浅田（1994）ではこれらに意味的な相違があることが示唆されており，さらに佐藤（2017）ではこれらが例外の（非）許容という点で異なることが指摘されている。これに対し，以下では，先行研究において注目されてこなかった現象を取り上げ

て「全部」「全員」との意味的相違を明らかにする。また，その意味的相違が，佐藤（2017）が指摘する例外の（非）許容に関する「みんな」と「全部」「全員」の差の要因となっていることを示す。

4.4.1　指示対象と単一個体に対する使用可能性

まず，「みんな」の指示対象と単一個体に対する使用可能性を確認する。「みんな」の指示対象について，森田（1989）はモノの場合も人の場合もあるとしている（前掲（12））。飛田・浅田（1994）でも次のような例が挙げられていることから，森田（1989）が指摘するように，「みんな」はモノを指示する場合も人を指示する場合もあると言える。

(36) a.　ここにあったケーキ，みんな食べちゃったの？

（飛田・浅田 1994: 518，下線は筆者）

b.　うちは家族がみんな風邪をひいている。

（飛田・浅田 1994: 518，下線は筆者）

ただし，森田（1989）は，「みんな」は基本的には人を指示することを示唆している。森田（1989）は次の例について，「荷札をすべての荷物に付けるような場合」（森田 1989: 1101）は「全部」を用いた方が自然であると指摘している。

(37) a.　荷札を全部に付けてください　（森田 1989: 1101，下線は筆者）

b. #荷札をみんなに付けてください[9]

（森田 1989: 1101，下線は筆者，「#」は森田の記述に基づき筆者が付与）

つまり，「みんな」には指示対象について次のような特徴があると言える。

[9] 森田（1989）では明言されていないが，（37b）は荷札を人に付ける場合は自然になると考えられる。

(38)　「みんな」は基本的に人を指示対象とする（場合によってはモノを指示することもある[10]）。

また，森田（1989）は次の（39a）のような例を以って，「みんな」は単一個体（「一つの全体（個）」）に対しても使用可能と述べているが，「全部」と同様，これもリンゴというモノを指示しているためであり，人を指示する場合，「みんな」はそれが単一個体であれば不適格になる（(39b)）。

(39) a.　【リンゴ＝1 個】このリンゴをみんな食べた。
　　b.　*彼をみんな解雇した。　（＝（10））

以上のことから，「みんな」の指示対象と単一個体に対する使用可能性については次のように指摘することができる。

(40)　「みんな」は，基本的に人の集合を母集合とする（モノの集合を母集合とすることもあり，その場合，述語で表される事態によっては単一個体としてのモノに対しても用いられ得る）。

4.4.2 「全部」「全員」との相違点について

以上のことを踏まえて，「みんな」を「全部」「全員」と比較すると，「みんな」はモノも人も指示対象とし得，モノを指示対象とする場合はそれが単一個体であっても用いられ得るという点で，「全部」と共通する特徴を持つと言える（ただし，「みんな」は基本的に人を指示するのに対し，「全部」は基本的にモノを指示する）。

しかし，「みんな」は「全部」「全員」のいずれとも異なる特徴も持つ。以下では，「全部」「全員」「みんな」がいずれも人を指示対象とし得ることに鑑み，人

[10]「みんな」がモノを指示するための条件（モノを指示しやすい環境）については，今後，十分な検討を踏まえて整理する。

を指示する場合, 特に複数の人を指示する場合に限定して分析し,「全部」「全員」と「みんな」の相違点を明らかにする。

4.4.2.1　母集合の構成要素の全数に言及する場合

まず，次の（41）の「全部」「全員」は，いずれも文意を変えずに「みんな」に置き換えることが可能である（(42)）。

(41) a.　ところが, そのときの足寄高校のバスケット部っていうのが, 三年生が全部やめて，二年生しかいないわけ。

（松山千春『足寄より』, 下線は筆者）

b.　合格の知らせを家族全員が待っていた。

（飛田・浅田 1994: 151, 波線は筆者）

(42) a.　三年生がみんなやめて，二年生しかいない。

b.　合格の知らせを家族みんなが待っていた。

しかし，次の（43）のような文の「全部」「全員」は,「みんな」には（やや）置き換えにくい。

(43) a.　アンケートに応じてくれたのは全部で百四十五人。

（＝（13a), 波線加筆）

b.　関大水泳部でのテストでは 4 人全員が五十メートルで自己ベストを約 1 秒更新したそうです。　（＝（13b), 波線加筆）

(44) a. ??アンケートに応じてくれたのはみんなで百四十五人。

（＝（14a), 波線加筆）

b. ?関大水泳部でのテストでは 4 人みんなが自己ベストを更新した。

（＝（14b), 波線加筆）

(41）と（43）の差は，母集合に含まれる要素の全数が明示されているか否かと

いう点にある。前者では母集合に含まれる要素の全数は明示されていないのに対し，後者ではそれが明示されている（(43）波線部)。この後者の場合に「みんな」が（やや）不適格であることは，「みんな」は母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及する場合には用いられにくいということを示している[11]。

4.4.2.2　母集合の構成要素が具体的に想定されない場合

また，次の（45）のような文における「みんな」は「全部」には置き換えられず，「全員」に置き換えた場合にはやや文意が異なる（(46)）。

(45) a.　赤信号，みんなで渡れば怖くない。

b.　「おじさんは何してるの？」「おじさんもバスを待ってるんだ」「ふぅん」「お嬢ちゃん，みんなにカワイイって言われるでしょ？」「言われない」

（『すばる』2001 年 7 月号，下線は筆者）

(46) a.　赤信号，｛*全部／#全員｝で渡れば怖くない。

---

[11] ただし，母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及する場合に「みんな」を用いることが不可能というわけではない。例えば，BCCWJ から収集した「みんな」の用例（全 26363 例）には，「みんなで～人」「～人みんな」という例を 8 例確認することができる（人に対して用いられる助数詞には「人」の他に「名」もあるが，「みんなで～名」「～名みんな」という例は確認されない)。

(iii)　「伴天連様, 私には七人の子供がありまして, 主人を加えて皆で九人ですが, 一同殉教者になる覚悟でおります。〔筆者略〕」
（ルイス・フロイス著／松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史』, 下線は筆者）

(iv)　「あなたは四人みんなに会ったの？」
（村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』, 下線は筆者）

これに対し，「全部」の用例（全 9794 例）には「全部で～人」「～人全部」という例が 80 例（「全部で～名」「～名全部」を加えると 96 例)，「全員」の用例（全 5962 例）には「全員で～人」「～人全員」という例が 84 例（「～名全員」を加えると 98 例（「全員で～名」という例はなし)）確認される。この使用頻度の差を踏まえると，少なくとも「全部」「全員」に比して，「みんな」は母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及する際には用いられにくいと言える。なお，「みんな」の用例は，「中納言」（ver. 2.4.5）を用い，以下の条件で短単位検索を実施して収集した。

(v)　キー：語彙素「皆」

b.　お嬢ちゃん，{*全部／#全員} にカワイイって言われるでしょ？

「全部」「全員」と「みんな」が相互に置き換えられる前掲（41）（42）と（45）の差は，母集合に含まれる要素が具体的に想定されているか否という点にある。前者は母集合に含まれる要素が具体的に想定されているのに対し，後者は少なくとも具体的には想定されていないと考えられる。「全部」「全員」は前者の場合にのみ適格となることから，これらは母集合に含まれる要素が具体的に想定される場合にのみ用いられるという特徴を持つと言える（（46）では，母集合に含まれる要素が具体的に想定される場合にのみ「全員」を用いることが可能と考えられる）。一方，「みんな」はいずれの場合にも適格であることから，「みんな」は母集合に含まれる要素が具体的に想定されない場合にも用いられるという特徴を持つと言える。

4.4.2.3 「全部」「全員」と「みんな」の相違点

以上，4.4.2.1 節と 4.4.2.2 節から観察された「全部」「全員」と「みんな」の適格性の差を踏まえ，これらの相違点をまとめる。まず，「全部」「全員」については次のような現象が観察される点で「みんな」とは異なる。

(47) a.　「全部」「全員」は，母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及される場合にも用いられる。

b.　「全部」「全員」は，母集合に含まれる要素が具体的に想定されない場合には用いられない。

このことは，4.3.3 節で示した「全部」「全員」の次の特徴と関係している。

(48)　「全部」「全員」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合（単一個体としてのモノの場合は部分に分割した集合体）に含まれる複数の要素の数と等しいことを表す。　（＝（34），下線変更）

つまり,「全部」「全員」は母集合に含まれる要素の数に注目する表現であるため,その全数に明示的に言及する場合でも適格となる。一方, 母集合に含まれる要素が具体的に定まらなければ, 当然ながらその数も定まらないため,「全部」「全員」は用いられにくいのである。

次に,「みんな」については次のような現象が観察される点で「全部」「全員」とは異なる。

(49) a. 「みんな」は，母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及される場合には用いられにくい。

b. 「みんな」は，母集合に含まれる要素が具体的には想定されない場合にも用いられる。

このような現象が観察されることは,「みんな」が母集合に含まれる要素の数に注目する表現ではないことを示している。では,「みんな」は母集合のどのような点に注目する表現であるかということについて，さらなる現象を挙げて検討する。

次の例を見られたい。

(50) a. ぼくはスッとタイヤのかげから出ると，思いっきり，みんなのほうへボールをけっとばした。

（さとうまきこ『ぼくの・ミステリーなぼく』, 下線は筆者）

b. 陽子は，こんなに間近でサルを見るのははじめてだった。〔筆者略〕ボスが尻をおったてて，のっそりのっそりみんなのほうへ歩みよってきた。（吉本直志郎『きょうも朝から夏やすみ』, 下線は筆者）

この場合,「みんな」は「ボール」「ボス」の移動先を示している。このとき,「ボール」「ボス」の数は 1 つ（1 匹）であるため，その移動先も必然的に 1 つ（1 箇

所）であるが，移動先となる場所には複数の人がいるものと推察される。その複数の人（がいる地点）を「ボール」「ボス」の移動先として適格なものとするためには，個々の人（がいる地点）を問題にせず，個々の人をまとめて取り上げて 1 つの対象として扱うことが求められる。

この（50）のような場合にも「みんな」が用いられることを踏まえると，「みんな」は次のような意味を持つ表現であると考えられる。

（51）　「みんな」は，多数の人（場合によってはモノ）から成る集合体を表す。

つまり，「みんな」は母集合にどの程度の数の要素が含まれるのかということは問題にせず，母集合となる人（あるいはモノ）の集まり自体に注目する表現なのである。従って，母集合に含まれる要素の数に明示的に言及する場合には用いられにくく，一方でその要素が具体的に想定されていない場合であっても，不特定多数の人（あるいはモノ）の集まりを指して「みんな」を用いることができるのである。

なお，（50）のような場合，「全部」「全員」は用いられない。例えば，（50）の「みんな」を，複数の人を指示するに当たって特段の制約がない「全員」に置き換えた次の例の容認度は低い。

（52）a. ??ぼくは<u>全員</u>のほうへボールをけっとばした。
　　b. ??ボスが<u>全員</u>のほうへ歩みよってきた。

「全部」「全員」は母集合に含まれる要素の数に注目する，即ち母集合が人の集合の場合はそれに含まれる個々の人に注目するため，「ボール」「ボス」の移動先を 1 つに限定する場合にはそぐわないのである[12]。

[12] ただし，「ボール」「ボス」のような物体ではなく，発話のような抽象物の移動先（相手）については，「全部」「全員」によって表されることもある。例えば，次の例において，「全部」「全員」は発話の相手，言わば発話の移動先にいる複数の人を指し示してい

4.4.2.4 「みんな」が例外を許容する要因

「みんな」の意味を前掲（51）のように捉えることは，佐藤（2017）が指摘する例外の許容の問題に対して一定の説明を与えることができる点で有益である。前述の通り，佐藤（2017）は，次の文のように例外がない状況（「勤勉でない日本人はいない」という状況）が想定されにくい場合，「全部」「全員」が用いられにくいのに対して「みんな」は用いられ得るとし，「みんな」は例外を許容すると指摘している（4.2.2.3 節）。

（53）　日本人は｛みんな／*全員｝勤勉だ。　（＝（17b））

前掲（48）に示した通り，「全部」「全員」は問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる要素の数と等しいことを表す。例えば（53）において「全員」が用いられた場合，「勤勉」である人の数が母集合「日本人」に含まれる要素（全日本人）の数と等しいことを表す。言い換えれば，1 人でも「勤勉」でない日本人が存在する場合，この文は基本的に成立し得ない。佐藤（2017）は「常識的に考えて一億人を超える日本人が例外なく勤勉であるとは考えられない」（前掲（18））としており，そのために（53）では「全員」が不適格になるのである。

これに対し，（51）に示した通り，「みんな」は多数の人から成る集合体を表す。つまり，（53）において「みんな」が用いられた場合，その「みんな」は「日本人」として括られる集団自体を指し示しており，その集団が「勤勉」と特徴付け

る（「全部の方（ほう）」「全員の方（ほう）」という例は確認されない）。

（vi）　それがすむと，彼はその少年をはじめ他の奴隷たち全部に向かって言いました，〔筆者略〕。　（幸田露伴ほか『美食』，下線は筆者）

（vii）　わたしはまず全員に向かって話しかけ，同時にひとりひとりの反応を見きわめようとした。
（デイヴィッド・K. ハーフォード著／松本剛史訳『ヴェトナム戦場の殺人』，下線は筆者）

これは，発話のような抽象的なものは，物理的に移動先（相手）を 1 つに定めることが要求されないことによると考えられる。

られることが表される。従って，仮にその集団の中に「勤勉」でない人が含まれていたとしても，それは特段問題にされないのである。

4.4.3 「全部」と「全員」と「みんな」の相違点

以上，ここまで「みんな」について「全部」「全員」との比較を交えて考察した。4.3.3 節で述べた「全部」と「全員」の共通点と相違点も踏まえてこれらの表現の共通点と相違点をまとめると，次の表 3 のようになる。

表 3 「全部」「全員」「みんな」の共通点と相違点

	「みんな」	「全部」	「全員」
指示対象	人（モノ）	モノ（人）	人
単一個体に対する使用	モノのみ可 （ただし，述語で表される事態による）		不可
意味	多数の人（モノ）から成る集合体を表す	問題となる対象の数が，前提となる母集合（単一個体のモノの場合は部分から成る集合体）に含まれる複数の要素の数と等しいことを表す	

4.5 「すべて」

次に，「すべて」について分析する。前述の通り，「すべて」については単一個体に対しては用いられにくいこと（森田 1989）や，「全部」と置き換えられない場合があること（飛田・浅田 1994）などが指摘されている。以下ではこれらが関連していることを明らかにする。

4.5.1 「全部」との共通点

まず，指示対象については，「すべて」はモノも人も指示し得るが，基本的にはモノを指示する。森田（1989）は，「すべて」が人を指すには制約があるとし

ており，加えて飛田・浅田（1994）も次のような例を示して「すべて」が基本的にはモノを指示することを示唆している。

(54) a.　すべての意見を聞く。（存在する全部の意見）

（飛田・浅田 1994: 211，下線は筆者）

b.　みなの意見を聞く。（出席者全員の意見）

（飛田・浅田 1994: 211，下線は筆者）

この「すべて」の指示対象に関する特徴は「全部」と共通している。

また，次の（55）における「すべて」の適格性から，「すべて」は基本的には複数の対象を指示するものと考えられる点，（56）のように母集合に含まれる要素の全数に明示的に言及される場合にも用いられる点も，「全部」と共通している。

(55) a.　研究室には先輩達が提出した博士論文がすべてある。

b. ??研究室には私が提出した博士論文がすべてある。

(56) a.　調査は学校給食百四十三施設すべてで行い，市町村が学期ごとにまとめて報告する。　（『産経新聞』2002 年 12 月 22 日朝刊，下線は筆者）

b.　まずその原毛を選別することから始まり，下拵え，先寄せ，〔筆者略〕最後に仕上げとすべてで二十工程ある。

（瀬戸内寂聴『一筋の道』，下線は筆者）

従って，「すべて」は「全部」と同様に，問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる複数の要素の数と等しいことを表すと考えられる。

4.5.2 「全部」との相違点

一方，単一個体に対する使用可能性については，「すべて」は「全部」とは異なる。前述の通り，「全部」はモノを指示する場合に限り単一個体に対しても用

いられ得る。しかし，森田（1989）は次の（57）のような文は（58a）ではなく（58b）のような解釈になるとし，「すべて」は単一個体（「一つの全体（個）」）に対しては用いられないと指摘している（4.2.2.1 節）[13]。

(57)　　リンゴをすべて食べた。

(58) a.　?「1 個のリンゴを残さず食べた」という解釈

　　b.　「複数個の，あるいは数切れのリンゴを残さず食べた」という解釈

これは，「すべて」は「全部」と異なり，単一個体のモノを部分から成る集合体として捉えることがしにくい表現であることを示している[14]。

一方で，「すべて」は単一個体の人に対して用いられる場合がある。

(59) a.　あたしはあなたのすべてを知っているわ。　　（＝（11））

　　b.　?あたしはあなたの全部を知っているわ。

前述の通り，単一個体のモノの場合は，その一部分に対して成立するような事態が想定され得るため，「全部」を用いて当該の事態がそのモノの全部分にわたって成立することが表され得る。しかし，単一個体の人の場合は，その一部分に対して成立する事態を想定しにくいため，「全部」を用いて当該の事態がその人の全部分にわたって成立することを表すこともしにくい。「あなた」という単一個体の人に対して「すべて」が用いられている（59a）も，その「すべて」を「全

[13] BCCWJ から収集した「すべて」の用例の中には，次のように単一個体に対して用いられている例もないわけではない。

（viii）　侑はグラスの中身をすべて飲み干した。

（須坂蒼『薔薇の契約』，下線は筆者）

しかし，ここでは森田（1989）の指摘に則り，「すべて」は単一個体（「ひとつの全体（個）」）には用いられにくいものと考える。

[14]「すべて」がこのような特徴を持つ背景の分析については今後の課題とする。

部」に置き換えるとやや容認度が下がる（(59b)）[15]。

ただし，「すべて」が単一個体の人に対して用いられる場合，その対象を個体として取り上げているわけではないと考えられる。前述の通り，「全部」が単一個体のモノに対して用いられる場合は，その対象（次の例で言えば「リンゴ」）を個体として取り上げて部分に分割し，その各部分を指示する。

(60)　【リンゴ＝1 個】このリンゴを全部食べた。　（＝（27a））

これと同様に，(59a) において「すべて」が「あなた」を個体として取り上げているとすれば，(59a) は「あなた」の個々の身体部位に分割し，その各部位を指示することになるが，この文はそのようなことを意図しているとは考えにくい。このように，単一個体としての人に対して用いられる「すべて」が何を指示しているかという点については検討を要する。また，飛田・浅田（1994）が指摘する次のような場合における「すべて」と「全部」の適格性についても併せて検討することが求められる。

(61) a.　（本のタイトル）パソコンのすべて。　（＝（16a），波線加筆）
　　b. *パソコンの全部。　（＝（16b），波線加筆）

以上の観察から，「すべて」は「全部」とは異なり，次のような特徴を持つとまとめられる。

[15] (59b) については容認する話者も存在すると考えられる。しかし，BCCWJ から収集した用例では，「あなたのすべて」のように「の」を介して単一個体の人に対して「すべて」が用いられる例が 123 例確認されるのに対し，同じく「の」を介して単一個体の人に対して「全部」が用いられている例は 12 例に留まる。そのため，(少なくとも「すべて」に比して)「全部」は単一個体の人に対しては用いられにくいと言える。なお，「すべて」（あるいは「全部」）が単一個体の人に対して用いられるのは基本的に「の」を介する場合に限られるが，その背景については 4.5.4 節で述べる。

(62) a.　「すべて」は，単一個体のモノを部分に分割して捉えることがしにくい。
　　b.　「すべて」は，単一個体の人に対しても用いられ得るが，その人を個体として取り上げるわけではない。

以下では，まず（62b）に注目し，単一個体の人に対して用いられる「すべて」が何を指示するのか分析する。その分析結果を踏まえ，（62a）と（62b）の関係性について考察する。

4.5.3 「名詞＋のこと」に関する指摘を踏まえた考察

単一個体の人に対して用いられる「すべて」が何を指示するのか分析するに当たり，ここでは次の文に注目する。

(63)　　あたしはあなたのことをすべて知っているわ。

（63）は，（59a）と同様の文意を持つと考えられる。つまり，（59a）における「あなた」が表すことは，「あなたのこと」が表すことに相当すると言える。本節では，「あなたのこと」のような「名詞＋のこと」が表す意味内容について指摘する研究を参照し，単一個体の人に対して「すべて」が用いられる場合について分析する。

湯本（2015）は，特に「言葉を媒介する動詞である『発話・伝達動詞』」（湯本 2015）と「精神的活動を表す動詞である『思考・認識動詞』」（湯本 2015）が述語となる場合（一部を除く），目的語の位置に立つ名詞には「のこと」の付与が必須になると指摘している[16]。

(64) a.　花子が太郎｛のこと／*φ｝を話している。　（湯本 2015: 31）
　　b.　花子が太郎｛のこと／*φ｝を考えている。　（湯本 2015: 31）

[16]「名詞＋のこと」を考察対象とする研究には，湯本（2015）の他に寺村（1968），金（2014）などがある。

湯本（2015）は，このように「名詞句にコトがつくとき，コトは名詞句の意味をどのように変化させるのか」（湯本 2015: 17）ということについて考察しているが，その点について次のように指摘している。

（65）　コトは対象につくことにより，対象に関する事態を引き出し，対象を事態の集合体へと変換する（対象の事態化）。[17]

（湯本 2015: 50，下線は筆者）

例えば，次の（66a）は（66b）のようなことを表しているとされる。

（66）a.　太郎が花子のことを話している。　（湯本 2015: 48，下線は筆者）

b.　太郎が｛花子がかわいいこと／花子が留学すること／花子を殴ってしまったこと／花子に告白したこと／花子からチョコをもらったこと｝話している。

（湯本 2015: 48）

この湯本（2015）の指摘を踏まえると，次の（67）の波線部は「あなた」に関する（68）のような「事態」が引き出された「事態の集合体」であると言える。

[17]「事態」について，湯本（2015）は次のように規定する。

（ix）　本研究では「事態」を，述語をもって切り取ることのできる世界（可能世界・現実世界）の断片であるとする。「世界の断片」とは，例えば周りを見渡したときに，目にすることのできる車が走っていく様子や，空が晴れている様子，子どもが公園で遊んでいる様子などである場合もあれば，現在婚約中だ，猫は気ままだ，私の目は茶色い，などの状態や性質など，述語でもって切り取れるものである。また，「（本当なら）今頃王子様と結婚している」「（私にとって）彼は王子様だ」といった可能世界における断片でもありうる。　（湯本 2015: 44）

(67)　あたしはあなたのことをすべて知っているわ。　（＝（63a））

(68) a.　あなたが素敵なこと

b.　あなたが優秀なこと

c.　あなたが留学すること

つまり，前掲（59a）のように単一個体の人に対して用いられる「すべて」は，表面的にはその人を個体として取り上げているように見えても，意味的にはその人に関する様々な「事態」が引き出された「事態の集合体」として取り上げているのである。

以上，「名詞＋のこと」に関する先行研究の指摘を踏まえると，単一個体の人に対して用いられる「すべて」については次のようにまとめられる。

(69)　「すべて」は，単一個体の人に対して用いられる場合，その人に関する様々な「事態」が引き出された「事態の集合体」を母集合とし，そこに含まれる「事態」を指示する。

ただし，この（69）は，「すべて」が意味的に単一個体の人を「事態の集合体」に変換する働きを持つように読める点で適切ではない。仮に「すべて」が意味的に単一個体の人を「事態の集合体」に変換する働きを持つのであれば，次のような文においても，「すべて」は「あなた」に関する様々な「事態」を指示する（前掲（59a）と同様の文意になる）ことが予測されるが，この文はそもそも文としての容認度が低い。

(70)　??私はあなたをすべて知っているわ。

従って，「すべて」が意味的に単一個体の人を「事態の集合体」に変換する働きを持つわけではなく，その働きは（59a）のように「あなたのすべて」，つまり「N のすべて」となる場合に生じると言える。

4.5.4 「N の Q」に関する指摘を踏まえた考察

「すべて」が「N のすべて」という形をとることと単一個体の人が「事態の集合体」と解釈されることの関係について，本節では，「N の Q」（Q : 数量詞，以下同様）という構造の特徴を指摘する研究を参照して考察する。

4.5.4.1 西田（2004）と田中（2014）の指摘

日本語と英語における「全体・部分の関係」（以下，「部分関係」）を扱う田中（2014）は，日本語の「A の（うちの）B」のうち，「N の Q」は構文として「部分関係」を表すとし，これを「部分構造」（田中 2014）と呼んでいる。「部分構造」では，「第 1 名詞（句）が全体に相当し，第 2 名詞（句）が部分に相当する」（田中 2014: 72）とされる。例えば，次の（71a）では「第 2 名詞の‘2 人’は，第 1 名詞句の‘試験に合格した学生’の一部分を指」（田中 2014: 72）し，（71b）では「第 2 名詞の‘全員’は第 1 名詞句が表す集合に対する割合を表」（田中 2014: 72）している。

（71）a. ［試験に合格した］学生の（うちの）2 人　（田中 2014: 72）
　　b. ［試験に合格した］学生の（?*うちの）全員　（田中 2014: 72）

このとき，全体を表す名詞は「定の解釈をもたなければならない」（田中 2014: 79）という制約があるとされる。（71）で言えば，「学生」が「試験に合格した（者）」と限定されている必要があるということである[18]。

[18] ただし，全体を表す名詞が「比率的数量詞」である場合はその限りでない。田中（2014）は，「比率的数量詞には前提性がある」（田中 2014: 73）ため，全体を限定する表現が明示されずとも，「定の解釈」を受けると指摘している。なお，この「比率的数量詞」の性質は，（71b）において「うち（の）」が入ると不自然になることとも関係している。（71a）の場合は「部分構造」の第 2 名詞（句）に「2 人」という「前提性」を持たない数量詞（「基数的数量詞」）が用いられているため，「うち」という「範囲を明確にする表現」（田中 2014: 73）を用いて「母集合を明確にする」（田中 2014: 73）ことがあり得

次に，西田（2004）は「N の Q」について，Q が「集合全体に占める割合を表す数量詞」（西田 2004: 80），即ち「比率的数量詞」（4.2.1 節参照）である場合は「Q の N」に置き換え可能であると指摘し，次のような例を挙げている（(72）の「30 人」は「基数的数量詞」（4.2.1 節参照），（73）の「大半」は「比率的数量詞」）。

(72) a.　反戦集会には 30 人の児童が参加した。　（西田 2004: 80，下線は筆者）
　　b. *反戦集会には児童の 30 人が参加した。[19]　（西田 2004: 80，下線は筆者）
(73) a.　反戦集会には大半の市民が参加した。　（西田 2004: 80，下線は筆者）
　　b.　反戦集会には市民の大半が参加した。　（西田 2004: 80，下線は筆者）

このうち，田中（2014）の言う「部分構造」（「N の Q」）として成立するのは「市民の大半」（(73b）の下線部）のみであるが，それと「大半の市民」（(73a）の下線部）の意味が重なる理由について，田中（2014）は次のように述べている。

(74)　‘市民の大半’のような‘N ノ Q’形式（＝部分構造）は第 1 名詞が限定詞を含まなくても定の読みになり，適切に部分関係の解釈が得られる。また，‘大半の市民’のような‘Q ノ N’形式は，比率的数量詞の語彙特性によって語彙的部分解釈を得る[原注 16]。　（田中 2014: 79）

つまり，「N の Q」は構文的に「部分関係」を成しており，「Q の N」は語彙的に「部分関係」の解釈（以下，「部分解釈」（田中 2014））を得ているということである。

また，西田（2004）は「N の Q」が「Q の N」に置き換え可能な場合，N が「均質な集合を指示する名詞」（西田 2004: 80）である場合とそうでない場合で「解

るが，「前提性」を持つ「比率的数量詞」が用いられた場合，「‘ウチ’という『範囲を明確にする表現』を伴わなくてもその範囲が定まっている」（田中 2014: 73）ため，「意味的な重複性が感じられ」（田中 2014: 73）るとされる。

[19] 西田（2004）は，（72b）は「『団地の児童の（うちの）30 人』のように集合全体の部分に特定数を与え」（西田 2004: 80）れば容認度が上がると指摘している。

釈に違いが出ることがある」（西田 2004: 81）と指摘している。西田（2004）は前者の例として「絵画」を，後者の例として「絵」を挙げ[20]，次のような例文を示している。

(75) a.　美術館の火災では大部分の絵画が焼けてしまった。

（西田 2004: 81，下線は筆者）

b.　美術館の火災では絵画の大部分が焼けてしまった。

（西田 2004: 81，下線は筆者）

(76) a.　美術館の火災では大部分の絵が焼けてしまった。

（西田 2004: 81，下線は筆者）

b.　美術館の火災では絵の大部分が焼けてしまった。

（西田 2004: 81，下線は筆者）

西田（2004）によれば，（75）と（76a）は次の（77a）の読みになるのに対し，（76b）は（77a）に加えて（77b）の読みがあり，この（77b）が「優先される読みである」（西田 2004: 81）とされる。

(77) a.　絵の集合の中で焼けた割合が問題になる読み（量のレベル）

（西田 2004: 81，下線は筆者）

b.　1 枚の絵の中で焼けた割合が問題になる読み（個体のレベル）

（西田 2004: 81，下線は筆者）

田中（2014）は，西田（2004）の言う（77a）と（77b）の読みがそれぞれ「M 部

[20] 西田（2004）は，「均質な集合を指示する名詞」のひとつに，「絵画」「岩石」「河川」「書籍」などの「類義の字を 2 つ重ねたもの」（西田 2004: 77）があるとし，このような漢字 2 字の名詞を「種類名詞」と呼んでいる。一方，「絵」のような漢字 1 字の名詞は基本的には集合を指示するものではないということを示唆している。

分解釈」（田中 2014）と「I 部分解釈」（田中 2014）に当たるとしている[21]。「M 部分解釈」「I 部分解釈」とは，それぞれ次のような文における「部分解釈」を指す。

(78) a.　それらの本のうちの 2 冊［グループ・メンバーの関係］（田中 2014: 4）
　　b.　その本の 2 ページ　　［単一個体とその中身］　　（田中 2014: 4）

（78a）は，複数の個体から成る集合（「それらの本」）を母集合として，そのうちの一部の個体（「2 冊」）を部分集合とする「部分関係」であるのに対し，（78b）は，ある単一個体（「その本」）とその「中身」（「2 ページ」）という「部分関係」であるとされる。田中（2014）は前者の関係を成す「部分構造」を「M 部分構造」，後者の関係を成す「部分構造」を「I 部分構造」と呼ぶ。ここから，田中（2014）は西田（2004）が挙げる（75）（76）の「部分構造」と「部分関係」の種類を次の表 4 のようにまとめている。

表 4　種類名詞・1 字名詞を含む‘A ノ B’形式の解釈（田中 2014: 80）

N の種類	例	部分構造の種類	部分関係の種類
種類名詞	絵画の大部分	M 部分構造	M 部分解釈（比率）
	大部分の絵画		語彙的部分解釈
1 字名詞	絵の大部分	I 部分構造	I 部分解釈
		M 部分構造	M 部分解釈（比率）
	大部分の絵		語彙的部分解釈

なお，前述の通り「大部分の絵画」「大部分の絵」（「Q の N」）は「部分構造」を成さず，「語彙的部分解釈」を得るが（(74)），その場合の「部分関係」は「M 部

[21] 田中（2014）によれば，M は‘member’の頭文字を，I は‘inalienable part’の頭文字を取ったものである。

分関係」になるとされる（田中 2014: 82））。

4.5.4.2 「N のすべて」について

以上の西田（2004）と田中（2014）の指摘を踏まえ，まずは人を N とする「N のすべて」について考察する。

(79)　あなたのすべて［部分構造：I 部分関係］

(79）は「N の Q」という形式であり，「部分構造」を成している。つまり，「あなた」を全体とし，その何らかの部分を表すことが要求される。また，「あなた」は単一個体であるため，その「部分関係」は「I 部分関係」ということになる。つまり，単一個体とその「中身」という関係を構成することになるが，前述の通り，「すべて」は単一個体を部分に分割することがしにくい。そのため，(79）では「あなた」から「あなたに関わる事態」が引き出され，それを「あなた」の「中身」として「部分関係」を成立させると考えられる。

モノを N とする「N の Q」についても同様の分析をすることが可能である。これについては「Q の N」という形式と併せて考察する。

(80) a.　全部のパソコン　［語彙的部分解釈：M 部分関係］
　　b.　すべてのパソコン［語彙的部分解釈：M 部分関係］
(81) a.　パソコンの全部　［部分構造　　：M 部分関係／I 部分関係］
　　b.　パソコンのすべて［部分構造　　：M 部分関係／I 部分関係］

まず，(80）は「Q の N」という形式であり，「部分構造」ではない。しかし，「全部」「すべて」は「比率的数量詞」であるため，これらは「定の読み」になり，語彙的に「部分解釈」が得られる。この場合，その「部分解釈」は N の性質によらず「M 部分解釈」になることから，これらは複数のパソコンを母集合とした「部分関係」になる。

次に，（81）は「N の Q」という形式であり，「部分構造」を成している。従って，N が「均質な集合を指示する名詞」か否かで「解釈に違いが出る」ことになるが，次の（82）には（83a）と（83b）の 2 通りの読みがあり得ることから，「パソコン」は「均質な集合を指示する名詞」ではない（西田（2004）が挙げる例の「絵」に相当する）と考えられる。

（82）　地震でパソコンの一部が破損してしまった。

（83）a.　研究室にある 5 台のパソコンのうちの 2 台［M 部分構造］

b.　1 台のパソコンのディスプレイの 1 箇所　［I 部分構造］

つまり，（81）は「絵の大部分」と同様に，「M 部分構造」と「I 部分構造」の 2 通りの「部分構造」を成す場合があるということになる。「M 部分構造」を成す場合，（81）は複数のパソコンを母集合とした「部分関係」になるが，その関係においては（81a）と（81b）が表す内容は重なり，「全部」「すべて」共にその母集合に含まれる個々のパソコンを指示するものと考えられる。

（84）a.　【M 部分構造】パソコンの｛全部／すべて｝

b.　パソコン $_1$，パソコン $_2$，パソコン $_3$，…

一方，「I 部分構造」を成す場合，（81）は 1 台のパソコン（単一個体）とその「中身」という「部分関係」になるが，「全部」と「すべて」で単一個体に対する使用可能性に差がある（4.5.2 節）ことを踏まえると，この関係においては（81a）と（81b）が表す内容は異なると考えられる。前述の通り，「全部」は単一個体に対しても用いられ，あるモノを部分に分割して捉えることができる。従って，「I 部分構造」としての（81a）の「全部」は，単一個体のパソコンについて，それを構成する部品に分割して捉え，ある事態がその全部品にわたって成立することを表し得る。

(85) a. 【I 部分構造】パソコンの全部

b. ディスプレイ，キーボード，…

これに対し，「すべて」は単一個体のモノを部分に分割して捉えること，言い換えれば，モノをその構成要素に当たるモノの集合と捉えることがしにくいため，「全部」のようにパソコンを（85b）のようには捉えられない。しかし，この「すべて」が（81b）のような「部分構造」に埋め込まれた場合，構文として「部分関係」を成すことになる（構文として「部分解釈」が要求される）。その結果，「I 部分構造」としての（81b）においては，パソコンというモノから「パソコンに関わる事態」を引き出し，それを「あなた」の「中身」として「部分関係」を成立させると考えられる。

(86) a. 【I 部分構造】パソコンのすべて

b. パソコンが様々な資料作成を可能にすること，パソコンが進化し続けていること，パソコンが精密機器であること，…

以上，「すべて」が「N のすべて」という形をとることと単一個体の人やモノが「事態の集合体」と解釈されることの関係について，「N の Q」という構造の特徴から考察した。この考察を踏まえると，単一個体の人やモノに対して用いられる「すべて」の振る舞いに関する前掲（69）は，次のように修正される。

(87) 「すべて」は，「I 部分構造」に埋め込まれた場合，単一個体からそれに関する様々な「事態」を引き出し（「事態の集合体」と捉え），その「事態」を指示する。

4.6 本章のまとめ

本章では，「全部」「全員」「すべて」は問題となる対象の数が，前提となる母

集合に含まれる複数の要素の数と等しいことを表すのに対し，「みんな」は多数の人（あるいはモノ）から成る集合体を表すという相違があることを主張した。特に，「みんな」は集団（あるいはモノの集まり）自体を指示するものであり，そこに含まれる個々の人（あるいは個々のモノ）に注目するものではないため，例外が存在している場合でも用いられ得ることを明らかにした。

また，「全部」と「すべて」は指示し得る対象や基本的な意味という点で共通するが，前者は単一個体を部分から成る集合と捉えることができるのに対し，後者はこうした捉え方がしにくい点で異なる。ただし，「すべて」は単一個体に対して用いられないわけではなく，「I 部分構造」を成す構文に埋め込まれた場合，その構文の要求に応える形で単一個体からそれに関わる「事態」を引き出す（単一個体を「事態の集合体」と捉える）ことができるということを主張した。

第 5 章

「頻度」と広義全称表現

5.1　はじめに

本章では，「全部」「全員」などと同様に「全称量化」の解釈を受けるとされる「常に」「いつも」を取り上げ，「頻度」と広義全称表現について議論する。議論の都合上，本章では「いつも」「常に」の順で取り上げる。

一般に，現代日本語の副詞「いつも」と「常に」は類義表現とされている。それは，一般向けの国語辞典において，「いつも」については「常に」を，「常に」については「いつも」を用いた説明が施される場合があることからも見て取れる。例えば，次の（1）（2）はそれぞれ『明鏡国語辞典第二版』における「いつも」と「常に」の語釈である。

(1)　時と場合にかかわらず（または，ある条件の下で），常に物事が成立するさま。いかなる時も。どういう場合も。

（『明鏡国語辞典第二版』「いつも」，下線は筆者）

(2)　いつも。たえず。　（『明鏡国語辞典第二版』「常に」，下線は筆者）

先行研究でも，「いつも」と「常に」が共通する特徴を持つことを論拠として，両者が共にひとつの意味を表すと指摘するものがある（5.2.1 節にて詳述）。しかし，その共通する特徴は両者の振る舞いを適切に捉えたものではなく，その点で両者の意味には検討の余地がある（5.2.1 節にて詳述）。

一方で，「いつも」と「常に」が異なる特徴を持つことを指摘する研究や，両者の意味的相違点を明示的に述べる研究もある（5.2.2 節と 5.2.3 節にて詳述）。

しかし，前者の研究は現象の指摘に留まり，後者の研究は両者の振る舞いを十分に説明できるだけの意味を示せているとは言えない（5.2.2 節と 5.2.3 節にて詳述）。これらの問題に対し，本章では，「いつも」と「常に」が次のような意味を持つこと（特に下線部）を主張し，先行研究で指摘されている現象がいずれもこの意味から説明可能であることを明らかにする。

(3)　「いつも」は，生起時や生起回数を問わず，話し手による複数回の認識において事態が反復的に確認されることを表す。

(4)　「常に」は，ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても，当該事態に変化がないことを表す。

5.2　先行研究の指摘と問題の所在

議論に先立ち，まずは「いつも」と「常に」の共通点と相違点に関する先行研究の指摘を概観し，問題の所在を明らかにする。以下，両者の共通点を指摘する研究として仁田（2002）を，相違点を指摘する研究として森田（1989），飛田・浅田（1994），佐藤（2017）を取り上げる。

5.2.1 「いつも」と「常に」の共通点に関する指摘とその問題点

仁田（2002）は，「いつも」と「常に」を「頻度の副詞」のひとつに位置付けるが，その中でも特に両者について次のように指摘している[1]。

[1] 仁田（2002）は，「頻度の副詞」を「頻度性の高さ」（仁田 2002: 273）から①「いつも」「常に」，②「高頻度を表す副詞」，③「中頻度を表す副詞」，④「低頻度を表す副詞」に大別する。このうち②③④に属する副詞は次の文における下線部のようなものであり，いずれも「一定期間における事態の回数の多寡」（仁田 2002: 267），あるいは「間隔の時間的隔たりの短さ・長さを表している」（仁田 2002: 267）とされる（(i) の「よく」は②に，(ii) の「しばしば」は③に，(iii) の「時たま」は④に属する）。

(i)　石上は職業柄，よく本を読む。　（斎藤栄『江の島悲歌』, 仁田 2002: 268）

(ii)　折口信夫は，民俗資料採集のためしばしば山間離島を旅した。
（大岡信『折々の歌』, 仁田 2002: 269）

(5)　「イツモ」や「常ニ」は，事態が継続していることを表しているわけではない。問題になる間隔・インターバルのどれを取ってみても，事態が存在していることを表しているのである。　（仁田 2002: 265）

例えば次の場合，「『週末』という生起間隔を作り出す語句が出現しており，その生起間隔のどれを取ってみても，事態が生じ存在していることを表している」（仁田 2002: 265）とされる。

(6)　ある別荘地の朝。林のなかの小道を，エヌ氏はひとりで散歩していた。彼は大きな会社の経営者だが，週末はいつも，この池でくつろぐことにしているのだ。

（星新一『ボッコちゃん』, 仁田 2002: 265, 傍点を波線に改変）

(5) のうち，「事態が継続していることを表しているわけではない」という記述は，「事態存続の時間量」（仁田 2002）を表す「ずっと」との相違点を踏まえたものである。例えば，次の（7a）と（7b）は「ともに，ある時間幅を事態が継続して―切れ目なく―占めているように見える」（仁田 2002: 264）が，（8）の各例の容認度の差から，「いつも」と「常に」は「ずっと」と同じ意味を持つものではないと指摘している。

(7) a.　「そういう風に生きたいといつも考えています。いっぱいいろんな事があっても，取り込み方によって，どんどん幸せになれるから」

（『アエラ』1993 年 5 月 25 日, 仁田 2002: 264）

(iii)　千登世は時たまだしぬけに訊いた。（嘉村磯多『崖の下』, 仁田 2002: 271）これに対し，①の「いつも」と「常に」は「間隔の時間的隔たりには関わらない」（仁田 2002: 267）とし，両者は他の「頻度の副詞」とは「タイプの異なった」（仁田 2002: 267）ものと位置付けられている。

b.　そういう風に生きたいとずっと考えています。　（仁田 2002: 264）

（8）a.　さきほどからそういう風に生きたいとずっと考えています。

（仁田 2002: 265, 実線の一部を波線に改変）

b. ??さきほどからそういう風に生きたいといつも考えています。

（仁田 2002: 265, 実線の一部を波線に改変）

c.　少年の頃からそういう風に生きたいといつも考えています。

（仁田 2002: 265, 実線を波線に改変, 実線は筆者）

ここから，仁田（2002）は「いつも」と「常に」には次のような制約（以下,「始まりの時点」の制約）があると述べている。

（9）　「イツモ」が存在しながら適格であるためには,〔筆者略〕間隔を置きながら―事態が生じていない時間を含みながら―事態が複数回生じ存在しうるほど，始まりの時点が離れていなければならない。[2]

（仁田 2002: 265, 下線は筆者）

しかし，仁田（2002）の指摘のうち，特に「始まりの時点」の制約に関する指摘には問題がある。確かに，前掲（8ab）の「さきほどから（発話時まで)」という時間幅と前掲（8c）の「少年の頃から（発話時まで)」という時間幅を比較すると後者の方が長いため,「(そういう風に生きたいと）考える」という事態が複数回生起する可能性は後者の方が高いように思われる。例えば，次のように「事態生起の回数を多い回数として捉え」（仁田 2002: 278）る「何度も」を用いた場合，（10a）の容認度は（10b）に比してやや低い[3]。

[2] （9）では「いつも」についてのみ言及されているが，仁田（2002）は一貫して「いつも」と「常に」を区別していないため，この指摘は「いつも」と「常に」の相違を示すものではないと推察される。

[3] （10a）の例を問題なく容認する話者も存在すると考えられる。しかし，その場合，（8b）は「さきほどから（発話時まで)」が「(そういう風に生きたいと）考える」という事態が複数回生起し得る時間幅を持っているにもかかわらず,「いつも」が不適格になって

(10) a. ?さきほどからそういう風に生きたいと何度も考えています。
b. 少年の頃からそういう風に生きたいと何度も考えています。

しかし，「事態が複数回生じ存在しうるほど」の時間幅を設けても「いつも」が不適格になる場合がある。例えば，次の（11）が問題なく容認されるように，「昨日から（発話時まで)」という時間幅において「電話を掛ける」という事態が複数回生起することは十分に想定され得るが，「いつも」と「常に」を含む（12）の容認度は低い。

(11) 昨日から何度も電話を掛けている（のに，繋がらない)。
(12) a. ??昨日からいつも電話を掛けている（のに，繋がらない)。
b. ??昨日から常に電話を掛けている（のに，繋がらない)。

仁田（2002）は，「いつも」と「常に」が前掲（5）のような意味を持つということについて，この「始まりの時点」の制約を論拠としている。しかし，「始まりの時点」の制約が両者の振る舞いを適切に捉えていないため，(5）には検討の余地がある。

5.2.2 「いつも」の意味に関する指摘とその問題点

一方，森田（1989）は「いつも」と「常に」を異なるものとして扱っているが，そのうち「いつも」については次のように述べている。

(13) a. 「いつも」は本来，話し手が意識する任意の場合に，対象が例外なく同じ状況であることを指し，それが「いつでも……だ」の気持ちとなる。
（森田 1989: 144）

いるということになる。これは仁田（2002）が主張する「いつも」の成立要件に検討の余地があることを示すものであり，結果的に本章の主張に合致する。

b. 実際は常によそ見をしているわけではなくても，たまたま話し手が気をつけるたびごとによそ見をしていれば，「お前はいつもよそ見をしている」となる。（森田 1989: 145）

また，佐藤（2017）は次の（14）のように述べ，（15）の例を挙げている。

（14） 「いつも」に関しては，「複数の事態」とも言うべき特徴があるようである。すなわち，複数の事態に基づいて述べている場合に自然である。（佐藤 2017: 5）

（15）a. 現役時代，ペレには｛いつも／常に｝屈強なディフェンダーがついていた。（佐藤 2017: 5，実線は筆者）

b. その試合中，ペレには｛?いつも／常に｝屈強なディフェンダーがついていた。（佐藤 2017: 5，実線は筆者）

特に（15a）について，「ある選手の現役時代に出場した数多くの試合（すなわち複数の事態）に基づいて述べて」（佐藤 2017: 5-6）いるとされていることから，佐藤（2017）が「複数」と捉えているのは，（15a）で言えば「現役時代（に出場した試合）」（波線部）であると言える。つまり，佐藤（2017）の指摘は次のように言い換えることができる。

（16） 「いつも」は，ある事態が複数の時点や期間において生じる場合に用いられる。[4]

森田（1989）による前掲（13）の指摘のうち，「話し手が意識する任意の場合」

[4] 佐藤（2017）は（15b）について，「一つの試合における攻撃と守備のせめぎ合いの場面の一つ一つを独立した事態と考えれば，『いつも』が自然に使われる可能性もあるだろう」（佐藤 2017: 6）と述べている。これは，「複数」の「攻撃と守備のせめぎ合いの場面」が問題にされていることに起因すると考えられる。

は，仁田（2002）の言う「問題になる間隔・インターバル」に相当する。また，その場合に「対象が例外なく同じ状況であることを指」すという点は，仁田（2002）が「どれを取ってみても，事態が存在している」という含意があるという指摘と一致している。一方，佐藤（2017）が挙げる前掲（15a）の例の「現役時代（に出場した試合）」も，仁田（2002）の言う「問題になる間隔・インターバル」に相当する。佐藤（2017）は「いつも」が適格になる場合はこれが「複数」である必要があると述べるが，仁田（2002）の「問題になる間隔・インターバルのどれを取ってみても」という記述も，「問題になる間隔・インターバル」が複数必要であることを暗示しているように読める。つまり，森田（1989）と佐藤（2017）による「いつも」に関する指摘は，仁田（2002）の指摘と概ね共通しており，「いつも」の意味や特徴をより具体的に，あるいは明示的に述べたものとして位置付けられる。これらの指摘に則って先行研究が指摘している「いつも」の意味をまとめると，次のようになる。

(17)　「いつも」は，話し手が複数回意識する任意の場合に，対象が例外なく同じ状況であることを表す。

しかし，5.2.1 節で指摘した「始まりの時点」の制約の問題については依然として説明がつかない。また，(17) は話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起（例外）が確認されなければ「いつも X」が成立するということを示す。しかし，佐藤（2017）は次のように述べている。

(18) a.　前の月に週二回のペースで学校に遅刻した高校生の娘がいたと仮定しよう。(1)〔筆者注：ここでの（18b)〕はそのような娘に対する母親の発話としてごく自然なものである。　（佐藤 2017: 3，下線は筆者）

b.　あなた，いつも学校に遅刻してどうするの。

（佐藤 2017: 3，傍点を下線に改変）

（18）は「いつも」が次のように振る舞うことを示すが，これは（17）が示す「いつも」の振る舞いとは一致しない。

（19）　「いつも X」は，話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起（例外）が確認されても成立する。

以上の点に鑑みれば，（17）は「いつも」の意味に関する記述として不十分である。

5.2.3 「常に」の意味に関する指摘とその問題点

一方，森田（1989）と飛田・浅田（1994）には，「常に」の意味について次のような類似する記述が見られる。

（20）　「常に」は時間の流れに隙間がなく，継続していく状態である。
（森田 1989: 147）

（21）　一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ点にポイントがあり，恒常性の暗示がある。（飛田・浅田 1994: 304）

ただし，飛田・浅田（1994）については「恒常性の暗示がある」と述べている点で特徴的である。この点に関し，飛田・浅田（1994）は次のような例を示している[5]。

（22）a.　二等辺三角形の両底角は<u>つねに</u>等しい。
（飛田・浅田 1994: 303，下線は筆者）

[5] 次のように，佐藤（2017）にも飛田・浅田（1994）と類似する指摘が見られる。
（iv）　「常に」の場合は，〔筆者略〕事態の経験とは切り離された不変の真理を述べる場合にも自然に使われる。（佐藤 2017: 6）
（v）　三角形の内角の和は｛??<u>いつも</u>／<u>常に</u>｝180 度だ。
（佐藤 2017: 6，下線は筆者）

b. *二等辺三角形の両底角はいつも等しい。

（飛田・浅田 1994: 304，一部略[6]，下線は筆者）

以上の森田（1989）と飛田・浅田（1994）の指摘を重ねると，「常に」の意味は概ね次のようにまとめられる。

(23)　時間を空けずに同じ状態を継続的に保つ様子を表し，恒常性を暗示する。

（23）は，「常に」に「継続」あるいは「保つ」という含意があることを示す。これに対し，仁田（2002）は「常に」について「事態が継続していることを表しているわけではない」（前掲（5））と述べているが，前述の通り，その論拠とされる「始まりの時点」の制約に検討の余地があるため，一概に（23）を否定することもできない。しかし，「常に」が「始まりの時点」について何らかの制約がある（「ずっと」との相違がある）のは確かであり，（23）ではその相違が十分に捉えられない。また，「常に」が暗示するとされる「恒常性」についてはより精緻な説明を施す必要がある。飛田・浅田（1994）は，「恒常性」を「一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ」という意味で用いていると推察される（(21)）。確かに（22a）はそのような意味を表し得る環境にあると言えるが，その点で共通していると考えられる次の文では，「常に」は不適格になる。

(24)　??クジラは常に哺乳類だ。

---

[6]（22b）は，飛田・浅田（1994）では次のように提示されている。

（vi）　*二等辺三角形の両底角はいつも（たえず）等しい。

（飛田・浅田 1994: 304，下線は筆者）

これは，「常に」と「絶えず」の間にも「恒常性」という点での相違が認められることを示すものであるが，「絶えず」を含めた議論は今後の課題とし，ここでは立ち入らない。なお，飛田・浅田（1994）は「使えない用例」（飛田・浅田 1994: xiii）に「×」の記号を付しているが，ここでは「×」を便宜的に「*」に改めている。

以上の点に鑑みれば，（23）は「常に」の意味に関する記述として不十分である。

5.2.4　問題点の整理

以上，「いつも」と「常に」の意味に関する先行研究の指摘を概観し，併せてその問題点を示してきたが，ここで改めて整理しておく。

まず，「いつも」の意味については，仁田（2002）が前掲（5）のように指摘しており，それは森田（1989）と佐藤（2017）の指摘を重ねることで導かれる前掲（17）においてより具体的，あるいは明示的になっている。しかし，仁田（2002）が指摘する「始まりの時点」の制約が十分に明らかにされておらず，その点で「いつも」の意味には検討の余地がある。また，佐藤（2017）が指摘するように，「いつも」は「非該当例」を許容し得るが，その要因は明らかにされていない。

次に，「常に」の意味については，特に「継続」を表すか否かという点で仁田（2002）による（5）の指摘と森田（1989）と飛田・浅田（1994）の指摘から導かれる前掲（23）に相違が見られる。このうち仁田（2002）は，「始まりの時点」の制約を以って「常に」が「ずっと」とは異なることを示し，「常に」は「継続」を表すものではないと述べている。しかし，前述の通り，その「始まりの時点」の制約が十分に明らかにされていないことに鑑みれば，仁田（2002）による（5）の指摘には検討の余地がある。一方で，森田（1989）と飛田・浅田（1994）は「常に」が「継続」を表すとするが，不明瞭ながらも「始まりの時点」の制約がある（「ずっと」との相違がある）以上，「常に」の意味を（23）のように記述するだけでは十分でない。また，飛田・浅田（1994）は「常に」が「恒常性を暗示する」と述べるが，その説明も現象を適切に捉えているとは言い切れない。

以上より，「いつも」と「常に」の意味を捉えるためには，主に次の 4 点を検討することが求められると言える。

(25) a.　「始まりの時点」の制約

b.　「いつも」が例外を許容する要因

c. 「常に」と「ずっと」の相違

d. 「常に」が表すとされる「恒常性」

次節以降では，これらの点を検討することを通じ，「いつも」と「常に」の意味を明らかにする。

5.3 「いつも」の意味について

5.3.1 「始まりの時点」の制約の再検討

5.3.1.1 仁田（2002）の示唆

まず，仁田（2002）が指摘する「始まりの時点」の制約について改めて検討する。前述の通り，仁田（2002）は次の（26）と（27a）における「いつも」の適格性の差を通じ，「いつも」には「事態が複数回生じ存在しうるほど，始まりの時点が離れていなければならない」（前掲（9））という成立要件があることを指摘しているが，5.2.1 節では（27b）の「いつも」が不適格であることを示し，仁田（2002）の指摘に問題があることを明らかにした。

(26)　少年の頃からそういう風に生きたいといつも考えています。（＝（8c））

(27) a. ??さきほどからそういう風に生きたいといつも考えています。（＝（8b））

b. ??昨日からいつも電話を掛けている（のに，繋がらない）。　（＝（12a））

一方で，「いつも」が不適格である（27）の「さきほどから」と「昨日から」は，少なくとも「いつも」が適格である（26）の「少年の頃から」に比して「始まりの時点」が発話時に近いことは確かである。このことから，仁田（2002）が指摘する「いつも」の成立要件のうち，「始まりの時点が（発話時から）離れていなければならない」という点については妥当であると考えられる。従って，「いつも」には次のような特徴があると言える。

(28)　「いつも」は，「始まりの時点」が発話時に近い場合は用いられにくい。

以下では，「いつも」がこうした特徴を持つことを踏まえて「いつも」の意味について考察する。それに当たり，これと同様の特徴を持つことが指摘される「ことがある」に関する先行研究の指摘を参照する。

5.3.1.2 「ことがある」と「時間詞」の共起制約

工藤（1989），池田（1996），渡辺（2009）などでは，経験を表す「ことがある」について，発話時から遠い時点や期間を示す表現とは共起可能であるのに対し，発話時に近い時点や期間を示す表現とは共起しにくいことが指摘されている。例えば，池田（1996）は次のような例を挙げる。

(29)　きみはたしか｛ずっと前に／*先週｝流感にかかったことがあるな

（池田 1996: 12，下線は筆者）

この現象が示すことについて，先行研究ではいくつかの指摘がなされているが，その中で，渡辺（2009）は次のように指摘している。

(30)　「X は V したことがある」構文は，「X が V する」というイベントの発生がゼロではない，即ち「X が V する」という出来事が今までに必ず発生しているということを述べる構文なのである。〔筆者略〕そしてこの構文は，そのイベントがいつ発生したか，すなわちそのイベントが時間軸上のどの位置（時点）に置かれるかということは問題にしない構文なのである。　（渡辺 2009: 86-87，下線は筆者）

渡辺（2009）によれば，「時点という概念は，唯一，イベントを特定化できるものである」（渡辺 2009: 87）が，「『X が V する』というイベントの発生がゼロではないことを表すこの構文〔筆者注：「X は V したことがある」構文〕に，イベ

ントを特定化する機能をもつ時間詞が入ると，構文が表す意味機能（どの時点で起きたイベントの発生がゼロではないということ）と時間詞が表す意味機能（どの時点で起きたイベントかを特定し，一つに絞ること）が相成れなくなり，不自然さを招く」（渡辺 2009: 87）とされる[7]。特に発話時に近い時点や期間を示す「時間詞」（以下，「近過去時間詞」（渡辺 2009））について，次のように述べている。

（31）　近過去を表す時間詞は，それが表す時間幅が短いものが多く，厳密な時点表現と解釈されやすくなってしまう。そのため，近過去時間詞を用いると，時点表現でイベントを特定化することになってしまい，許容度が低くなるのである。　（渡辺 2009: 90，下線は筆者）

一方で，他の先行研究でも指摘されているように，「ことがある」は発話時から遠い時点や期間を示す「時間詞」（以下，「遠過去時間詞」（渡辺 2009））とは共起可能であるとする。該当する用例としては次のようものが挙げられている。

（32）a.　以前，横浜 FC 以外のチームの試合で当選したことがあるので，この手の抽選はある程度期待します。

（朝日新聞デジタル[8]，渡辺 2009: 89，実線は筆者）

b.　私もかつて，ニチイの西端社長にあることを尋ねられ，「知りません」というひと言がいえず知ったかぶりをし，あとで嘘がばれ，それこそ本当に恥ずかしい思いをしたことがある。

（甲斐良一『心の危機管理術』，渡辺 2009: 89，実線は筆者）

（33）a.　ぼくは高校生の時に，有名作家がやっているような「実存主義的」短篇小説をいくつか書いたことがある。

（朝日新聞デジタル，渡辺 2009: 89，実線は筆者）

---

[7] 渡辺（2009）は，「『V したことがある』における V（イベント）が発生した時間を表す副詞的要素」（渡辺 2009: 94（注 4））を一括して「時間詞」と呼称している。

[8] http://www.asahi.com

b. こういった聞いたことのない外国語の音声の発音については子供のころに聞いたことがあるかどうかよりは…

（朝日新聞デジタル，渡辺 2009: 89，実線は筆者）

「ことがある」が「遠過去時間詞」と共起可能である要因について，渡辺（2009）は次のように指摘する。

（34） 時間幅が広ければ，それだけ時点としての厳密性が薄れ，イベントを確実に特定して捉えることにはなりにくいのである。

（渡辺 2009: 89，下線は筆者）

例えば，（32）の「以前」「かつて」などは「過去をすべて含む表現であり，過去の具体的時点に言及するものではな」（渡辺 2009: 89）く，また（33）の「高校生の時」「子供のころ」などは「それが表す期間がかなり時間幅を有し，面的にそのイベントを包み込むようなもので，厳密なイベント発生時には言及しにくい」（渡辺 2009: 89）とされている。

5.3.1.3 「いつも」の意味特徴

前述の通り，「いつも」は「始まりの時点」が発話時から離れている，即ち時間幅が長い表現（「少年の頃から」）とは共起可能であるのに対し（前掲（26）），「始まりの時点」が発話時に近い，即ち時間幅が短い表現（「さきほどから」「昨日から」）とは共起しにくい（前掲（27））。この点について，「ことがある」に関する渡辺（2009）の指摘（前掲（30））を援用すれば，「いつも」は事態が「時間軸上のどの位置（時点）に置かれるかということは問題にしない」と考えられる。ここから，「いつも」には次のような特徴があると指摘することができる。

（35） 「いつも」は，事態の生起時や生起回数を特定化しない。

なお，BCCWJ から収集した「いつも」の用例には次のようなものが見られる[9]。

(36) a.　最近仕事が本当に忙しいらしく，帰りがいつも 0 時を回っています。
（Yahoo!知恵袋 2005 年，下線は筆者）

b.　近頃の尾瀬はいつも満員で，前約なしには泊山地で，殆んど登山者の姿を見かけなかった。（深田久弥『日本百名山』，下線は筆者）

(36) の「最近」「近頃」は事態生起時が発話時に近いことを示す。しかし，これらは「さきほどから」「昨日から」のように具体的な日時がある程度想起可能なものではなく，発話時に近い期間を漠然と指し示す。つまり，これらは渡辺 (2009) の言う「時点としての厳密性が薄れ」（渡辺 2009: 89）た表現であるため，「いつも」との共起が可能になっていると考えられる。

5.3.2 「いつも」が例外を許容する要因

次に，「いつも」が例外の存在を許容する要因について検討する。前述の通り，佐藤（2017）は次の（37）のように述べ，「いつも」が（38）のように振る舞うことを示唆している。

(37) a.　前の月に週二回のペースで学校に遅刻した高校生の娘がいたと仮定しよう。(1)〔筆者注：ここでの（37b)〕はそのような娘に対する母親の発話としてごく自然なものである。（＝（18a)）

b.　あなた，いつも学校に遅刻してどうするの。（＝（18b)）

(38)　「いつも X」は，話し手の認識の範囲内において事態 X の非生起（例外）が確認されても成立する。（＝（19)）

---

[9] 「いつも」の用例は，「中納言」（ver. 2.4.5）を用い，以下の条件で短単位検索を実施して収集した。

（vii）　キー：品詞「代名詞」AND 語彙素「何時」
後方共起（キーから 1 語）：品詞「助詞－係助詞」AND 語彙素「も」

これには，前掲（35）の「いつも」の意味特徴が関与していると考えられる。そもそも例外とは，ある範囲内において生起する事態がすべて同じではない場合に生じるものである。例えば，10 回の認識のうち 10 回同じ事態 X が生起したという場合には例外はなく，8 回同じ事態 X が生起した（2 回は違う事態 Y であった）となれば例外があるということになる。つまり，例外というものは全体の回数や事態生起の回数が特定されて初めて問題になるのである。しかし，(35) に示した通り，「いつも」は事態の生起回数を特定化しない特徴があるため，そもそも例外の有無ということが問題にされない（例外という概念が馴染まない）のである。

従って，「いつも」が例外を許容する要因は次のようにまとめられる。

(39)　「いつも」は事態の生起回数を特定化しないことにより，例外の有無ということが問題にされないため，客観的に見れば例外が存在していても用いられ得る。

5.3.3 「いつも」の意味

以上の考察を踏まえると，「いつも」の意味は次のように捉えられる。

(40)　「いつも」は，<u>生起時や生起回数を問わず，</u>話し手による複数回の認識において事態が反復的に確認されることを表す。　（＝（3））

本稿では，特に（40）の下線部を明らかにしたが，それにより，先行研究で十分に説明されなかった現象，即ち「始まりの時点」の制約がある要因と例外を許容する要因について説明を与えることが可能になったと言える。

5.4 「常に」の意味について

5.4.1 「始まりの時点」の制約の再確認

次に,「常に」の意味について考察する。まずは,「始まりの時点」の制約について確認する。仁田（2002）は「常に」の「始まりの時点」の制約について明示的には述べていないが，仁田（2002）では一貫して「いつも」と「常に」がまとめて扱われているため,「常に」にも「いつも」と同様の制約があると捉えていると推察される。これは，次の（41）に比して（42）の容認度が低いことからも示唆される。

(41)　少年の頃からそういう風に生きたいと常に考えています。

(42) a. ??さきほどからそういう風に生きたいと常に考えています。

b. ??昨日から常に電話を掛けている（のに，繋がらない)。　（＝（12b)）

5.3 節では,「いつも」に「始まりの時点」の制約があるのはこの形式が事態の生起時や生起回数を特定化しないという意味特徴を持つことに起因しており，さらにその特徴が例外を許容する要因にもなっていることを明らかにした。しかし,「常に」は例外を許容しないことから,「常に」に「始まりの時点」の制約がある要因が「いつも」と同じであるとは考えにくい。従って,「常に」の「始まりの時点」の制約については「いつも」とは異なる観点から考察する必要があるが，その点についてはここで一度措くこととする。以下では「常に」が表すとされる「恒常性」について再検討し，それによって明らかにされる「常に」の意味を踏まえ，改めて「始まりの時点」の制約について考察する。

5.4.2 「恒常性」の再検討

5.4.2.1 飛田・浅田（1994）の問題点

前述の通り，飛田・浅田（1994）は「常に」について,「一瞬の間もあけずにまったく同じ状態を保つ点にポイントがあり, 恒常性の暗示がある」(前掲 (21)) と指摘して次の（43a）の例を示しているが，同様のことを表し得る環境にある

（43b）において，「常に」は不適格となる。

（43）a.　二等辺三角形の両底角はつねに等しい。　（＝（22））

b. ??クジラは常に哺乳類だ。　（＝（24））

以下，この点について，頻度を表す副詞と「恒常的な状態」の関係に言及する矢澤（1987）の指摘を参照して考察する。

5.4.2.2　頻度を表す副詞と「恒常的な状態」の関係

矢澤（1987）は，頻度を表す副詞について次の（44）のように述べ，それに関連して（45）（46）の例を挙げている。

（44）　「いつも」や「しばしば」など頻度を表す B_3 類は，恒常的な状態は修飾対象としえないが，変化しえる状態ならば修飾対象にしえる[原注7]。[10]

（矢澤 1987: 7）

（45）a.　いつも優しいお母さん　（矢澤 1987: 7，下線は筆者）

b.　あの売店にはしばしば特売品がある　（矢澤 1987: 7，下線は筆者）

（46）a.　?いつも背が高いお母さん　（矢澤 1987: 7，下線は筆者）

b.　?あの売店にはしばしば入口がある　（矢澤 1987: 7，下線は筆者）

（44）では「恒常的な状態」が「変化しえる状態」と対比的に提示されているこ

[10] 矢澤（1987）は，「反復を表す連用修飾成分や出来事の成立のあり方を表す連用修飾成分など，一まとまりの動きや事態などを単位として修飾限定する連用修飾成分」（矢澤 1987: 1）について考察している。矢澤（1987）はこれを「畳語形のオノマトペ副詞」「反復の連用修飾成分」「出来事の成立の連用修飾成分」「出来事の成立の様態を表す連用修飾成分」に分け，それぞれを A 類，B 類，C 類，D 類と呼称する。さらに，B 類の「反復の連用修飾成分」を「連続動作を表す連用修飾成分」「度数の連用修飾成分」「頻度の連用修飾成分」に下位分類し，それぞれを B_1 類，B_2 類，B_3 類と呼称する。なお，B_3 類の「頻度の連用修飾成分」の具体例としては「いつも」「時々」「しばしば」「まれに」が挙げられている。

とから，矢澤（1987）はこれを「変化し得ない状態」という意味で用いていると推察される。

5.4.2.3 「常に」の意味特徴

矢澤（1987）の言う「恒常的な状態」か否か，即ち「変化し得ない状態」か否かという観点で次の例を観察すると，次の（47a）と（47b）はいずれも「変化し得ない状態」に相当する。

(47) a.　二等辺三角形の両底角は等しい。
　　b.　クジラは哺乳類だ。

しかし，これらには「変化」のための条件を想定可能か否かという点において差がある。(47a）の場合，確かに理論上は二等辺三角形の両底角が等しくなくなるということはないが，図形を変更するなどして，その等しさを変えようと試みることは可能である。つまり，結果的にはその等しさは「変化し得ない」が，「変化」のための条件を想定することは可能である。これに対し，(47b）の場合，クジラが哺乳類でなくなるような条件は想定しにくい。このことは，次の（48a）と（48b）の容認度に差があることからも示唆される。

(48) a.　二等辺三角形の両底角はどのような場合でも等しい。
　　b. ??クジラはどのような場合でも哺乳類だ。

こうした（47a）と（47b）の差と，前掲（43a）と前掲（43b）の「常に」の適格性の差を重ねると，「常に」には次のような意味特徴があることが導かれる。

(49)　「常に」は，ある事態が変化する条件が想定可能な場合に用いられる。

5.4.3 「常に」の意味

前掲（49）のような意味特徴を持つ「常に」が（47a）の文で用いられた場合（前掲（43a）），そこではまさに前掲（48a）のようなことが表されると考えられる。つまり，「常に」の意味は次のように捉えられる。

(50)　「常に」は，ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても，当該事態に変化がないことを表す。　（＝（4），波線加筆）

「常に」の意味をこのように捉えることで，5.4.1 節で挙げた（42）の容認度が低いことについて説明を与えることができる。まず，(42a) の容認度が低いのは，「常に」が（50）の実線部の意味を表すことによる。つまり，「常に」と事態が生起する期間を示す表現が共起する場合は，その表現が当該事態に変化が生じ得るだけの時間幅を持つ必要があるのである。しかし，(42a) の「さきほどから（発話時まで）」は，「(そういう風に生きたいと）考える」という事態が変化し得るだけの時間幅を持っているとは考えにくく，そのために「常に」が不適格になる。5.4.1 節では「常に」の「始まりの時点」の制約に関する検討を保留していたが，その背景にあるのはこの（50）の実線部の意味であると考えられる。

一方，（42b）の「昨日から（発話時まで）」は「電話を掛ける」という事態が変化し得るだけの時間幅は持っていると言える。それにもかかわらずこの文の容認度が低いのは，「常に」が（50）の波線部の意味を表すことによる。つまり，「電話を掛ける」という事態が「昨日から（発話時まで）」という時間幅において変化しないということが不自然なのである。

なお，前掲（50）のうち，波線部は「ずっと」の意味と重なると言える。例えば，次の（51a）と（51b）は「当該事態に変化がない」ということを表す点では共通している。

(51) a.　少年の頃からそういう風に生きたいと常に考えています。　（＝（41））
　　b.　少年の頃からそういう風に生きたいとずっと考えています。

一方で，「常に」が用いられた（51a）には「ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても（当該事態に変化がない）」という含意があるのに対し，「ずっと」が用いられた（51b）にはそのような含意はないと考えられる。つまり，「ずっと」の場合は当該事態に変化が生じ得るだけの時間幅が確保されるか否かは問題にされない。そのため，この形式は「始まりの時点」の制約を持たず，次のような場合にも適格なのである。

（52）　さきほどからそういう風に生きたいとずっと考えています。（＝（8a））

5.5　本章のまとめ

本章では，「いつも」は生起時や生起回数を問わず話し手による複数回の認識において事態が反復的に確認されることを表すのに対し，「常に」はある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても当該事態に変化がないことを表すことを明らかにした。また，「いつも」については例外を許容するとされるが，それは「いつも」が生起回数を特定化しないことで，例外の有無ということが問題にされないためであることを主張した。

このように，両者は意味的に異なるものであるが，次の場合はいずれを用いても文意に大差がない。

（53）　毎回のテストで太郎は｛いつも／常に｝トップだった。

（佐藤 2017: 3，下線は筆者）

これは，「毎回」と共起しているという語用論的な要因による。まず，「いつも」が用いられた場合，「トップだ」という事態の生起時や生起回数は特定されないため，客観的には「トップでない」ということがあり得るが，「毎回」との共起によってその可能性は消滅する。次に，「常に」が用いられた場合，「トップだ」という事態が「毎回」という期間内において変化しないことが表され，「トップ

でない」ことはなかったということを含意するのである。

第 6 章

「強調」と広義全称表現

6.1　はじめに

本章では，「決して」について論じる。「決して」は，「全否定」に関わるとされる点で第 3 章において扱った「まったく」「全然」と共通するが，先行研究において議論される枠組みが異なる（第 3 章 3.5.2 節）ことから，これらとは章を分けて論じる。

従来「決して」については，「不利な前提」がある，「部分否定」を表す，「強調」の役割を担うなどと指摘されている（6.2 節にて詳述）。これに対し，本章ではそうした指摘が「決して」の振る舞いの一部を捉えたものに過ぎず，いずれも「条件的関係」の観点から説明可能であることを明らかにする（6.3 節及び 6.4 節にて詳述）。本章の主張は次の 3 点である。

(1)　「決して」は，「(p でも）決して~q」において，裏に持つ「p ならば q」という「条件的関係」が成立せず，非一回的に~q であることを表す。[1]

(2)　~q が「話し手の基準」に照らした判断である場合，「(p でも）決して~q」は，「話し手の基準」以外の「基準」に照らした判断では（一般的に）q が成立する可能性があるということを語用論的に含意し，「q とは言い切れない」という意味を生じ得る。

(3)　p が「不定」である場合，「決して~q」は「どんな条件でも~q」ということを表し，語用論的に「強調」の効果を生じ得る。

[1] ~q は「q でない」ということ（q の否定）を表す。

6.2　先行研究と問題の所在

「決して」については，数多の先行研究において，否定形式との共起が義務的であるという統語的特徴が指摘されている。

(4)　　太郎は決して嘘をつかない／*つく。　（加藤 2003: 163）

その一方で，本田（1982），森田（1989），飛田・浅田（1994），杉村（2001）などでは，「決して」の意味的・語用論的特徴に目が向けられている。以下，これらの研究の指摘を概観し，併せてその問題点を示す。

6.2.1 「不利な前提」という指摘とその問題点

まず，本章の主張に関して最も示唆的な指摘が見られるものとして，森田（1989）を取り上げる。森田（1989: 408）は次の（5）と（6）を比較し，「決して」を含む（6）には「さまざまの不利な前提」があると述べる。

(5)　　私は外国人ではありません　（森田 1989: 408）
(6)　　私は決して外国人ではありません　（森田 1989: 408，下線は筆者）

「不利な前提」の例として，森田（1989）は次のようなものを挙げる。

(7) a.　日本語より外国語のほうがじょうず　（森田 1989: 408）
　　b.　日本人ばなれした外見・風貌をしている　（森田 1989: 408）
　　c.　日本人らしからぬ名前である　（森田 1989: 408）

一般的に，これらはいずれも「外国人である」という判断を導きやすいと言える。しかし，事実が「外国人ではない」であれば，その事実を導くにあたって（7）

の「前提」は「不利」ということになる[2]。

この森田（1989）の指摘は,「決して」を含む（6）が概ね次のように述べようとする文であることを示唆する。

（8）a.　日本語より外国語の方が上手でも，外国人ではない。

b.　日本語より外国語の方が上手でも，決して外国人ではない。

（8）の前件と後件を適切に繋ぐ接続形式がいわゆる「逆接」を表すものであることは，前件「日本語より外国語の方が上手」が後件「外国人ではない」にとっての「不利な前提」であることの傍証と言える。しかし，例えば「川で溺れた」という事態は「死ななかった」という結果を導くにあたっての「不利な前提」と言えるが，これらを繋げた次の文では「決して」が不適格になる。

（9）a.　太郎は川で溺れたのに，死ななかった。

b. ??太郎は川で溺れたのに，決して死ななかった。

このことは,「不利な前提」があるとするだけでは,「決して」の振る舞いを必ずしも十分に捉えられないことを意味している。

6.2.2 「部分否定」という指摘とその問題点

一方，飛田・浅田（1994）は次の（10）の文について（11）のように述べ,「決

[2] 飛田・浅田（1994: 144）は,「『けっして』は，ある前提をふまえてそれにもかかわらず強く打ち消すというニュアンスがあ」ると述べるが，これも森田（1989）と同趣旨の指摘であると考えられる。一方，杉村（2001: 77）も「『ケッシテ』は『当該の事態の成立がありうるとする想定』を前提として，それを否定する表現である」とし,「決して」と「前提」の関係に触れている。ただし，杉村（2001: 78）は「そもそも否定は肯定を前提とする表現である」とも述べている。他の先行研究にもそのような指摘が見られるが（丹保 1980；小川 1984 など），この場合の「前提」は森田（1989）の言う「前提」とは異なるものを指すと考えられる。従って，杉村（2001）の指摘については森田（1989）の指摘とは必ずしも重ならない。

して」は「部分否定」を表すと指摘している。

(10)　中学入試の問題はけっしてやさしくない。

（飛田・浅田 1994: 144, 下線は筆者）

(11)　その判断が必ずしも正しくないというニュアンスで，部分否定になる。

（飛田・浅田 1994: 144, 下線は筆者）

飛田・浅田（1994）では次のような例も挙げられていることから，ここでの「部分否定になる」とは，「～とは言い切れない」の意味になるということを指すと推察される。

(12)　決してやさしくない。（やさしいとは言い切れない）

（飛田・浅田 1994: 145, 下線は筆者）

これに対し，杉村（2001: 80）は，「決して」が「部分否定」（「～とは言い切れない」の意味）を表すとすると次の文が「説明できなくなる」と述べている。

(13)　不死鳥はケッシテ死なない。　（杉村 2001: 71）

ただし，杉村（2001）は（12）が「部分否定」になることは認めており，その要因について次のように述べている。

(14)　「やさしい」の打ち消しは，必ずしも〔筆者略〕「全然やさしくない」を意味するのではなく中間的な場合もある。〔筆者略〕そういう意味では「ケッシテ」が部分否定を表すと言えなくもない。

（杉村 2001: 81, 下線は筆者）

杉村（2001）が述べる通り，「決して」が「部分否定」を表すとすると（13）の

例を説明することができない。その点で飛田・浅田（1994）の指摘は不十分である[3]。ただし，杉村（2001）の指摘にも問題がある。杉村（2001）は，（12）が「部分否定」になる要因を「やさしくない」の意味のみに求めていると言える（(14)）。しかし，そうであれば「決して」が含まれない次の文も「部分否定」になることが予測されるが，そうとは考えにくい。

（15）　この問題はϕやさしくない。

従って，（12）が「部分否定」，即ち「～とは言い切れない」の意味になる要因は未だ判然としていないことになる。さらに，森田（1989）の言う「不利な前提」との関係も不明である。

6.2.3 「強調」という指摘とその問題点

最後に,「決して」は「強調」の役割を担うとする指摘を取り上げる。本田（1982）は次のように述べている。

（16）　「決して」は，ある事態に対して話手の下す否定的断定を強調するということをそのもっぱらの役割とする。　（本田 1982: 6，下線は筆者）

本田（1982）は，「～ない」という否定文（一部を除く）にはそもそも「否定的断定」が備わっており，「決して」の介在によってそれが「強調」されることになると言う。例えば，本田（1982）は次の（17）の文について（18）のように述

[3] 飛田・浅田（1994: 144）は「決して」の「基本的な用法」を「強調」としており，「部分否定」を表す文を作る「決して」をこれと分けているように読める。その場合，杉村（2001）が挙げる（13）の「決して」を「基本的な用法」，即ち「強調」を表すものと捉えれば，少なくとも飛田・浅田（1994）の中での理論的矛盾は生じない。しかし，「決して」を含む文が「部分否定」になる場合とそうでない場合があることの要因については言及されておらず，その点に鑑みれば飛田・浅田（1994）の指摘はやはり十分なものとは言えない。

べる。

(17) a.　おまえらにはオレの気持など決してわからない。
（本田 1982: 11，下線は筆者）

b.　今日は雨なんか決して降らない。　（本田 1982: 11，下線は筆者）

(18)　これらの否定文は，たとえ「決して」（この副詞は強調の副詞であり任意要素である。）が入っていなくても，話手の否定的断定であることには疑問の余地がないだろう。　（本田 1982: 11）

確かに，（17）の「決して」は「強調」の役割を担っていると捉えられなくもない。しかし，森田（1989）や飛田・浅田（1994）などの指摘に照らせば，「決して」を「強調」のみによって特徴付けるのは不十分と言える。

6.2.4　本章の方針

以上，先行研究ではそれぞれ興味深い指摘がなされているが，いずれも不十分な点があることを示した。次節以降では，特に森田（1989）が指摘する「不利な前提」に注目して「決して」の意味を明らかにし，その中で「部分否定」や「強調」がどのように説明されるか考察する。

6.3 「決して」の意味について

6.3.1　裏に持つ「条件的関係」の不成立

6.3.1.1　森田（1989）の示唆と「逆接」の意味

まず，「決して」について森田（1989）が示唆することを改めて確認する。前述の通り，森田（1989）は，次の文には「外国人ではない」という判断を導くにあたっての「不利な前提」があると指摘する（6.2.1 節）。

(19)　私は決して外国人ではありません　（＝（6））

これを受け，6.2.1 節では，（19）が次のようなことを表す文であることが示唆されていると述べた。

（20）　日本語より外国語の方が上手でも，外国人ではない。　（＝（8a））

ここで注目すべきは，(20) の後件（(19) で明示的に述べられる事柄）と前件（「不利な前提」）が「逆接」を表す接続形式で繋がる点である。このことは，「決して」が「逆接」と密接に関わることを示している。

次に，その「逆接」の意味について前田（1995）を参照する。前田（1995）は，「ても（でも）」と「のに」が用いられた次の（21）について，（22）のように述べている。

（21）a.　薬を飲んでも，治らなかった。　（前田 1995: 499）

b.　薬を飲んだのに，治らなかった。　（前田 1995: 499）

（22）　前件の「薬を飲んだ」という事態と，後件の「治らなかった」という事態に，「条件的関係の不成立」という関係が存在する。つまり，「薬を飲めば治る」という条件的関係あるいは判断を予測として裏に持っていて，それが成立しなかった，ということを表している。

（前田 1995: 499，下線は筆者）

この（22）について，前田（1995: 500）は「これを，『逆接』の意味として規定しよう」と述べている。

6.3.1.2 「逆接」から見る「決して」の意味

前田（1995）に倣えば，前掲（20）は次のような「条件的関係」を裏に持ち，それが成立しなかったことを表すと言える。

（23）　日本語より外国語の方が上手ならば，外国人である。

（20）が「決して」を含む前掲（19）で述べようとしている文であることに鑑みれば，（19）もまたこの（23）の「条件的関係」を裏に持つと考えられる。従って，（19）を次の（24a）のように表せば，ここで明示的・暗示的に述べられる内容は（24b）のように整理される。

（24）a.　決して~q である。
　　b.　（通常は p ならば q である。しかし実際は，p でも）~q である。

（24b）の括弧内は（24a）が暗示する内容であるが，これを暗示することこそが「決して」の意味のひとつである。即ち，「決して」にはまず次のような意味があると言える。

（25）　「決して」は，「決して~q」において，裏に持つ「p ならば q」という「条件的関係」が成立しないことを表す。

6.3.2　~q の非一回性

前節では，「決して~q」が前掲（24b）の括弧内を暗示するとしたが，特に p という事実があること，あるいは p と仮定していることは文内で明示的に言及される場合もある。

（26）　日本語より外国語の方が上手でも，決して外国人ではない。
（＝（8b），波線を加筆）

しかし，p が明示されると文の容認度が下がることがある。例えば，次の（27）に比して（28）の容認度は低い。

(27) a.　太郎は決して死ななかった。

　　b.　太郎は決して学校を休まなかった。

(28) a. ??太郎は川で溺れたのに，決して死ななかった。　　（＝（9b））

　　b. ??太郎は登校中に事故に遭ったのに，決して学校を休まなかった。

一方で，(28) は p が多回的に生起する読みを与えることで容認度が上がる。

(29) a.　太郎はこれまで何度も川で溺れたのに，決して死ななかった。

　　b.　太郎はこれまで何度も登校中に事故に遭ったのに，決して学校を休まなかった。

この現象は，「決して」が次のような意味を持つことを示している。

(30)　「決して」は，「(p でも）決して~q」において，非一回的に~q であることを表す。

つまり，(26) では恒常的に~q であることが表されており，(27)（29）では多回的に生じる p に応じる形で同じく多回的に~q であったことが表されているのである。これに対し，(28) では p が一回的であることに応じて~q も一回的な事態と解釈されるため，「決して」が不適格になると考えられる[4]。
「決して」に（30）のような意味があることは，(28) の p を「ても」によって明示することで文の容認度が上がることからも示唆される。

(31) a.　太郎は川で溺れても，決して死ななかった。

[4] 次のような文では，p が一回的であっても「決して」が適格になる。
　(i)　太郎は川で溺れたのに，決して助けを呼ばなかった。
この場合は次のような読みを以って~q の非一回性が表されていると考えられる。
　(ii)　助けを呼べる状況が何度もあった（と考えられる）にもかかわらず，一度もそうしなかった。

b.　太郎は登校中に事故に遭っても，決して学校を休まなかった。

前田（1995, 2009）によれば，「ても」には前接する事態とは別の事態を認めるという特徴がある[5]。例えば，次の（32a）は（32b）を表し得るとされる。

(32) a.　薬を飲んでも，治らなかった。　（＝（21a））

b.　（薬を飲む以外の）ほかのこともした。その結果，治らなかった。

（前田 1995: 500，下線は筆者）

このように，特定の p（p_1）が「ても」によって明示された場合，それとは別の p（p_2，p_3，…，p_n）の生起も示され，それに応じて~q が非一回的であること（「p_1 の場合も~q，p_2 の場合も~q，…，p_n の場合も~q」）が表される。そのため，(31) は容認度の高い文になるのである。

6.3.3 「決して」の意味

以上の議論から，「決して」の意味は次のようにまとめられる。

(33)　「決して」は，「(p でも）決して~q」において，裏に持つ「p ならば q」という「条件的関係」が成立せず，非一回的に~q であることを表す。

---

[5] 前田（2009）は，接続助詞「ても」の用法を「逆条件」（いわゆる「逆接」を表す用法），「並列・逆条件」，「並列条件」の 3 種に分ける。このうち，並列条件を表す「ても」は次のようなものであり，「後件を引き起こす条件として p を明示的に示し（p ならば q），かつ，p 以外にも後件を引き起こす事態が存在することを暗示する（r なら q）」（前田 2009: 194）。

(iii)　3 を自乗すると（しても）9 になるし，-3 を自乗しても 9 になる。

（前田 2009: 191）

しかし，「p ならば q」は，「帰結 q を引き起こす事態は p 以外にはない，という含意」（前田 2009: 194）を持ちやすい（日常言語の推論においてこのような含意が生じる現象は「誘導推論」（invited inference）と呼ばれる（Geis & Zwicky 1971; 坂原 1985））。そのため，「p でも q」では「あたかも想定される条件関係が否定されるように見える」（前田 2009: 195）。前田（2009）はこれが「逆条件」に当たるとしている。

（＝（1））

なお，（33）は，「決して」が特に論理学で言われる「譲歩文」（坂原 1985; 小泉 1987 など）と関わるものであることを示す[6]。「譲歩文」について，小泉（1987）は次のように規定している。

（34）　譲歩文は，前件の条件が満たされたのに期待される結果が得られなかったことを表明する文である。　（小泉 1987: 4）

坂原（1985: 85-86）は，「日常言語の条件文“p ならば q”の発話に伴う最も顕著な特徴は，明言された命題が明示されない前提に支えられていることである」と述べる。坂原（1985）はその「明示されない前提」[7]が満たされないとき，「p な

---

[6] 森田（1989）は，「決して」に言及する中で「譲歩」という用語を用いている。

（iv）　「決してよくない」には，何かの前提が潜んでいると見ていい。「今回はやむを得ないが，それは決してよくはない」「それは決してよくはないが，そうかと言って他に方法は見当たらないし……」など，一応「よくない」と認めつつも例外を設ける。そのような譲歩を前提とした判断なのである。

（森田 1989: 409，下線は筆者）

しかし，ここでの「譲歩」は必ずしも坂原（1985）や小泉（1987）の言う「譲歩」（文）を指しているとは限らず，辞書的意味の「譲歩」を指している可能性もある。『明鏡国語辞典第二版』では，「譲歩」について次のように説明されている。

（v）　自分の主張をひっこめて相手の主張を受け入れること。

（『明鏡国語辞典第二版』「譲歩」）

しかし，この場合の「譲歩」は「死なないとは限らない（死ぬ可能性もある）」という読みのことを指しており（波線部参照），坂原（1985）らの言う「譲歩」（文）にも辞書的意味の「譲歩」にも当たらないと考えられる。

[7] 坂原（1985）はこれを「暗黙の前提」と呼ぶ。例えば，次の文が「“普通”真なのは誰でも知っている」（坂原 1985: 87）。

（vi）　沸騰しているお湯に手を入れれば，やけどをする。　（坂原 1985: 87）

しかし，ここでは次のような「特別な事態が排除されて」（坂原 1985: 87）おり，そのことは「いちいち明言するまでもないと思われている」（坂原 1985: 87）。

（vii）　高性能の断熱材でできた手袋をしている　（坂原 1985: 87）

（viii）　気圧が異常に低く，沸騰していても 40 度くらいである　（坂原 1985: 87）

つまり，（vi）は（vii）（viii）などが「排除」されていることを「暗黙の前提」としていると言える。

らば q」は否定されて「譲歩文」になると言う（坂原 1985: 157）。つまり，「譲歩文」は裏に「p ならば q」という関係を持ち，それが成立しないことを表す文と言える。これは，「決して」を含む文で表されることと重なるものである。

6.4 「決して」の意味と「部分否定」「強調」の関係

前節では「決して」の意味について前掲（33）のようにまとめた。本節では，この意味と「部分否定」「強調」の関係を明らかにする。

6.4.1 「決して」と「部分否定」

まず，「決して」と「部分否定」の関係を見る。前述の通り，飛田・浅田（1994）や杉村（2001）は次の文が「部分否定」になる，具体的には「～とは言い切れない」の意味になると指摘する（6.2.2 節）。

（35）　決してやさしくない。（やさしいとは言い切れない）　（＝（12））

以下では，このような意味は「(p でも）決して~q」の~q が「話し手の基準」に照らした判断である場合に語用論的に生じるものであることを示す。

6.4.1.1 「話し手の基準」に照らした判断

八亀（2003: 15）は，次の場合は A さんと B さんが「違う太郎を見ているか，もしくは，違う時に同じ太郎を見ていると考えられる」と述べる。

（36）　A さん：太郎が立った。
　　B さん：太郎が座った。　（八亀 2003: 15，下線は筆者）

これは，両者が「客観的な出来事の描写」（八亀 2003: 15）をしていることに起因すると言う。一方，次の場合は「A さんと B さんが，同時に同じ部屋を見て

発言している可能性がある」（八亀 2003: 15）とされる。

（37）　A さん：この部屋広いね。
　　B さん：この部屋狭いね。　　（八亀 2003: 15，下線は筆者）

（37）の A さんの発言に関し，八亀（2003）は次のように指摘している[8]。

（38）　「広い」という特性は，「この部屋」に客観的にそなわっている特徴として差し出される一方で，話し手の中のなんらかの基準との比較のなかでもとらえられている。この場合，おそらく話し手が，「今までの自分の経験」「この部屋を何に使いたいかという目的意識」などを勘案して，「広い」という《評価》を下している。　（八亀 2003: 17，下線は筆者）

つまり，「広い」「狭い」という意味的に対立する判断であっても，これらは「話し手の中のなんらかの基準」（以下，「話し手の基準」）に照らしたものであるため，「経験」や「目的意識」などが異なれば，同一対象への判断として成立し得るのである。言い換えれば，「話し手の基準」に照らした判断（例えば「広い」）は，意味的に対立する判断（「狭い」）が成立する可能性を必ずしも否定しないということになる。

6.4.1.2 「決して」を含む文が「部分否定」になるとされる背景

前掲（35）の「やさしくない」は，「話し手の基準」に照らした判断と考えられる。それは，次の場合に A さんと B さんが同時に同じ対象を見て発言している可能性があることから示唆される。

（39）　A さん：この問題はやさしいね。

[8] 八亀（2003）の指摘は，樋口（2001）による「評価性」の定義に基づいている。これについては樋口（2001）を参照されたい。

B さん：この問題はやさしくないね。

このような特徴を持つものが「決して」と共起した場合の影響について検討する。次の（40）は p を明示していないが，一例としては（41）のような「条件的関係」を裏に持っていることが考えられる。

（40）　中学入試の問題はけっしてやさしくない。　（＝（10），下線を加筆）

（41）　小学 6 年生が解くような問題であれば，（一般の成人にとっては）やさしい（はずだ）。

「決して」の意味（前掲（33））により，（40）は（41）の「条件的関係」が成立しないことを表す。ただし，~q の特徴から，それは「話し手の基準」に照らした判断として不成立ということになる。この場合，「話し手の基準」以外の「基準」に照らした判断では（一般的に）q が成立するということが語用論的に含意される。その結果，（40）は次の（42a）のような意味合いを持ち，（42b）のような文に意味的に近似する。

（42）a.　一般的に，中学入試の問題はやさしいと考えられている（だろう）が，私はそう判断しない。

b.　中学入試の問題はやさしいとは言い切れない。[9]

以上のことは次のようにまとめられる。

[9] この読みを「部分否定」と呼ぶべきか否かについては，本章では立ち入らない。しかし，仮に「部分否定」と呼ぶ場合でも，その意味合い（何を全体とするか）は少なくとも杉村（2001）の言う「部分否定」とは異なる。杉村（2001）は，否定述語が持つスケールを全体とし，その中である程度まで否定してある程度まで肯定するという意味で「部分否定」を用いている（言わばスケールについての「部分否定」であるが，この分析に問題があることは 6.2.2 節で述べた通りである）。これに対し，（42b）の読みを「部分否定」と呼ぶ場合，それは判断者の集合を全体とし，その中である者（話し手）は否定して他の者は肯定するという意味合いを持つ（言わば集合についての「部分否定」）。

(43)　~q が「話し手の基準」に照らした判断である場合，「(p でも）決して ~q」は，「話し手の基準」以外の「基準」に照らした判断では（一般的に）q が成立する可能性があるということを語用論的に含意し，「q とは言い切れない」という意味を生じ得る。[10]　（＝（2））

先行研究による「部分否定」という指摘は，この（43）の点を捉えたものと言える。

一方，「決して」が「客観的な出来事の描写」を表すものと共起する場合は，基本的に「～とは言い切れない」の意味にならない。例えば，次の A さんと B さんは同時に同じ対象を見て発言しているとは考えにくいため，「死ぬ（死んだ)」「死なない（死ななかった)」は「客観的な出来事の描写」と言える。

(44)　A さん：この鳥は死んだ。
　　B さん：この鳥は死ななかった。

この「死なない」と「決して」が共起した次の（45）も，その裏に（46）のような「条件的関係」を持ち，それが成立しないことを表す。

[10]「話し手の基準」に照らした判断を表すもの，即ち「決して」と共起することで「～とは言い切れない」の意味になり得るものの典型例は，形容詞であると考える。一方で，杉村（2001）は「中間的な場合」があるものが「決して」と共起する際に「～とは言い切れない」の意味になると述べるが，その「中間的な場合」とは形容詞のようにスケール（段階性）を持つものが否定文の述語となる際に生じると言える。つまり，「決して」と共起する場合に「～とは言い切れない」の意味になる典型例が形容詞である（と考えられる）点では，本論文と杉村（2001）の立場は一致していることになる。しかし，「～とは言い切れない」の意味は「決して」の介在によって生じる（6.2.2 節）ということを踏まえると，（結果的に共起述語の典型例が杉村（2001）と重なっても）その意味が生じるに当たって重要となる点は共起述語が「中間的な場合」を表すことではなく，「話し手の基準」に照らした判断であることと考える（~q が「中間的な場合」を表し得ることは，「決して」との共起によって「～とは言い切れない」の意味を表すことになる直接的な要因ではない)。

(45)　この鳥は（致命傷を負っても），決して死なない。

(46)　この鳥は（致命傷を負えば），死ぬ。

しかし，「客観的な出来事の描写」は同一の対象（ここでは「この鳥」）について意味的に対立する描写が成立することを認めないため，(45）のように述べることで「死ぬ」が成立する可能性は否定される。杉村（2001）が飛田・浅田（1994）への反論として挙げていた次の文が「～とは言い切れない」の意味にならないのはこのことに起因している。

(47)　不死鳥はケッシテ死なない。　（＝（13））

なお，6.2.2 節では，杉村（2001）の指摘の問題点として次の文が「～とは言い切れない」の意味になるとは考えにくいことを指摘した。

(48)　この問題はφやさしくない。　（＝（15））

前述の通り，「やさしくない」は「話し手の基準」に照らした判断であるため，(48）のように述べることは「やさしい」が成立する可能性を必ずしも否定しない。しかし，(一般的に)「やさしい」が成立する可能性があることは，「決して」の介在によって裏に「条件的関係」を持つことを通じて語用論的に含意されることであり（(40）(41)），そうでない場合は自らの判断を示すに留まる。従って，「決して」を含まない（48）は「～とは言い切れない」の意味にはなりにくいのである。

6.4.2 「決して」と「強調」

次に，「決して」と「強調」の関係を見る。前述の通り，本田（1982）は次の文の「決して」が「強調」の役割を担うと述べている（6.2.3 節)。

(49) a.　おまえらにはオレの気持など決してわからない。　（＝（17a））

b.　今日は雨なんか決して降らない。　（＝（17b））

以下では，「強調」は「決して~q」が裏に持つ「p ならば q」の p が「不定」の場合に語用論的に生じる効果であることを示す。

6.4.2.1 「条件の不定化」

前田（2009: 198）は，「ても」は「不定語を含む条件節」を作り得るとし（前田（1995）にも同様の指摘がある），これを「条件の不定化」と呼ぶ。

(50) a.　どんな治療をしても治らなかった。　（前田 1995: 500，下線は筆者）

b.　どこを探しても，見つからなかった。　（前田 2009: 198，下線は筆者）

この場合，「p でも q」は「『どんな条件であっても q』ということを意味する」（前田 2009: 198）とされている[11]。

6.4.2.2 「決して」が「強調」の役割を担うとされる背景

「（p でも）決して~q」において，p が明示されずとも特定の p を裏に持つ場合があることは森田（1989）が示唆するところである。しかし，特定の p ではなく，より抽象的に「q を導く何らかの（様々な）p」を想定している場合も考えられる。これは前田（2009）の言う「条件の不定化」に相当するが，この場合，「決して~q」は「どんな条件でも~q」ということを表す。例えば，次の（51）の文は（52）のような意味を持つ。

(51) a.　決して治らなかった。

[11] 小泉（1987）はこうした意味を持つ文を「不定化譲歩文」と呼ぶ。

b.　決して見つからなかった。

(52) a.　何をしても（どんな治療をしても）治らなかった。

b.　どうしても（どこを探しても）見つからなかった。

本田（1982）が挙げる前掲（49）でも p は明示されていないため，p は「不定」である可能性がある。その場合，（49）は次のような意味を持つと言える。

(53) a.　おまえらには何があってもオレの気持などわからない。

b.　今日は何があっても雨なんか降らない。

「強調」は，この「何があっても」（どのような条件でも）という意味から語用論的に生じる効果と考えられる。即ち，「決して」と「強調」の関係は次のようにまとめられる。

(54)　p が「不定」である場合，「決して~q」は「どんな条件でも~q」ということを表し，語用論的に「強調」の効果を生じ得る。　（＝（3））

先行研究による「強調」という指摘は，この（54）の点を捉えたものと言える。

6.5　本章のまとめ

本章では，「決して」が「(p でも）決して~q」において，裏に持つ「p ならば q」という「条件的関係」が成立せず，非一回的に~q であることを表すということを明らかにした。また，「部分否定」や「強調」の読みは「決して」の意味とそれぞれの環境において~q や p が持つ特徴が相まって語用論的に生じるものであることを示し，先行研究で指摘されていた特徴が「条件的関係」の観点から統一的に説明可能であることを主張した。

また，「決して」は「全否定」に関わる副詞として取り上げられることもある

が，それは「決して」の意味から語用論的に生じる（否定の）「強調」の効果を捉えたことによると考えられる。前述の通り，「まったく」「全然」と「決して」は関わる否定の側面が異なることが指摘されているが，「決して」は「強調」を通じて「全否定」に関わるという点でも，「まったく」「全然」とは異なると言える。

第 7 章

結論

7.1　本論文のまとめ

7.1.1　広義全称表現の意味的多様性

本論文では,「全称量化詞」と呼ばれる「全部」「全員」「みんな」「すべて」と「全称量化」(「普遍量化」) の解釈を受けるとされる「常に」「いつも」, さらに「全否定」に関わる点で「全称量化詞」と共通する特徴を持つ「まったく」「全然」や「決して」といった副詞を加えたものを広義全称表現と呼称し, その意味的多様性を明らかにすることを目的として議論を進めてきた。また, 広義全称表現の一部が,「そうでないものや事態」の存在が認められる場合でも用いられ得る要因について,「限定」を表すとりたて詞の「だけ」「ばかり」との関わりも視野に入れて議論してきた。本章では, 第 3 章～第 6 章の議論の概略を述べ, 各章において明らかにしたことを改めて整理する。

前述の通り, 広義全称表現の中心となるのは「全部」「全員」や「常に」「いつも」などであるが, 本論文の枠組みを提示し, さらに「だけ」「ばかり」との共通性を示すために, まずは第 3 章において,「全否定」に関わる「まったく」「全然」に関する議論から始めた。第 3 章では,「まったく」は「極限（点)」を想定し得る状態性述語や「一点的」である状態性述語と共起しやすく,「全然」は「程度性」を持つ状態性述語と共起しやすいことを指摘し, 次のことを主張した。

(1) a.　「まったく」は, 差分が皆無であることを表す。
　　b.　「全然」は, 程度が甚大であることを表す。

また，「全然」は例外を許容するという先行研究の指摘に対し，その要因について次のように指摘した。

(2)　「全然」は，「極限（点）」が想定される述語と共起する場合も程度の甚大さを問題にし，差分の有無については問題にしないため，例外を許容し得る。

さらに，「限定」を表すとされるとりたて詞の「だけ」と「ばかり」についても，前者は差分が皆無であることを表すのに対し，後者は「（主観的でもあり得る）基準に照らした程度（頻度）の甚大さ」を表すと捉え直すことができる点で「まったく」と「全然」の関係と並行的に捉えられることを主張した。

第 4 章では，広義全称表現の中心となる「全称量化詞」の「全部」「全員」「みんな」「すべて」について論じた。まず，「全部」「全員」「すべて」と「みんな」について，母集合の構成要素の全数に言及する場合には前者のみが適格となり，母集合の構成要素が具体的に想定されない場合には後者のみが適格となることを指摘した。そこから，「全部」「全員」「すべて」と「みんな」には次のような相違があることを主張した。

(3) a.　「全部」「全員」「すべて」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる複数の要素の数と等しいことを表す。

b.　「みんな」は多数の人（場合によってはモノ）から成る集合体を表す。

また，「全部」「全員」「すべて」のうち，「全員」は人のみを指示対象とする点で「全部」「すべて」と異なる。一方で，「全部」と「すべて」は基本的にはモノを指示する点で共通するが，次のような相違があることを指摘した。

(4) a.　「全部」は，単一個体を複数の部分に分割し，その部分から成る集合体

と捉えやすいため，単一個体に対しても用いられる。

b. 「すべて」は，単一個体を複数の部分に分割して捉えることがしにくいため，基本的に単一個体に対しては用いられない。ただし，「I 部分構造」を成す構文に埋め込まれた場合にのみ，その構文の要求に応じる形で当該の（単一）個体から「事態」を引き出した「事態の集合体」を母集合とする。

また，「みんな」は例外を許容するという先行研究の指摘に対し，その要因について次のように指摘した。

(5) 「みんな」は集団（あるいはモノの集まり）自体を指示するものであり，そこに含まれる個々の人（あるいは個々のモノ）に注目するものではないため，例外を許容し得る。

第 5 章では，頻度を表す副詞のうち，先行研究において「全称量化」の解釈を受けることが示唆されている「常に」「いつも」について論じた。まず，「いつも」については，先行研究で指摘されている「始まりの時点」の制約が，経験を表わす「ことがある」に関する制約と類似することに注目した。その「ことがある」に関する先行研究の指摘を踏まえ，「いつも」には事態の生起時や生起回数を特定化しないという特徴があることを明らかにし，「いつも」は次のような意味を持つことを主張した。

(6) 「いつも」は，生起時や生起回数を問わず，話し手による複数回の認識において事態が反復的に確認されることを表す。

次に，「常に」については，この表現が暗示すると指摘される「恒常性」についての検討を通じ，ある事態が変化する条件が想定可能な場合に用いられるという特徴を持つことを明らかにした。そこから，「常に」は次のような意味を持つ

ことを主張した。

(7)　「常に」は，ある事態が変化し得る如何なる条件下にあっても，当該事態に変化がないことを表す。

また，「いつも」は例外を許容するという先行研究の指摘に対し，その要因について次のように指摘した。

(8)　「いつも」は事態の生起回数を特定化しないことにより，例外の有無ということが問題にされないため，例外を許容し得る。

第 6 章では，「決して」について論じた。従来「決して」については，「不利な前提」がある，「部分否定」を表す，「強調」の役割を担うなどと指摘されているが，これらがいずれも「条件的関係」の観点から説明可能であることを明らかにし，次のことを主張した。

(9) a.　「決して」は，「(p でも）決して~q」において，裏に持つ「p ならば q」という「条件的関係」が成立せず，非一回的に~q であることを表す。

b.　~q が「話し手の基準」に照らした判断である場合，「(p でも）決して~q」は，「話し手の基準」以外の「基準」に照らした判断では（一般的に）q が成立する可能性があるということを語用論的に含意し，「q とは言い切れない」という意味を生じ得る。

c.　p が「不定」である場合，「決して~q」は「どんな条件でも~q」ということを表し，語用論的に「強調」の効果を生じ得る。

また，先行研究において「決して」が「全否定」に関わる副詞として取り上げられるのは，「決して」の意味から語用論的に生じる（否定の）「強調」の効果を捉えたことによると指摘した。

7.1.2　広義全称表現における 2 つのタイプ

以上の指摘は，これまで数量，頻度，程度などの枠組みの中で「全」という素性を持つものとして基本的に一括されてきた表現の意味的多様性を明らかにするものであるが，同時に，広義全称表現に大きく 2 つのタイプがあることを明らかにするものでもある。

前述の通り，「全否定」に関わる「まったく」と「全然」は，前者は差分が皆無であることを表し，後者は程度が甚大であることを表すが，「全部」「全員」「すべて」と「みんな」，「常に」と「いつも」の関係を踏まえると，広義全称表現全体がこの 2 つのタイプに分けられると言える。

まず，「全部」「全員」「すべて」は，問題となる対象の数が，前提となる母集合に含まれる複数の要素の数と等しいことを表すが，「等しいことを表す」ということは差分がないことを表すと言える。また，「常に」は不変化を表すが，これは，言い換えれば変化を許容しないということであり，その点で差分が皆無であることを表すと言える。さらに，「決して」はその意味から生じる「強調」という語用論的な効果を通じて「全否定」に関わるが，その場合は事態の不成立を表す。これも，事態の成立を許容しないということであり，その点で差分が皆無であることを表すと捉えることができる。

一方で，「みんな」は多数の人（場合によってはモノ）から成る集合体を表し，「いつも」は話し手の認識の中で事態が反復的に確認されることを表すが，「多数」は量の甚大さに，「反復」は頻度の甚大さに関わる。この点で，「全然」を含め，これらはいずれも（広義の）程度の甚大さを表すタイプとまとめられる。先行研究では，「全然」「みんな」「いつも」が例外を許容するということが指摘されてきたが，それは，これらがいずれも程度の甚大さに焦点を当てるものであり，差分の有無については問題にしないためであるとまとめられる。この主張は，広義全称表現が例外を許容することについて，「言葉の緩い用法（loose use）」や「ルース・トーク（loose talk）」として処理されることに伴う問題，即ち意味的に類似する表現間において例外の許容の有無について差が生じるという問題

を解消するものである。

7.2　今後の課題と展望

最後に，本論文の今後の課題と展望について述べる。

本論文では，広義全称表現が，差分が皆無であることを表すタイプと程度が甚大であることを表すタイプに分けられることを主張したが，本論文で取り上げた表現が広義全称表現のすべてではない。例えば，「全否定」に関わるものとしては，「まったく」「全然」の他にも「まるで」「ひとりも」「誰も」「一向に」などが挙げられる。また，「頻度」に関わるものとしては，「常に」「いつも」の他に「絶えず」「始終」なども広義全称表現に含められ得る。本論文の今後の課題の 1 つは，こうした表現に関する個別の検討である。ただし，本論文で扱わなかった広義全称表現についても，基本的には差分が皆無であることを表すタイプと程度が甚大であることを表すタイプに分けられると予測しており，より多くの表現について検討を加えることは，この 2 タイプの内部の拡がりを明らかにすることに繋がると考えられる。一方で，「決して」のようにこの 2 タイプに収まり切らない振る舞いを見せる表現があることも予測される。その場合は「決して」に関する分析法に倣い，その表現が持つ意味に加え，文脈における語用論的な効果を明らかにし，どのような場合に広義全称表現として振る舞うのか分析することが求められる。

また，本論文では「全否定」に関わる表現として「まったく」「全然」などを扱い，これらが異なるタイプに分けられるとしたが，これは「全否定」の在り方が一様でないことを意味していると言える。さらに，このことは否定自体の在り方についても再考の余地があることを示唆している。一部の先行研究でも示唆されているが，否定が肯定と単純な二項対立を成しているのであれば，「全否定」を表すとされる副詞などが用いられる余地はなく，「全否定」を表す副詞と共起せずとも，否定形式の述語のみで「全否定」に相当することを表せることにな

る[1]。しかし，実際は，例えば「知らない」に対して「まったく知らない」「全然知らない」という述べ方は自然に成立し，「まったく」「全然」を含む場合と含まない場合で差があるものとして扱われる。このことは，「知らない」と言うだけでは「全否定」に至らない場合があるということを示している。これは解釈の問題であると考える。つまり，否定は肯定と二項対立を成しながらも，文によっていくつかの解釈のされ方がある可能性がある。否定が文の中でどう解釈されるか，さらに，否定に関わる副詞はその解釈とどう関わるのかということは，否定の在り方に関わる大きな問題であり，本論文の範囲を逸脱するものである。しかし，本論文の発展として取り組むべき問題であると考える。

さらに，本論文では「全称」と「限定」の関係についても視野に入れ，「限定」を表すとりたて詞の中にも，広義全称表現における 2 つのタイプと並行的に捉えられるものがあることを示した。第 1 章 1.1 節でも述べた通り，本論文では，その中心的考察対象となる広義全称表現にとりたて詞，特に「限定」を表す「だけ」「ばかり」などを含めていない。しかし，これまで関連付けて論じられることのなかった「全称」と「限定」について，差分の有無と程度の甚大さという観点から分析され得ることが示唆された点で，とりたて詞研究における従来とは異なる観点からの研究の素地が作られたとも言える。ただし，その研究を深めるためには，とりたて詞に関する議論を十分に踏まえる必要がある。これについても，本論文の今後の課題である。

---

[1] 小矢野（1995）は，「まるで知らない」などの「まるで」について，「否定表現と呼応して使用されて全否定を表現する」（小矢野 1995: 1）と述べているが，「知らない」という否定形式が「まるで」と共起することについて，次のように述べている。

(i) 否定が単純に否定として機能しているならば，つまり出来事が起きたのか起きなかったのかという二項対立的な判断において肯定に対立するものとして機能しているならば，〔筆者注：「全否定」は〕動詞の形態論的な形としての否定形「知らない」だけで十分に表現されているはずである。

（小矢野 1995: 1）

この点について，小矢野（1995）は，「知らない」は「あまり知らない」「ほとんど知らない」といった「理解の対象の情報『量』の大小による差が内包されることがある」（小矢野 1995: 1）と指摘している。

参考文献・参考資料

参考文献

足立広子（1990）「副詞「全然」の用法について」『南山国文論集』14, 37-46, 南山大学国語学国文学会.

有光奈美（2002）「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察―“not at all”vs.「全然」を中心に―」『言語科学論集』8, 63-80, 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座.

池田英喜（1996）「経験をあらわす「シタコトガアル」について」『待兼山論叢 日本学編』30（11）, 11-26, 大阪大学文学部.

小川輝夫（1984）「否定表現の原理」『文教国文学』14, 22-39, 広島文教女子大学.

沖（加藤）久雄（1983）「小さな程度を表す副詞のマトリックス」渡辺実編『副用語の研究』99-215, 明治書院.

沖（加藤）久雄（1997）「程度副詞の反期待について」川端善明・仁田義雄編『日本語文法―体系と方法―』79-95, ひつじ書房.

尾谷昌則（2008）「アマルガム構文としての『「全然」＋肯定』に関する語用論的分析」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム―山梨正明教授還暦記念論文集―』103-115, ひつじ書房.

加藤重弘（1997）「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26, 31-64, 富山大学人文学部.

加藤泰彦（2003）「否定のスコープと量化」北原保雄編『朝倉日本語講座 5 文法Ⅰ』157-180, 朝倉書店.

加賀信広（1997）「数量詞と部分否定」中右実編『日英語比較選書 4 指示と照応と否定』92-178, 研究者出版.

菊池康人（1983）「バカリ・ダケ」国広哲弥編『意味分析』57-59, 東京大学文学部.

金奈淑（2016）「数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析」平成 28 年度名古屋大学博士論文.

金英周（2014）『名詞句とともに用いられる「こと」の談話機能』ひつじ書房.

工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』176-198, 明治書院.

工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会編『言語学研究会の論文集 ことばの科学 3 』53-118, むぎ書房.

工藤真由美（2000）「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』93-150, 岩波書店.

久米稔（1968）「頻度をあらわす副詞の意味の測定」『早稲田大学語学教育研究所紀要』7, 117-139, 早稲田大学語学教育研究所.

久米稔（1971）「頻度をあらわす副詞の意味の測定 2 ―一対比較法による同意語群の検討―」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10, 53-66, 早稲田大学語学教育研究所.

小泉保（1987）「譲歩文について」『言語研究』91, 1-14.

小柳智一（2005）「副詞と否定―中古語の「必ず」―」『福岡教育大学国語科研究論集』46, 35-50, 福岡教育大学国語国文学会.

小矢野哲夫（1995）「程度副詞としての「まるで」―日本語・日本文化研究―」5, 1-14, 大阪外国語大学日本語講座.

近藤泰弘（1997）「否定と呼応する副詞について」川端善明・仁田義雄編『日本語文法―体系と方法―』89-99, ひつじ書房.

坂口昌子（1999）「否定形式との関係からみた程度副詞の体系」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』18, 1-20（400-381）, 和泉書院.

坂原茂（1985）『認知科学選書 2 日常言語の推論』東京大学出版.

定延利之（2001）「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1（1）, 111-136.

佐藤琢三（2017）「〈全該当〉を表す語の主観性―取りたて助詞「ばかり」を中心に―」『国語と国文学』94(3), 2-16, 東京大学国語国文学会.

佐野由紀子（1999）「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』6, 32-50, 大阪大学日本語学講座.

澤田恵美子（2007）「第 2 章 限定に関わる「とりたて助詞」」『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』95-143, くろしお出版.

杉村泰（2001）「否定副詞ケッシテの意味分析」『言語文化論集』23(1), 71-86, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.

杉村泰（2002）「否定副詞ケッシテとカナラズシモの意味分析―全部否定と部分否定の間―」『言語文化論集』23(2), 123-133, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.

疏蒲剣（2018）「現代日本語における程度副詞の研究」平成 30 年度名古屋大学博士論文.

武内道子（2015）「第 9 章 表出命題態度への制約〈ぜんぜん〉」『手続き的意味論―談話連結語の意味論と語用論―』173-194, ひつじ書房.

田中敏生（1983）「否定述語・不確実述語の作用面と対象面―陳述副詞の呼応の内実を求めて―」『日本語学』2(10), 77-89, 明治書院.

田中秀毅（2014）「英語と日本語における数量表現と関係節の解釈に関する記述的・理論的研究」平成 26 年度筑波大学博士論文.

丹保健一（1980）「否定表現の文法（1）―否定内容と文構造とをめぐって―」『三重大学教育学部研究紀要 人文科学』31(2), 127-136, 三重大学教育学部.

張建華（1998）『日中語の限定表現の研究―「だけ」「ばかり」「しか」と“只”“浄”を中心に―』絢文社.

寺村秀夫（1968）「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12, 42-57.

寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味（3）―取立て助詞について―」『文藝言語研究 言語篇』6, 53-67, 筑波大学文藝・言語学系.

新野直哉（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に―』ひつじ書房.

西田光一（2004）「個体と部分の連続性と日本語の「種類名詞」」『日本認知言語学会論文集』4, 77-86.

仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版.

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』くろしお出版.

沼田善子（1992）「とりたて詞と視点」『日本語学』11(8), 35-43, 明治書院.

野田春美（2000）「「ぜんぜん」と肯定形の共起」『計量国語学』22(5), 169-182.

朴秀娟（2016）「完全否定を表す副詞「まるで」「ぜんぜん」「まったく」に関する一考察」『神戸大学留学生センター紀要』22, 41-57, 神戸大学留学生センター.

長谷川重和（1994）「数量詞の修飾について」『日本語・日本文化』20, 1-17, 大阪外国語大学.

原田康也・本田久美子（1997）「日本語の全称量化表現―「も」の〈全称並列〉について―」『早稲田大学語学教育研究所紀要』52, 35-56, 早稲田大学語学教育研究所.

原田康也・本田久美子（1998）「量・程度・限度―「ばかり」の意味解釈を中心にして―」『言語処理学会第 4 回年次大会発表論文集』, 434-437.

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」言語学研究会編『ことばの科学 10』43-66, むぎ書房.

飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版.

本田晶治（1982）「日本語の否定構文（1）―「否定副詞」の分布をめぐって（2）―」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』17(2), 1-23(234-212), 静岡大学教養部.

前田直子（1995）「ケレドモ・ガとノニとテモ―逆接を表す接続形式―」, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』496-505, くろしお出版.

前田直子（2009）『日本語の複文―条件文と原因・理由文の記述的研究―』くろしお出版.

宮城信（2016）「完全性を表す表現と副詞的修飾関係」『日本語文法』16（1），3-19.

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川学芸出版.

森山卓郎（2004）「日本語における比較の形式」『言語』33（10），32-39，大修館書店.

八尾由子（2007）「頻度を表す副詞の性質―トキドキとトキオリ―」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』24（1），95-105，岡山大学大学院文化科学研究科.

八尾由子（2009）「日本語の副詞シバシバ・タビタビとタマニ・マレニ」『文化共生学研究』8（1），41-53，岡山大学大学院文化科学研究科.

八亀裕美（2003）「形容詞の評価的意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15，13-40，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

矢澤真人（1987）「頻度と連続―連用修飾成分の被修飾単位について―」『学習院女子短期大学紀要』25，1-18，学習院女子短期大学.

湯本かほり（2015）「現代日本語における「こと」の研究―ノコト目的語およびNノコトダカラ構文を中心に―」平成27年度筑波大学博士論文.

渡辺昭太（2009）「“V 过”と「X は V したことがある」の意味機能の差異―時間詞との共起関係を中心に―」『言語情報科学』7，79-96，東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻.

渡辺実（1990）「程度副詞の体系」『国文学論集』23，1-16，上智大学国文学会.

Geis, M. L. & A. M. Zwicky（1971）On invited inference. *Linguistic Inquiry* 2. 561-566.

Horn, Lawrence R.（1989）*A natural history of negation.* Chicago: The University of Chicago Press.

Milsark, G. L.（1977）Toward an explanation of certain peculiarities of the existential construction in English. *Linguistic Analysis* 3. 1-29.

Sperber, D. & D. Wilson（1995）Relevance. *Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.（D，スペルベル・D，ウイルソン『関連性理論―伝達と認知―第2版』内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳，1999年，研究者出版）

参考資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）

『日本語学大辞典』（日本語学会編, 2018 年, 東京堂出版）

『明鏡国語辞典第二版』（北原博雄編, 2010 年, 大修館書店）

既発表論文との関係

第１章　序論

新規執筆

第２章　先行研究と本論文の位置付け

新規執筆

第３章　「全否定」と広義全称表現

大塚貴史（2020）「広義全称表現における 2 つのタイプ―全否定を表す「まったく」と「ぜんぜん」を中心に―」『日本語と日本文学』66, 101-111, 筑波大学日本語日本文学会.

第４章　「数量」と広義全称表現

大塚貴史（2020）「「みんな」に関する諸問題の検討と考察」『筑波日本語研究』24, 67-81, 筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室.

第５章　「頻度」と広義全称表現

大塚貴史（印刷中）「「いつも」と「常に」の意味」『筑波日本語研究』25, 筑波大学大学院博士課程人文社会系日本語学研究室.

第６章　「強調」と広義全称表現

大塚貴史（2020）「副詞「決して」の意味―条件的関係の不成立と非一回性―」『日本語文法』20(2), 74-90.

第７章　結論

新規執筆

※ すべての既発表論文に加筆・修正を施している。